
ケンタウロスと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケンタウロスと私

【Nコード】

N0485X

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

馬は良い。実に良い。それがサラブレッドだったりすると、もつと興奮する。そんな馬フェチである私、尾野^{おのひづめ}二十九日の前に現れた、半人半獣の郵便配達員、田中^{たなかとつま}東馬。田舎ではまだまだ珍しい、このケンタウロス族のオスに、私は今日も振り回されるのだった。「ていうか、お前如きが馬を名乗るのすらおこがましいんだよ!」「僕の存在全否定!？」

- 下品な表現が入ります
- 週一更新です
- そんなに長くない予定

プロローグ

田中は私を優しく優しく抱きしめて、ささやく。

まるで聞き分けのない子供をあやすように。宥めるように。そして睦言のように。

「忘れていませんか、二十九日さん。僕は男じゃないですよ」
「なにっ……言って……っ」

自分よりいくらか体温の高い逞しい胸に縋り付くようにして、私はしゃくり上げる。

一度崩壊した壁はそう易々と回復してはくれないらしい。

バカみたいだ、とぼんやりとした頭の隅ではそう理性が囁くのに、温もりを覚えた身体は言うことを聞いてくれない。

そんな私を甘やかすように、田中はますます腕の中にある身体を強く抱き込んでくる。

「僕は“オス”です。そこを忘れてもらっては困ります」
「……バカっ……」

ふと緩んだ腕から少しだけ身を離し見上げれば、そこにはいつもの如く彫刻のように整った田中の笑顔。

けれど睨み付けたその先にあった青氷の瞳の中に見つけたのは、消えることのない熱。

いつでもわたしを見つめ続けてきた、彼の。

「二十九日さん……」

掠れた低い声が名を呼んで、かすかに震えた私はゆっくりと目を閉じる。

遅れて重ねられた温もりと吐息にひどく安心を感じながら、甘く痺れる頭の中で、何でこんな事になっちゃったんだっけ、という不毛な疑問が渦巻いていた。

そう、あれは春。

この片田舎にひとりの郵便局員が配属されてきたのが始まりだった。

ブログ（後書き）

不定期更新です。

連載の合間に思いつき更新になると思いますが、お時間がある時に楽しんで頂ければ嬉しいです。

お前を馬とは認めない

馬は良い。実に良い。

なんと言ってもあのバランスの取れた美しい身体。光る毛並み。風になびくたてがみ。

知性の光を湛えたつぶらな黒い瞳も、懐くと頭を擦りつけてくるような仕草も、全てが愛おしくてたまらない、私の愛する存在。

だがしかし。

あくまで私、尾野おのひづめ二十九日が愛しているのは馬であって、馬人間ではない。絶対にだ。

「二十九日ひつめさん、二十九日ひつめさん、二十九日ひつめさん。今日はとてもいい天気ですよ！遠駆け日和だと思いませんか？僕ならいつでも準備オッケーですっ」

「黙れよ馬人間」

「ひどいっ！ひどいです、二十九日ひつめさん。何回言ったら直してくれるんですか。僕はあくまで半人半獣。馬人間ではありません！人間馬ですっ」

突っ込むところはそこでいいのか、田中。

「ていうか、お前如きが馬を名乗るのすらおこがましいんだよ」

「全否定！？僕の存在全否定ですか！！」

わざとらしく目の前で泣き崩れてみせるこの男——田中東馬たなかとうまの横

っ腹に、私は思いきり印鑑を投げつけ、当初の目的を強制的に思い出させる。

「とつとと受領印受け取って帰れ、郵便局員！」

「そんな乱暴さんな二十九日^{ひつめ}さんも素敵です！ あ、印鑑頂きます」

途端に真面目な顔つきに戻り、多少気持ち悪いことを呟きながらもてきばきと伝票にはんこを押していく。

そして玄関先に仁王立ちになってそれを見ていた私に、にっこりと笑顔を向けた。

「それでは、こちら荷物になります。これ、とっても重いんですよ。僕、親切な郵便配達員なんで運んであげますね。二十九日^{ひつめ}さんの部屋まで」

「さらつと上がるつとするな。全国の親切な郵便配達員さんに謝れ！」

「二十九日^{ひつめ}さんは結婚式までだめよ派なんですな。そんな風に僕を焦らすなんて、二十九日^{ひつめ}さん、意外とテクニシャン……」

「屠殺場へ行け。トラックは私が手配してやるから、今すぐに行け」

半眼で低く呟くと、田中はようやく玄関のドアを開けて頭を下げる。

「ふふふ、僕たちは半分馬ですが基本的人権を持った馬ですから。安心してください、ちゃんと戸籍もありますから、結婚して尾野から田中になれますよ！ それに僕、夫としてもすごく優良物件ですよ！ 真面目で！」

頬を染めてもじもじと主張する田中の姿に、最早切れかけていた

何かが盛大な音を立てて爆発する。

「独身女性の部屋に上がり込もうと画策する男のどこが真面目だ！」

玄関に飾られていた木彫りの熊を投げつければ腹立つほど簡単にそれを受け止め、田中はそのむかつくくらい美しい顔にとろけるような笑みを浮かべる。

「嬉しいなあ。僕のこと『男』って意識してくれてるんですね！」

「だ、誰がつ——」

「でも二十九日さん、間違ってますよ？」

ふ、と田中は肩で息をする私の耳元に唇を寄せる。

「俺は男じゃありません、『オス』です。ケンタウロス族生後23年、優良な雄馬ですよ」

わざとらしく吐息をかけられた耳を押さえて私が後ずさると、田中は満足そうににつこりと笑い、あつという間に駆けていった。くそう、無駄にいい走りしやがって。

取り残された私はぺたりと玄関先で座り込む。

そして手に戻された木彫りの熊に向かって、熱くなる頬を苦々しく思いながら呟いた。

「あんな馬、全然可愛くないっ……!!」

そもそもケンタウロス族とはなんぞや、というのが、それを初めて見た片田舎の住人達の疑問だった。

それもそのはず、異種族どころか外国人すら見ないこの片田舎。いくら都会ではもう当たり前だといっても、いきなり配属されてきたこの半人半獣の青年を前に、地区の長老的存在が発した言葉は「う、馬並みじゃのう」だったという。

最初は違和感放ちまくりの田中だったが、その生来の人懐っこさとギリシャ彫刻か！という美貌、そして仕事の速さからたちまち地区にとけ込んだ。

いや、とけ込んでしまうどころか、下は三つの幼女から上は九十のお婆さままで幅広い範囲の女性を虜にしまったのだ。

確かに見てくれは悪くはない。

燃えるように赤い髪は清潔に整えられ、それと反対に色素の薄い青色の瞳はいつでも柔らかく、どちらかと言えば柔和な印象を薄いフレームの眼鏡が引き締めて見せる。

彫りの深い日本人離れた美貌は眩しいくらいだし、制服に包まれた上半身は服の上から見ても引き締まっている。

そしてその下半身。

そこに存在するのは馬の身体。

それもこの馬フェチの私をして見とれずにはいられないほど美しい、栗毛のサラブレッド！

あああああ、上さえついていなければああああ！あの脳みそさえ乗っていなければああああ！！ブラッシングしてええええええええええええ！

寝室に引いた布団の上で、私はあまりの悔しさにごろごろと転げ回った。

拳を枕に打ち付けて、乱れた息を整える。落ち着け、落ち着くん
だ二十九日。

起きあがって姿勢を正すと、私は今し方の自分のいけない妄想――
中学生男子が河原で見つけた捨てエロ本に興奮してつい持ち帰っ

ちやったりするあの背徳感——を振り切り、枕元に置いておいた段ボールを手に取った。

こんな片田舎にも即日配送。うむ、パーフェクトだ、アマゾン。それがケンタウロス族の配送会社によって、ケンタウロス族の郵便配達員の手によってもたらされた物だとしても、この際関係ないべりべりと勢いよく箱を開封し、中から出てきた数冊の写真集に思わず頬ずり。

『サラブレッド列伝』 『サラブレッドの四季』 『日本の名馬100撰』 『サラブレッドの休日』

素敵すぎる。タイトルだけで鼻血が出そう。

これは中学生男子とエロ本の如く、私も興奮を抑えられない。

やべえええ、サラブレッドまじやべえええ。美しすぎる、エロ過ぎる！！

この陽に輝く美しい毛並み、細くも引き締まった長い足、程良く筋肉の付いた胸、腿、尻！

たまらん。実にけしからん。

この家に誰かがいれば不審がられるくらい下品な声を上げつつ、私の幸福な夜はそうして過ぎていくのだった。

お前のその目はビー玉か？

三十歳の朝は早い。

地区の外れにひっそりと建つ、一人で暮らすには無駄に広い平屋。その家中の雨戸を開けて回るのが、私が起きて身支度をする前にまですること。

それから顔を洗って髪を整え、一番茶と炊きあがったご飯を仏壇に供え手を合わせる。

じいちゃん、ばあちゃん、おはよう。

心の中でそう声を掛けると、写真の中のふたりと目を合わせる。

私のことを最後まで心配し、愛してくれたふたりが残してくれたこの家が五年前に東京から戻ってきた私の今の居場所。

今日も元気に過ごすことを誓うと、私は朝食前に勝手口から外へと足を向けた。

自分の朝食よりも優先すること。それは、厩舎にする我が愛馬『アルカディア号』の世話である。

私が姿を見せると、昇り始めた朝日に照らされて美しい姿をした黒鹿毛のアルカディア号は、嬉しそうに私の肩に鼻先を擦りつけた。ああもおおお可愛い！！

私も負けずに額に顔を擦りつけ、しばらく一頭と一人は朝の至福の時間に浸るのだった。

朝一番、一回目の餌やりを済ますと後ろ髪を引かれつつ家へ戻って自分のご飯。簡単にお茶漬けとインスタントみそ汁と緑茶。これが定番。

さっと片付けると再度アルカディア号の所へ。

水を用意した裏の空き地へと放してやると、アルカディア号は嬉しそうに駆けていく。その幸せそうな姿を見ながら、私は彼女の寝

床を掃除したり餌を追加したりしていると、時間はもう午前中を半ば過ぎていたのだった。

全てが愛馬中心の生活。

それを幸福だと思いこそすれ、どこかへ遊びに行きたいだとか誰かとお茶でも飲みながらのんびりしたいだとか、そういうことは一切ない。あり得ない。

なので、この私とアルカディア号とのいちゃいちゃ時間を邪魔する奴は、マジで馬に蹴られてなんちゃらしてしまえばいい。

「二十九日さーん、二十九日さん、僕です！ 田中東馬が参りましたよー！」

ただし、相手が馬の場合は何に蹴っ飛ばしてもらえばいいのか、未だにわからないでいる。

「表に郵便受けを作ったんだが、その目はビー玉か！？」

「うふふ。あれって僕専用の郵便受けですよね！ 心配しなくても僕からの手紙は三通ほど入れておきましたから」

「持って帰れ、今すぐに！」

「大丈夫です、きちんと切手も貼って局を通してあります！」

「誰がそこを気にした！？ ねえ誰が！？」

もうやだこのケンタウロス。

「あ、これお届け物です。簡易書留なので判子をお願いします」

斜め上のやり取りにがつくりと肩を落とした私に、何度怒鳴られても懲りないこの馬男はにっこりと笑って郵便物を示す。最初から言えよ、最初から。

私は仕方なく田中に表に回るように言うと、自分は勝手口から家の中へと入る。

くっそう、この後存分にアルカディア号といちゃついて、念入りにブラッシングしてやろうと思っていたのに！

ああもう早く済まそう。誰だよ、簡易書留なんてわざわざ判子のあるような物送ってきやがったのはあ！

判子を持って玄関に行けば、おまえは三軒先の宮本さんちの柴犬か！と思うほどに尻尾を振って待つ——決して比喻でなく——田中の姿。

「ほら、判子さつさと押して、さつさと帰れ」

「て・れ・や・さんっ」

このこのおつ、と前足を脇腹に擦りつけてくる田中の横っ腹に蹴りを入れる。

そうか、私がこの馬を蹴ればいいのか。なるほど。

「いたっ！ 二十九日さんの愛が痛いっ！」

「その邪魔な尻尾を切って筆にしてやろうか！」

「そんなに僕のこと……」

「そこ頼める所じゃないよ！ 絶対に間違ってるよ！？」

落ち着け、二十九日。相手にすればするほど、こいつの思う壺だ。渡した判子で丁寧に受領印を押して確認している田中の身体が、玄関からの光を浴びて滑らかに輝く。やばい。

小さな動きと共にぴくりと動く腿から尻にかけてのラインなんか、そこらの競走馬にも引けを取らない美しさ。

知らずに荒い息を繰り返す私に気付いた田中は、その端正な顔に艶やかな笑みを浮かべてゆつくりと私に身体を近付けてきた。

上さえ見なければっ、上さえ見なければ馬なのに……！！

騙されるな二十九日、これは田中だぞ！ 田中なんだぞ！？

なけなしの理性が私に警告するが、私はどうしても奴の身体から目が離せない。

「ねえ、二十九日さん」

局の制服に包まれた上半身を折り曲げ、田中は低く甘い声で私を惑わす。

「触りたいんじゃないんですか？ 僕の毛並み。とっても美しいでしょう？ いいんですよ、ブラッシングしても……」

あなただけ特別に、と付け加えることも忘れないあたりが腹黒い。わかつている。この悪魔の囁きに耳を傾けたが最後、次からは「僕にあんなことしたくせに」とか「あの時は気持ちよかったです」とか何とか言つて、既成事実にしようとするに違いないんだこの馬は。

ああ、そこまでわかつていてなぜきっぱり断れない、二十九日！誘うように振られる尻尾につい手を伸ばしそうになった瞬間。

裏からアルカディア号の鋭い嘶きが響き渡り、私は危ういところで伸ばした手を引っ込めることに成功した。

あ、危ねえ。マジで魂売るところだった……。

「ちっ、あの年増が……」

ちよつと待て田中、アルカディア号は確かにちよつとお年を召しているが、おまえにそこまで言われる筋合いはないっ！

ということ、私はさくつと田中の手から書留を奪うと開いたままだった玄関の外へと奴を蹴り出す。

かーえーれーっ、かーえーれーっ。

「今回は邪魔が入りましたけど、僕は諦めませんからねっ」

何その捨て台詞。お前に次などあるわけがない！

後ろ足で器用にバックをしつつうつとりとした視線を送ってくる田中を、ため息と共に送り出す。最早怒る気力も惜しい。

「……何でそこまで私に執着するわけ？」

ぼつりと零れた私の言葉に田中は一瞬、驚いたようにその綺麗な氷色の瞳を見開いた。少しの間不思議な感情の揺れがその瞳に現れ、けれどすぐにそれは微笑みへと変わる。

いつも見せるものとは全く違う、どこか私の心を落ち着かせなくなるような、そんな笑み。

そして少し厚めの唇に指を当てて囁く。

「それはまだ秘密です」

切れ端とおはじき

午後十時の最後の餌やりを終え、ブラッシングでお互いの愛を確認した私はアルカディア号を休ませるためにしぶしぶと母屋へと引き上げた。

まあいい、昨日のグラビアホースたちと妄想の中で戯れるという上級者の楽しみが私を待っている。

ふふふと口元からマジに流れる涎を拭いつつ、風呂上がりのご褒美ビールを一本手にした私は、そこで今日届いた書留の存在を思い出した。

東京から田舎に引つ込んだ馬フェチの私に、書留なんて物を送ってくるのはうちの両親か仕事関係者だけだ。あえて言おう、友達などひとりも存在しないと。

また見合い写真とかだったら嫌だなあ、とか思いつつ素っ気ない茶封筒を開いてみれば、出てきたのは本社に頼んでいた資料の束だった。

まあ急ぐ物でもないし、今日は飲んじゃったし……と色々言い訳をしつつ、そのまま多少乱暴にダイニングテーブルに書類を放る。

すると、その勢いで書類の間から何かの紙がひらりと舞った。

小さな紙の切れ端。見覚えのある筆圧の強い文字。走り書きの言葉に息を、止める。

“どこにいる？ 会いたい”

過去の亡霊が甦ったように、その言葉が熱を持って身体の中に浸透してくる。

囁かれた耳に、少しだけ欲望に掠れる懐かしい声。

優しい言葉なんてひとつも口にしなかった癖に、別れを切り出そうとすると必ずそれを遮った唇の感触。私から言葉を奪うようにいつも、与えられるのは全てを飲み込んでしまうようなそんな触れあい——。

がつつと床に何かが落ちる音に幻は振り払われる。

まだ充分に中身が残っていたビールが床に広がり、裸足の足に冷たい感触が届いたところで、私はようやく手近の布巾を取ってそれを拭い始めた。

身体が、心がまだ、震える。

どんなに物理的に距離をとったとしても、悔しいほど私は未だ『彼』に囚われたままだと、あまりの滑稽さに笑いさえ覚える。

「バカみたい……」

ため息とともに零れた言葉に、切れ端がかさりと音を立てた。

ビールを拭った布巾を洗う気力も無く、勿体ないけれどそのままゴミ箱に投げ捨てると、一瞬迷ってからその紙は元の茶封筒の中へと封印する。

見たくないけれど捨てられない。今の私の気持ちと同じように。

なんだか何もかもやる気をなくし、駄目にした替わりのビールをもう一本空けるのも躊躇われて仕方なく自室へと足を向ける。

最早年頃の女性の部屋とも思えぬ万年床に思い切り寝転がり、もう一度軽くため息。

会社に友人もいなければ、私の今の住所を知っているのは直属の上司くらいだし、他部署で仕事上なら関わりのない『彼』においてそれと個人情報を開示したりはまさかしないだろう。

そう冷静に考えてみても、何だか胸に巣くったもやもやは一向に晴れてくれない。

一体私は何を望んでいる？

『彼』にばれずにこのままやり過ごし、お互いに忘れてしまうつと？——かもしれない。

それとも、なりふり構わず『彼』にここまで追いかけてきてほしい？

おまえが必要だと、そんな嘘をまた囁いて抱かれないわけ？——わからない。

考えれば考えるほどに泥沼にはまる思考に嫌気が差し、寝てしまおうかと枕元の電気スタンドに手を伸ばしたところで、そこに置いてあった手紙の束に目がいった。

それは毎日届けられるあのケンタウロスからの手紙。

本気なのか、娯楽の少ない田舎での駆け引きのような遊びなのか。よくわからないまま受け取っている手紙は、彼が私に会いに来ない日にも、いつのまにか設置した郵便受けの中にごく自然に入っているのだった。

まだ一度も開けたことのない、それ。田中はそれについては何も触れることはない。

白いシンプルな封筒に、私の名前。裏には律儀に自分の住所と名前が書かれていて、普段のストーカー並みの態度と真逆で、ちょっと笑えた。

今日の言葉通りに封筒の表にはきちんと切手が貼られ、ご丁寧に消印まで押されている。内勤の局員が彼の行動に対してどう思っているのか、聞きたいような聞きたくないような。

この際だから、と私はその手紙を一通、思い切って開封してみることにした。

私の名前だけ延々と書かれていたり、日々の私の行動記録が逐一書かれていたりしたら、真面目に駐在さんを頼ろう——そう心に決めて、封を破る。

すると中から掌の上にこぼれ落ちてきたのは、ガラスのおはじき二つ。

透明に赤い色が混じったものと、青色のと。スタンドの灯りだけ

の部屋で、まるで宝石か何かのようにきらきらと光を反射する。

驚いて封筒の中を覗き込むと、そこには小さなメモのような手紙がひとつ。

『河合さんちのミニちゃん提供です。女はきらきらしたものが好きなのよ！とのこと』

表書きと同じ綺麗な、ただどこか大らかな字でただそれだけが書いてある。

確か河合さんとのミニちゃんはまだ四歳だったと思うけど、まさか田中、恋愛相談とかしてるんじゃないだろうな……。すごくあり得るが。

興味を引かれてもうひとつ、封を開けてみる。まるでクリスマス前にもらう、アドベントカレンダーを開ける時のようにどこか躍る心。

今度掌に落ちてきたのは、すっかり乾いてしまった緑のクローバー。しかも四葉。

『配達の中で見つけました。素敵なのが二十九日さんに起こりますように』

開けば次から次へと小さなプレゼントが転がり落ちてくる。わずかずつ気持ちちが降り積もるように、押しつけない優しさで包み込まれるように。

『この地図でわかりますか？ この間見つけた絶景夕陽スポットです』

『携帯で撮ったからちょっと小さいですけど、この雲、馬の形に似ていると思うんです』

『美女撫子という花の種をもらったのでお裾分け。 花の名前を聞いた時、二十九日さんが浮かびました』

胸がひどく苦しい。

恋はいつでも身を抉るような、心を切り刻むようなものだったはずなのに……こんな美しい気持ちを私は知らない。私には返す術がない。

小さい頃、まだ小さかった私の手にすり寄ってきた子馬に抱いた、暖かな気持ちの裏の大きな恐怖感に似ている。頼りない命に抱いた、不安。それにあの子馬は――。

いつの間にか冷え切っていた身体を抱き締め、私は軽く頭を振った。

これは違う。これは、あのメモを見て心が揺れていただけ。絶対に違う。

布団の上に散らばった物と手紙を手早くまとめ、近くにあった空の缶の中へとしまい込む。何もかもに蓋をして、今は、まだ。

スタンドの灯りを消して、何かから身を守るようにして布団に潜る。

眠る前に誰かの顔が浮かんだけれど、それが誰だったのかわかる前に私は眠りに落ちた。

「知っていますか、二十九日さん。ドライブスルーってケンタウロスでも可なんですよ？」

「お前は黙って北の大地でソリでも引いてろ！」

「試される大地ですね、婚前旅行には最適ですよねっ。二十九日さ

ん、やっぱり時計台とか行きたいですか？ それとも羊ヶ丘で羊を食べながら羊を愛でるとか？ 僕、同族はちよつとあれなんですけど、羊だったら食べられますよ」

「色々ツツコミが追いつかないんだけど！？」

「すみません、僕としたことが少し急ぎすぎましたね。そうですね、まずは近くの温泉に日帰りくらいからスタートですよ！ 最近はケンタウロス旅客専用の部屋とかあるんですよ。あ、行き帰りは当然僕に乗って頂いて結構です！ 本来僕たちは鞍を付けられるなんて屈辱の極みなんです、二十九日は特別です！ なんなら付けずに乗って頂いても。僕、絶対に振り落したりしませんから。ああ……二十九日さんのお尻、素敵な感触なんですよ……」

「ばんえい競馬場に連絡してやるから、心おきなく北で試されていい」

「心配要りませんよ。二十九日さんのひとりくらい、僕は背に乗せていても第二障害を余裕で越えていきますから！」

「今、すごい自然に重りの四百八十キロと同じ扱いにされたんだけど！？」

「新婚旅行は北海道で牧場巡りもいいですよ……、可愛い子馬を見ながら僕たちの家族計画を話し合うなんて、幸せすぎて……」
「私産まないよ！？ 子馬なんて産まないよ！？」

今朝目が覚めて、何とも言えない重苦しい気持ちに悩まされた私がバカだった。

どんな顔して会ったらいんだとか、手紙についてなんか言ったほうがいいんだろうかと、餌を食べていたアルカディア号に心配をかけてしまったくらい考え込んだというのに、この馬は！

珍しい白いシンプルなシャツ姿で現れたかと思ったら、「僕、今日お休みなんです！」から始まった一連の言葉に、私は個人的に気まずいことも悩みの種である昨日のメモのことも忘れ、いつも通り

の会話を繰り広げてしまっていた。

悩んだ私がバカだった。そう結論づけてため息をつく、突然ぽん、と頭の上に暖かな掌の感触。

慌てて見上げると、そこにはひどく優しい瞳をした田中の笑顔。氷のように薄い青がじつと私を見つめ、何かを許すように細められた。色はまるで透き通るほどなのにその奥にあるものは深く、今の私の所からでは絶対に届かない。

いつもは豊かに変わる表情で気にならないその美貌が、ただひたすらに私の前にあった。

形の良い眉、男らしさを損なうことのない程度に長い睫毛、高すぎないすうつと通った鼻梁の線。その下の、笑うとどこか子供っぽく見える大きな口が今は黙って、少し乾いた唇がかすかに笑みの形に持ち上げられている。

理屈も何も抜きに、私はその切なさにも何とも言えなくなってしまうた。

そうつと髪を梳く大きく温かな手が耳を掠め、私は彼から目を逸らし、再び俯いた。

彼は待っている。

何故なんてわからないけれど、ずっとずっと、私のことを待っているんだ。まだ、何も答えられない私を――。

「……ドライブスルーは却下だけど、絶景の夕陽コースくらいは付き合ってもいい」

そこに踏み込んでいけない私はやっぱり手前で立ち止まる。

それは絶対に置いて行かれない事を知って駄々を捏ねる子供のようにはずるいことなのに、田中はどうしようもないくらいに綺麗な笑顔で私に手を差し出した。

「ご案内します！」

今はまだ、この手の距離で――。

昭夫じいと茂みと不安

どこかで誰かが歌っている。

遠い外国の言葉で、シンプルな旋律がゆらりゆらりと揺れるようにして響く。どこか甘い歌声。私はこの歌を——知っている？

思い出せそうで思い出せない、そんな喉に引っかかった魚の小骨のような思いに、思わず唸って眉を寄せる。すると歌声は途切れ、代わりにするりと頭から肩までを暖かな体温が通り抜けた。優しく、優しく、何度も肩口までの髪を梳いていく指先。

それが耳元を掠め、何とも言えない感触に私はびくりと身体を揺らした。慌てたように離れる体温。

それを追いかけるように、目を開けた私の視線の先にあったのは——馬の尻、だった。

「どわあっ」

まだ半分以上寝ぼけた私がびっくりして飛び退くと、今度は背中に何か硬いものがぶち当たる。そこはかとなない温もり。

おい、待て待てちょっと待て。なんで腹に腕が回ってくるんだ！

「この尻の形は田中か。田中なんだな！？」

「僕のお尻の形までばっちり把握している、そんな二十九日さんが大好きです！」

「首に鼻を寄せるなっ！それからどさくさに紛れて、腕で下乳を触るんじゃないっ！」

「今日は初めての下乳記念日ですね」

「私は今日、人生で初めて馬肉を食おうかと思ってる」

「僕はあなたにならいつ食べられてもいいですっ」

人を勝手にヤンデレ要員にするな。っていうかそもそもデレてない。

なぜか私を背後からぎゅうぎゅう抱き締めている田中が、下乳とお腹の越えてはならない微妙なラインをそわりと撫でる。そんな不穏な腕を思い切りつねり、私は素早く田中の腕から抜け出した。

しまった、お奨めスポットとやらで気を抜いていたら、うっかりうとうとしてしまっていたらしい。前日の寝不足がこんな危機的状況を生み出すとは……大失態だ。

心なしか体温の上がった頬を手で隠しつつ、ちらりと横目で田中を見れば、その美しい顔はだらしく緩みきっていた。

休日だからか、無造作に降ろされた髪がゆるく波を打って額にかかり、田中をいつもと違う印象に見せている。まったく忌々しいほどに顔がいいな、こいつは。

「もう少し寝ていてもよかったのに……」

少し不満げに呟く田中の眼鏡の奥が、とろけるように甘い感情を燦らせる。赤い色の癖っ毛が風に揺れ、筋張った首筋を撫でて流れた。

そんな一連の流れに背中を駆け上がるような感情を覚え小さく震えると、すかさず田中がその身体をぴったりと寄せてくる。男だからか、馬だからか、肩と腕に感じる体温は心地いい。だがかし！私はその、さっきまで枕にしていた田中の横っ腹に、思い切り平手を叩きつけてやる。おっといい音。

「調教？ ついに調教プレイ!？」

「もうそろそろナルニア国とかに帰れよ、ケンタウロス」

「勿体ないですね、あれ。角笛かき鳴らす王子なんかより、ヒロ

インはケンタウロスを選ぶべきでしたよ、絶対！　だって、僕らのほうがずっとセクシーでしょう？」

「下半分が馬なのが問題だったんだろうな。ついでに言うと、私は上半分が人間なのが気に入らないんだが、そろそろ理解してくれ」

「ふふふ、そんな照れちゃって！　さつき二十九日さん、僕のお腹で眠りながら、ものすごく優しい手つきで僕を撫で回すものだから、僕は覚悟をしましたよ」

「聞かないぞ。おまえが何を覚悟したのか、絶対に聞かないからな！」

あああああ、壮絶に不本意だ。嘘を付けとか全く言えない。だってこの手があの上質のベルベットのような手触りを覚えてる。

呼吸とともに優しく揺れる暖かな身体と、短いけれどちっとも攻撃的じゃない毛並み。時折腕に触れた尾のこさばゆさ。回した手が掴んだ硬い尻。どんなに素晴らしいグラビアの馬からも味わえない、三次元の感触の数々。

ちくしょおおおお、舐めまわしてええええ！！

ぎらぎらと欲望に充ち満ちた目で田中を見れば、奴は何を思ったか深く頷き、身体を横倒しにして私を見つめ返してきた。その潤んだ瞳は何だ、田中。

「初めてが大自然って、ちょっと馬っぽくていいですね……」

「うわああああ！　微妙に否定出来ない気持ちがあつくうううう！！」

私が自棄になって田中の背中を踏みつけていると、近くの草むららがさつと大きな音を立てて揺れた。通りかかったのは、運悪く地区の長老的存在である昭夫じい。取り繕う暇もなく、この惨状がじいの前に晒される。この場合、運が悪いと感じたのは私のみ。

私は田中を踏んだまま固まり、田中は嬉しそうに尻尾を揺らし、

昭夫じいはにやりと笑みを浮かべた。

「一二三ひふみの孫娘は積極的じゃのう！ 馬を押し倒すとはなかなか…」

昭夫じいのその言葉に、このじいをどこの山に埋めるか迷って沈黙した私の隙について起きあがった田中が叫ぶ。

「失礼ですよ、昭夫さん！」

どこか凜々しく、にやにや顔の昭夫じいを睨んだ田中の横顔に、私の心は不覚にも少しときめく。そして振り返った田中は力強く頷くと、まかせとけと言わんばかりに胸を張り、その続きを口にした。

「だから何度言ったらわかるんですか、僕は馬じゃなくてケンタウロスですっ！ 僕を馬扱いしているのは二十九日さんだけなんですっ」

「そこか！？ 重要なのは本当にそこだけなのか！？」

「当然ですよ、二十九日さん。僕はあなたのケンタウロスなんですから！」

返せ。私のさっきの無駄なときめきを、今すぐに返せ。

がつくりとうなだれた私に近寄ってくると、昭夫じいはわかっているとでも言うように肩をぽんぽんと叩く。 お、珍しく空気を読んだかと思っただが。

「ここじゃいくら何でも丸見えじゃ。ほら、そのしげみの奥、あそこなんかは穴場じゃぞ」

「田中、今すぐ真光寺の住職連れてこい」

「嫌です。あそこの住職、競馬で負けると僕に塩撒くんですよ!？」

助けてアルカディア号。この田舎にまともな人間なんかいないんだ。そうだ、そうに違いない。都会育ちの私が足を踏み入れてはならない魔境だったんだ。

「心配するでないぞ、一二三とこの。この地区には奇跡的に獣医がおる。立派な子馬を産むんじゃぞ!」

「頼むからもう帰れ。どこまでも帰れ。仏のお迎えが必要だったら手伝うから」

「そうですよ、昭夫さん。せっかく初めてのデートなんですよ? 気を利かせてくれないと、もう二度と本屋から『本気の新妻一発乱れ咲き! 純生シリーズ』とかお届けしませんからね」

「そ、それは困るのう」

明らかにじじいが読むには良からぬ本のタイトルを爽やかに告げ、満面の笑みを浮かべた田中が前足で昭夫じいの背中を押す。

早く田中と二人つきりになりたいわけでも、昭夫じい推薦の茂みを使用したいわけでもないが、とにかくじいがいるとこの場がややこしくなることだけは、はっきりとわかっていたのでつい私にも背中を押す。

「あと、僕は奥さんとも仲良しですからね。僕たちのことおもしろ可笑しく噂になった日には、『趣味の園芸』だと思っていた本の真相が奥様にうつかりばれちゃうことも、無きにしも非ずですよ」

じじい、おまえは中学生か! という叫びは飲み込んで、私は意外な思いで田中の横顔を見上げていた。

こいつのことだから噂になれば、「噂万々歳!」「これで僕たち恋人認定ですね!」とか嬉々として言い出すのかと思っていたのに

……。そんな私の心を読んだかのように、こちらをちらつと見た田中の薄い青色が、優しい笑みの形に細められた。

「若いもんが二人してか弱い老人いじめよって！ 今に見ておれ！ 近い内に婆さんの竹の子料理、死ぬほど味わわせてやるからの！」

よくわからない捨てぜりふを吐いて、昭夫じいが年齢の割に機敏な動きで家の方向へと走り去っていく。すごいぞ、九十歳。

しかし素直に「今度ご飯食べに来てね」って言えばいいものを。あのじいもうちの今は亡き一二三じいちゃんという勝負の意地っぱり具合だ。

「まったく……せつかく二十九日さんとデートだったのに、もう夕方ですよ！」

「おかしいな。私は野良ケンタウロスの散歩をしてやっただけだけだ」

「いいんです、それでも。僕は幸せですから」

いつも通りの私の言葉にさらりとそんな言葉を返し、田中はそうと私の手を握った。

まるで壊れ物を扱うようなその触れ方に、なんだか怒る気にもなれずに私はただ少しその手に力を込める。

男の、手だった。私の手を包み込む、大きな掌。高い体温。紙を扱うことが多い所為なのか、指は少しだけかさついている。その指が、私の手の甲を優しく撫でた。

何だか、少しだけ泣きそうな気持ちになって眉を潜める。すると、握られた手が強く引かれて、私は田中の胸へと導かれた。

「ちよつと……！」

「お願い」

どこか苦しげに息を吐いて、頭の上から低い声がする。
小さいのに、拒否出来ない。

「お願いだから、少しだけ……」

握った手よりずっと、頬に触れた身体のほうが熱かった。硬い胸板に押しつけられて、少しだけ息苦しい。太陽の匂い、彼の匂い。緩く羽織られたシャツの隙間から触れる肌が、しつとりと私の肌に触れ、どうしようもない気分させられる。どうして？

どうして、いつもそんなに優しくするの。

どうして、いつもそんなに苦しそうに私を見るの。

ふざけてばかりいるくせに、どうしてこんな時ばかり――。

頭のでっぺんに唇を寄せ、田中は触れた時と同じようにそつと私の体を離す。

「……夕陽、落ちてしまいましたね」

何事もなかったかのように笑って。だけど、その氷色の瞳だけが、未だ消えない熱を湛えてそこにあった。

その中に映る私は今、どんな顔をしているんだろう。

「夕陽なんて、いつだって見られる」

いつも通りの素直じゃない言葉に、田中は安堵したように微笑んだ。

肯定も、否定もせず、ただふんわりと笑う。どこか儚いような、そんな笑み。

「そうですね。……じゃあ今日は帰りましょうか」

アルカディアさんも待っていますしね、と続けられた言葉に頷いて、自然に差し出されたその手を取る。それはまるで私の為の場所のように。

無言で歩きながら、ふと私はこの男にこんな風に求められたのが初めてだったことに気が付いた。

口では何だかんだと言ってくるくせに、私に無理に求めることはしない田中は、指先が触れることさえひどく恐れる。

今、こうして隣にいる田中という男は、どこかに何かとても歪なものを感じさせる。私にはそれが不安でたまらなかった。

不審者と夜の痛み

「ねえ、お願いです二十九日さん……、入れさせてください」
「断る」

「いじわる言わないでください。……ねえいいでしょう？」

「駄目だ！」

「先っぽだけでもいいんです、ね？」

「ね、じゃないっ！ そんなの突っ込んだら壊れるだろうがっ」

「大丈夫、優しく入れますから……」

「や、だって言って……っ」

優しい、甘えたような口調の癖に、やってることは相変わらず。
この根拠に欠ける押せ押せ姿勢はなんなんだ、田中！ 半分馬だ
からって調子にのんなよ！

ぐぐぐ、と迫り来るうつとりとした顔が、今日も美しいので余計
に腹立つ。

「お前達、昼間からずいぶん卑猥な会話だな」

もはや日常となりつつある田中との攻防中。

突然、後ろからかけられた声に私は吃驚して、思わず掴んでいた
郵便受けの蓋を放す。しまったああ！

「隙あり！」

慌てて再び手を伸ばすものの、時すでに遅し。目の前のバカ馬は、
手にしていた手紙の束をその中へと突っ込んでしまった。ちくしょ

おおおお！

毎日、毎日、何の嫌がらせだこの馬鹿は！

一日一通ならまだしも、週末を挟むと二桁に増えるってなんの法則だ！

「うちの郵便受けを壊すつもりか、この馬鹿馬がー！」

「馬鹿に馬を付けたら、頭痛が痛いと同じになりませんか？ 馬から落馬するとか」

「むかつくううう、心底むかつくううう！」

足を振り上げて尻を蹴りつけるも、なんでそんな嬉しそうな顔をするんだ、田中。気持ち悪い、気持ち悪いよ、このケンタウロス！

「僕、SかMかって言われれば、ちよつとMかもしれないです……」

「頬を染めるな。目を潤ませるな。もう息もするな。存在するな」

「言葉攻めもいいですね。あ、もちろん、二十九日さん限定ですから！」

安心して下さいねっ、と目尻を下げてとろけるような笑みを向ける田中に、もはや私の打てる手だては無いに等しい。ていうか、無い。ないない、無理無理。

誰か猟友会の人、と辺りに視線を走らせてようやく思い出す。私の後ろに立ち、無表情にこの光景を眺めている人物に。

「おい、駐在。わいせつ物陳列罪でこの馬をぶちこんどけ」

「個人の性癖に地方警察職員が口を挟むことは出来ない。頑張つて励んでくれ。子供——いや、子馬が出来たら経過観察をさせると杉村獣医が言っていたぞ」

「お前ら全員、下の毛だけ禿げろ」

「微妙に嫌な呪いをかけるな、尻の残念な尾野」

「今の会話に何か尻が関係あった!?」

田中のような派手さはないが、日本男児としては充分整った顔立ち。私の言葉に大野は涼やかな目元を歪ませ、にやりと意地の悪い笑みを浮かべた。忘れてた、こいつも抹殺対象その二だった。

小さい頃、じいちゃんのこの家に遊びに来るたびにどつきまわされた記憶が甦る。

そうだ、その時もこいつはこんな顔で笑って、私を川や沼に突き落としたりしてたっけ……。このドエス警官が!!

「気にするな。尻は俺の趣味だ。残念ながら、お前はその中に入っていない」

「うわあ、よかったあ」

真面目な警察官その物の顔でそんな外道なセリフを口にする大野に、私はひたすら棒読みで答える。こいつらの独身寮、早く潰れればいいのに。

誰だよこいつを公務員に合格なんかさせてんのは。明らかにこいつはあっち側の何かだろうが!

「ちょっと、大野さん! この前も言いましたけど、僕の二十九日さんには尻も胸も必要ないんですよ。こんなにぶんぶんいい匂いさせてるだけで、もう僕のわいせつ物が……」

「いいか、言うなよ。その先は絶対に言うなよ」

「田中、真夜中のボーイズトークは女性に言うものではない」

「お前もナチュラルに気色悪いんだよ、駐在!」

どうしよう、深刻な突っ込み不足だ。ボケにボケを重ねてくる奴らを私一人でどうしろって言うんだ。

とにかく混ぜては危険だんだから、ひとりひとり対処しよう。

そうしよう。

だが、その前に――。

「あいたっ！ 何でっ！？ 何で僕にかかと落としなんですかつ、二十九日さんっ！」

「ほら、嬉しいんだろ？ 嬉しかったらもつと笑えよ、田中！」

「ちよっ、二十九日さんっ、そこは駄目ですっ！ そこはちよつと微妙なっ……ああ！」

「さすがケンタウロス田中。尾野の何かを目覚めさせたようだぞ」

どこぞの微妙で繊細な場所を安全靴で思い切り踏みつけ、頬を上げさせたままぐったりと動かなくなった田中を後目に、私はようやくもう一人の変態に用件を質す。

これでまともに返答がないようだったら、大好きな尻――主にここで横になっている田中の――に、失神するほど顔を押しつけてやるうと心に誓う。まさにトラウマ。

「落ち着け、尾野。危険な思想は捨てるんだ」

「うるさいっ！ 用件を言え、用件を！」

半眼で怒鳴りつければ、やや青ざめた顔の大野が手にしていたチラシを私に渡す。

藁半紙に手作り感溢れるポップなイラスト。どこの女子高生だっという特徴のある文字。

『気をつけよう 最近、地区に不審者の目撃情報あり』

わあい、可愛いクマのイラスト！

「……きもっ」

「失礼な奴だな。だから尻が小さいままなんだぞ、尾野」

「いい加減尻から話題を放さないと、田中の尻を味わわせるけど？」
「……ごめんなさい」

よし、謎の達成感。今日も詰まらぬものを斬ってしまった。

にしても、と私は可愛いイラストも文字も脳内でスルーをしつつ、改めてそのチラシに目を通す。

こんな片田舎で不審者情報なんて、珍しいこともあるものだ。大体こんな所、じじいとばあとお変態くらいしかないし、歩いていればよそ者だつてすぐにばれる。空き巣や強盗が狙うような金持ちも存在しない。

何が目的でうちよろしてるんだか、この不審者は。

「お前たち変態が放つ空気がこういうのを呼び寄せるんだ。お前たちが悪い」

「地区で評判のイケメン独身たちを掴まえて何を言う。とにかく尾野、お前は乳も尻も残念だが、一応独身女性の一人住まいだからな何かあつたらすぐに通報しろ。戸締まりにはくれぐれも気を付けるんだぞ」

「途中の何かに引っかかりを覚えるけど、一応気を付ける」

口では何だかんだと言うが、この大野が職務に忠実な警官であることには間違いはない。とりあえず素直に頷く。

その私の頭を軽く叩くと、大野は近くに止めてあつた自転車に乗って去っていった。もう二度と来てくれるな。

さて私も仕事に戻るかなあ、と家へ向けたその足に絡みつく腕が二本。

「ひどいですう、ひどいですよ、二十九日さああんっ」

「職務怠慢だぞ、郵便局員。こんな所に転がってないで、さっさと

配達に戻れ」

「今日はもう終わったんですつ。だから一秒でも長く二十九日さんの傍にいようって駆けつけたのに、こんなのひどいつ。僕は色々きちんと考えていたんですよ！？ 初めてはこの家で、床に敷いた藁のちよつとちくちくした感触にくすぐったそうに身をよじる二十九日さん……。そんなあなたを僕は優しく掴まえて——」

「安全靴は鉄板入りだと知っているのか、田中」

「いやああつ！ 駄目ですつ！ それは駄目ですつてば、二十九日さん！ 僕のつ僕のがあああ！！」

疲れた。物凄く、疲れた。

いらんものを踏みつけて普段使わない筋肉まで使ったもんだから、身体の節々が痛みを訴えている。筋肉痛がすぐに現れるだけまだいいのか。

風呂上がりに軽くストレッチをしつつ、私は夕方の会話を思い出していた。無論、田中以外の部分だ。

何か引つかかるんだよなあ、不審者。

『ぼさぼさの天パ、無精髭、長身。外見は限りなくクマに近し。大きな荷物を所持していた、との情報もあり。テントで寝泊まりしていることも考えられるので、夜の外出には気を付けられたし』

なんか、こういう外見の人間をひとり知っている気がするんだよ。すごく嫌なことに。

まさかとは思うが、そのまさかを転がってくる男。

脳裏に浮かんだその面影に、私はぶるりと身を震わせる。いやい

やいやいや、ない。今の忙しい時期、こんな所に出没するほどあれば暇じゃないだろう。ないと思いたい。

大体、いたとしても私に何の関係がある？

ごろりと寝床に仰向けになって、私は枕元に無造作に置かれた茶封筒を手を取った。書類の束に手をつ突っ込んで、一枚のメモを取り出す。

それはこの前、私を動揺させた言葉の欠片。捨てるに捨てられず、無視も出来ず、なんとなく手にしてしまう憎たらしい文字。

『どこにいる？ 会いたい』

私は会いたくない。会えない。だけど、それは本当に？

あの頃に戻りたくなくて、顔を合わせたくもなくて、ここに逃げてきた。それは真実。

けれど、もしも。もしも、あの人が本当に追いかけて来たら、私はどうする？

そもそも、何で私は何も言わずにここに来たんだろう。

直接会って、別れを告げればそれですんだはずなのに。何もかも、それで終わりに出来たはずなのに、どうして言えなかった？

不意に鈍く痛みはじめたこめかみを押さえ、私は横向きになるとそのままきつく目を閉じる。

灯りを消して目の裏の残像を追ひ払い、そしてここに来てからずっと口に出来なかったその名前を呼んだ。

「榊部長……」

暗闇の中で未だ甘く響くその名前に痛む胸を無理矢理沈めて、私は苦しい過去の中へと落ちていった。

【拍手小話】駐在と獣医とケンタウロスな僕（前書き）

拍手のお礼として書いた物です。お礼を新しくしたので、こちらに移動。過去がちょっと真面目展開になるので、その前に馬鹿話を。

【拍手小話】駐在と獣医とケンタウロスな僕

【駐在と獣医とケンタウロスな僕（1/2）】

『この門をくぐる者は、一切の希望を捨てよ』

血の滲むような落書きが玄関を飾る、片田舎の独身寮。

築うん十年以上。木造モルタル。共通のトイレと辛うじて機能している風呂。夏はキレそうなほどに暑く、冬はすきま風に震えることとなる。

そんな薄汚いボロアパートの片隅で、今日も住人達は身を寄せ合って生きているのである。

「だーかーらーあ、やっぱおっぱいだよ、おっぱい！ おっぱい！ 巨乳でも美乳でもちっぱいでも何でも来い！」

「何を言っている。女性は尻に決まっているだろう。あのむちむちと張った皮と肉。少し垂れていようが、筋肉がついているよりも脂肪が沢山詰まっている方がいい」

みみっちく、乾燥イカソーメンやよっちゃんイカをつまみに、その飲み会は今日も今日とて同じ話題に辿り着く。正直どうでもいい

なあと思いつつ、僕は仕方なく冷蔵庫から大野さんにビールを、棚から杉村さんにウイスキーを出してやる。気が利くケンタウロスだなあ……あとで料金を徴収しよう。

「相つ変わらずの変態だな、大野！ おまえ、想像して見ろよ。超巨乳のミニスカポリスが手錠じゃらじゃら言わせながらの、一对一の取り調べ……美味すぎる！！」

「変態のお前に変態呼ばわりはされたくないがな、杉村。それを言うならば、むっちりヒップを持つ白衣の女教師が机の上で尻を振っている想像をしる。鼻血ものだぞ」

「いや、ミニスカポリスだ！」

「白衣の女教師だ」

両者一步も譲らず、無言で新しいビールとウイスキーに口を付け、そのままざりりとこちらを振り向く。すごく嫌な予感だ。この二人に対して、僕のこの予感は外れることがない。

初めてこの寮に引越してきた時も、まだ汚れを知らなかった頃の僕に対して、このふたりの残虐な行為がたらなかった。

ある時は僕に直腸検査をやらせると迫り——尻の穴から腕を突っ込む家畜用の——、ある時は騎馬警察に憧れているだとかなんだとか言って、無理矢理僕の上に乗ろうと画策したり——ケンタウロスにとって陵辱行為に等しい——。

数々の悪行を思い出して思わず意識が遠のいた僕に、全くそんなことを構いもしないでふたりは暑苦しく迫り来る。

「東馬つ、おまえは乳を信じる同志だよなっ！？」

「田中、尻はおまえを裏切らないぞ」

「どちらも遠慮します」

ああもう嫌だ、こんな独身寮。

二人の変態に睨まれつつ、飲めない僕はそつとため息をついて烏龍茶に手を伸ばす。

寮居住者としては後輩にあたる僕は、なぜかこの二人に一度も逆らえた試しがない。だからこそ、いつもこのどうしようもない飲み会が僕の部屋で繰り広げられているわけで。

独身男が三人集まって酒が入れば、話題はどうしてもそこにいく。

「ええと、疑問なんです。どうしてミニスカポリスの好きな杉村さんは獣医で、白衣が好きな大野さんが警官なんでしょう」

「んなの、周りにいないもんで妄想するから楽しいんだろうが！

おまえ、牝馬で抜けんのかよ、牝馬で！」

「女性警察官など、もはや女ではない。あれは……悪魔の一種だ」

ばしばしと僕の前足を叩きながら杉村さんが言えば、何があつたのか知りたくもないけど何故か青ざめた顔をした大野さんが、真剣な顔で僕に訴えかけてくる。

もういい加減帰ってくれないかな、この人達。助けてください、僕の二十九日さん！

「どっちがどっちでも興味ないからいいんですけど、そろそろ帰ってくれませんか？ 僕、明日は朝から忙しいんですよ。——ところで、杉村さん、僕の素敵なお尻を揉むのはやめてください。大野さん、これは強制わいせつですよね」

「東馬、さすが下半身馬男！ いい尻してるなあ。今度、仲上さんとこの牝馬に種付けしてみねえか？ 名のあるサラブレッドの精子は高くてなあ」

「だから尻は最高だと言っているだろう？」

「さっき僕に牝馬では抜けるのか疑問を呈していたと思うんですけど！ というか、僕は馬じゃないので牝馬には勃起しません！ むしろ、二十九日さん以外で興奮したりしません！」

鼻息荒く言い切り立ち上がると、後ろ足で二人を追いつまう。

勢いで元々ぼろつちい襦が破れるが、もう気にするのはやめよう。
ああ、日本の住宅って狭くてだめだなあ。

「えー、尾野ちゃんかあ。まあ、乳には全く主張がないのが残念だけど、確かに美人だよな」

「尻も大概残念だが。小さい頃は棒きれみたいな奴だったが、まあ見られるようになったんじゃないのか」

「ふふふ。僕に蹴られて飛距離の新記録を狙えるのは、どちらなんでしょうねえ？」

前足で畳を踏みしめつつゆっくりと近寄ると、さすがに二人は慌てて僕から距離をとる。

それに少しだけ満足した僕は再び腰を下ろし、烏龍茶の入ったコップをぐいっと煽った。ん？

「あつ、ばか、それ俺のウイスキー！」

そこから僕の意識はぶつつりと途絶えた。

【駐在と獣医とケンタウロスな僕（2/2）】

俺は知らない。俺は何にも悪くない。俺の責任じゃ、絶対にな
っ！

「だあーかーらー！ おっぱいもお尻もそんなのぜえーんぜんわかってないんれすよ！ そんなもの、ただの飾りにすぎないんれす！ 二十九日さんはあ、確におっぱいもちっちゃいやすい、お尻だつてすんとしてますけどお、何たつて匂いっ！ いい匂いがするんれすよお！」

「わかった。わかったから、寄っかかるな田中。潰されて死ぬ！俺は死ぬ！」

さつきから同じ事を繰り返しながら、ケンタウロス東馬は真っ赤な顔をして大野に寄りかかっている。

……大野、おまえの尊い犠牲は忘れない！

この隙にっ！と脱出を計った俺だが、なぜかぐいっとなんかに引かれて後ろに倒れ込んでしまった。

「どおこ行くんれすかあ！ 杉村さん！ まだ僕の二十九日さんへの愛は語り終わってませんよう！！」

据わってる。目が完全に据わってる。

いつもは「僕、なんにも悪い事なんてできません」みたいな、綺麗で優しい顔をしている癖になんなんだこの落差！ 誰だ、こいつに酒飲ませたの！ 俺だ！

いや、事故だ。あれは事故だったんだああああ！

「落ち着け東馬。お前の尾野ちゃんに対する愛の深さはよおおおおくわかった。わかったから、前足を上げてくれないかな？」

暴れ馬に対するように、俺はなるべく穏やかな声でにつこりと笑う。

なんていうか、暴れ馬のほうがまだ対処のしようがある気がする……。

「尾野ちゃん……？」
「え」

俺の言葉に、透き通るような青い瞳が剣呑な光を宿らせた。なに、この死亡フラグっぽいの。ねえねえ、ちよつと何俺失敗！？ 失敗しちやつたの！？

助けを求めるように大野を見れば、奴はすでに失神済みだった。警官役に立たねえ！！

「前から思っていたんれすけどねえ……、杉村さん、僕の二十九日さんにちよおつと馴れ馴れしいんじゃないれすか……？」

やあ、低くていい声してるなあ、東馬。背筋が凍り付くほどだぞ！俺は初めて知ったよ。バカみたいに顔の美しい奴は、無表情になると下手なちんぴらの威嚇よりも怖いって事。

「待て待て待て待て！ 俺はだなつ、この地区唯一の獣医としてだな、時々アルカディア号の診察とかで尾野ちゃんに会ってるだけだ！」

「僕のいない隙に僕の二十九日さんと逢い引き！？」

おおつと、超絶斜め上展開きた。うつすらと浮かぶ笑顔が恐ろしいぞ、東馬！

返してつ、俺の可愛い東馬を返してよ！！前足に羽織っていたシャツの裾を踏みつけられたまま、俺は無駄な抵抗と知りつつ、じたばたと手足を動かす。

「ふふふふ。知ってますかあ、杉村さん！ 昔の人はよく言いますよねえ？ 人の恋路を邪魔する奴はあつて」

「あはははは。してない、してないから、恋路の邪魔！」

「ねえ、杉村さああああん」

「いやあああああああ！！」

翌日、なぜか独身寮の前で気を失った杉村が第一村人に発見され、診療所に運び込まれる騒ぎになる。

だが当人はぶるぶると震えるのみで真実を語らず、それを調べるはずの駐在大野もただ口を噤むのみであった。

真相は、今日も元気に二十九日の家にラブレターを届けに行く田中だけが知っている。

過去 榊部長と私 1

『それじゃあ、辛かっただろう』

あの恋はそんな一言で始まった。

それは私が東京から離れ、じいちゃんの家がある片田舎に引つ込む前の話。

いつも通りの金曜日飲み会。何だかんだと社外で集まるのが好きな面々に連れられ、半ば強引に参加するに至った私は、ただひたすらに隅っここでお酒を飲んでいた。

この際、最低でも参加費以上は腹に入れてやる！

誰に話しかけることも、話しかけることもなく、マイペースにぼっち飲みを続けていた私の隣にその人が腰を下ろしたのはそんな時だった。

「酒は足りてるか？ つまみは？」

「え、あ、はい」

見知ってはいるが気軽に話したことなどないその人物の登場に、思わず間の抜けた返事を返す。周りにはほどほどに盛り上がり、この静かな空間を誰も気にしている様子もない。

少しばかり動揺しつつ、手にしたお猪口の中身をぐいっと飲み干すと、すかさず隣から徳利が差し出される。えええ。

「す、すみません。あの」
「礼だよ、礼。受けてくれ」

にっこりと笑って言われた言葉に、何のことだろうかと疑問を残しつつ、それでも上司の酒を断ることは出来ずに杯で受ける。
お礼？ なにかお礼を言われるようなことってあったっけ？

「もしかして、尾野。おまえ、上司の顔を知らないなんて事はないよな？」

「も、もちろんですよ！ 営業の榊部長じゃないですか！」

拗ねたようなその表情に慌てて答えると、隣のその人——さかきけいた榊慶太郎はよしよしと頷いて、私の頭をがしがしと撫でた。

大きく無骨な掌が、頭を掴むようにして前後に振りまくる。ち、ちよつと、それは酔いが回るんですけど！

「あ、あのう。それで、私、何かしましたっけ……？」

先ほど飲み込んだお酒が今のヘッドバンキングで回り始めたのを感じながら、私は隣でにこにこビールを口に行っている榊部長に疑問をぶつける。

それ程大きくない会社の営業と営業事務だが、机の配置はかなり離れているし、普段はコンビを組んでいる営業さんとは仕事をしていないはず。

その仕事だって、直接部長が入ったようなものはなかったんだけど……？

「なんだ、おまえ全然気が付いてないのか！ そもそも、この飲み会は営業がおまへの為に開いてるもんなんだぞ？」

「ええ！？」

そんな初耳だ！ てか、なんだっけ。私、そんな感謝されるようなことした！？

ぽかんと部長の顔を見つめ返していると、目の前の男前な顔がぶはつという音とともに崩れた。そしてまた、ぐりぐりと頭を撫で回される。いやいや、だからそれ酔っちゃうんですってば！

何だかイメージが崩れるなあ。

営業の榊部長と言えば、既婚独身問わず営業事務の女性達に大人気な方。そのもつさりとした天然パーの髪とか、営業に珍しいお洒落にそり残された髭だとか、どこか森の熊さんの雰囲気醸し出している。

加えて体格もいいし、目立つ長身だし。ぱっちりとした二重の瞳は、なんとなく南の匂いを感じさせる。

女性たちだけでなく、営業の男性陣たちにももての部長は、私のような下っ端事務が気軽に声をかけられるような人ではない。と、というのが今までの印象だった。

「ほら、あれだ。この間木村が受注発注の商品を大量に誤注文しやがっただろ。在庫としてとっておけるんならまだ売り先はいくらでもあったんだが、あれはまた悪いことに足が早え。単価も高いし、客先ですぐさま捌けるようなもんじゃねえし、さすがに頭悩ませたなあ」

「ああ！」

困ったような笑みを浮かべて話されるその内容に、私はようやくなんのお礼なのか思い至る。

それは先週のこと。午後になって出先から戻ってきた営業さん達が、なんだかひどくざわついていた事があった。それは事務のほうにも何かの異変として伝わっていて、私も同僚達も何かあったのかと顔を見合わせていた時。

営業さんたちのデスクがある方向から、どかんと一発の雷が落ちたのだった。

「ばっかやろう！ 何でもっとよく確認しなかったんだ！」

吃驚して振り向けば、そこにいたのは榊部長と営業三課の木村さん。

普段は大らかそのもので声を荒げることのない部長の一喝で、木村さんの顔は青を通り越して紙のように白くなっていた。

その後すぐに部長は社内にいる営業全員を招集。何やら作戦会議でもするかのようにみんなで顔をつきあわせ始めた。

手の空いているもの、パソコンに向かって伝票を打ち込んでいるもの、事務員達はそれぞれに何があったのかと、ちらりちらりと営業を伺う。

すると、何やら指示を終えた部長が珍しく事務員達のほうへとやって来たのだ。

どことなく苦虫を噛み潰したような顔で、突然がばりと私たちへ頭を下げる。

「すまん！ どこかの店でこの商品を十甲じゅうぎょう買ってくれとこ知らないか！？」

部長が私たちに示したのは、受注発注で普段なかなか売れることはない商品のパッケージ。

正直、自分が担当する個人商店でもあまり発注が来ることはないし、あったとしてもせいぜい一甲ひつぽうくらいだ。

それをこの午後の時間から十甲売り切るというのは、かなり厳しい。他の事務員達を見回しても、やはりみんな戸惑っているようだった。

一番の古株である赤荻さんが、そんな空気を取りなすように「と

にかく、電話をかけてみましょう」とみんなを動かす。

私も慌てて自分の担当する個人商店さんに電話をかけてみる、が――全て空振り。市場のお客さんは午後を過ぎたこの時間ではもうお店自体を閉めてしまっているし、他のお店も今からじゃ予定がたてられないと断られる。

残るはあと一軒。私がまだ入社したての頃、そりゃあもう毎日のように怒鳴られた偏屈なじじい――もとい、厳しい社長さんのいる『鹿島商店』さん。

声はでかい、押しは強い、普通で注文を取れるようになるまではかなり苦労した。そのかいあって、最近はかなりこちらからのおすすりもとってくれるようになったけど。

ここはまあ、頑張ってみるしかないか。

すっかり暗記してしまった電話番号を押すと、三コールで社長の元気な声が耳に届いた。

『こちら鹿島商店です！』

「お世話になっております、向坂食品、尾野です」
むさくらか

『おっ、こんな時間にめずらしいじゃねえか。頼んだもんが入らねえつつうのは受付ないからなあ！』

この相変わらずのくそじじいっぷりである。

納品日の無茶な注文を押し通してくる割に、一日でも遅れると文句を連発という、非常に胃の痛いお客様だ。この人の為にどれだけ人脈とごり押しと泣き落としを使っていることが！

「そこところはばっちり納品致しますので！ あ、この間一甲注文して頂いた商品、覚えていらっしゃいますか？」

『まだボケてねえつつの。あの足の早い奴だろ？ 物はいいんだけどよ、賞味が短いもんだから売り切るの、苦労したぜえ』

おっと、直球のプレッシャー。こ、こっからどう持って行けと…。

『それがどうしたんだよ？』

「あー、えー、えーと、ですね。その、そ、それを……十甲買って頂けませんか！？』

『十甲！？ 馬鹿言えよ！』

ですよねえ。ついこつちも直球勝負すぎた。だから、営業には向いてないと……。

両者、相手の出方をはかりつつ、しばし沈黙。おおおお、どうやってここから切り込んでいったらいいんだ！

『……尾野ちゃんよ』

「は、はい！」

沈黙の後に聞こえてきた深いため息と自分の名前に、つい声が裏返る。思わず大きな声を出してしまったせいで、部長の視線がこちらに向いたのがわかった。

いやいや、まだまだ注文は取れてませんから！

そのまま近寄ってくる部長に慌てて頭を振ってアイコンタクト。

部長はわかっている、とでも言うように頷いて、私の隣の席へと腰を下ろした。

『あんだ、馬、詳しかったよな？』

「はあ！？」

予想外の言葉に、お客さん相手だということをしつ飛ばした私の声に、電話の先で社長が大きく舌打ちをする。ちよっと、感じ悪い！

『あんななあ！……だから、馬だよ、馬。芝生かつ飛ばして、俺に生活費を下さるお馬様だよ！』

「ああ、競馬の。いや、えっと。馬は好きですけど、詳しいというわけでは……」

『いいから聞け！ 今度の秋華賞、どれがくると思う？ 予想屋やれってんじゃないんだ。ただの馬好きでいいから、そのあんなから見てどの馬が調子よさそうか教えてくれつつてんだよ』

「ええー……」

さっきの私の話、どこに行っちゃったんだろうか。

社長の斜め上過ぎる言葉に私は顔をしかめつつ、それでも馬好きの私の脳みそは無意識に今週末のレースについて考え出す。馬大好きすぎて、時々生きているのが辛い。

「うーん、やっぱり春に出てた奴が秋も勢いがいいと思うので……そうですねえ。個人的にはフーカタイフーン、レッドフラッグ、コマコサンデーズなんか好きですけど。特に、フーカタイフーンはここ最近調子上げてきてますし、目がいいですよ、目が！ 彼女、いつもはかなりとり澄ました感じで、勝ち負けになんて興味ないわって感じなんですけど、でも目を見てるとものすごいギラっとしてますよ。多分あれ、かなりの負けず嫌いだと思うんです。ああいう、熱いものを内に秘めてるタイプって、終盤強いですよ！ むしろ、初めは後ろで押さえつけられていたほうが、最後の巻き返しでこの！って感じで発憤します」

あの美しい肢体。流れるように動く筋肉。艶めく鹿毛。優秀な父母を持って、期待とプレッシャーを一身に受けながら育った深窓の令嬢。それがフーカタイフーンである……と、私は妄想する。

はあはあと荒い息を繰り返しつつ、電話に向かって突然馬の話を

し出した私を、隣の部長が目を丸くして見ている。この流れになつたのは私のせいじゃない。変態なのは認める。

『尾野ちゃん、あんたって奴は……!』

あ、まずい。引かれてる。これ絶対に引かれてるよね。

今まで出会ってきた人たちは、必ずここらでどん引きだった。なにせ欲望に瞳をきらきらさせて馬の話をする女など、気持ち悪い以外の何者でもない。

今後注文が減ったらどうしよう……とため息をついたその時。

『よっしゃああああああ! そこまで気合い入れてくれたんなら、俺の秋はフーカタイフーンに賭けるぜ!』

なぜか私以上に鼻息の荒い社長の声が電話から轟き、私も隣の部長も何事かと眉をひそめた。展開の読めないじじいだなあ。

「ええつと」

『わかった。わかってる、皆まで言うな! あんたの馬にけるその情熱、しっかり受け止めた! だから、俺もちゃんと返すぜ。…さっきの品、全部こっちが引き受けてやろう!』

「ええええええ!」

もはや電話越しに大声大会の様相を呈してきたな、これ。

落ち着け、落ち着けよ、私。馬の毛並みを思い出せ、そしてあの美しい尻を!

「ちょ、ちょっと待ってくださいね。今、上司と代わりますので!」
『おつ』

担当になってから初めて聞くような、とてつもなく機嫌の好い声で社長が答えたのを確認すると保留を押す。そして私はすぐさま隣の部長に向き合った。

「ぶ、部長…… 鹿島商店さん、買ってくださるそうなんですが」「本当か！　すごいじゃないか！」

今の今まで渋面だった顔がぱつと輝いて、至近距離でその眩しい笑顔をくらった私は、思わず顔に血を昇らせる。ここ数年、まったくなかった身体の反応だ。

よもや私にこんな乙女の部分が、まだ残っていたとは驚く。

「それで、なん甲とってくれるって？」

「それが…… 全部引き受けてもいいって」

「は？」

あ、うん、そうだな。そういう反応だよ、やっぱり。

なんでか恐る恐る切り出した私の言葉に、部長の笑顔がぽかんとした表情に変わる。こんな風に無防備な顔になると、なんだかいつもより可愛くさえ見えて、その自分の認識にさらに驚いてしまった。

「あの、十甲全部買って頂けるそうです。今、保留で待ってもらっているんで、変わって頂いてよろしいですか？」

「わ、わかった」

「三番です」

我に返った部長はすぐさま机の電話を取り、社長と話を始める。

一応、私の役目はここまでだ。なんか、余計に疲れた……。

隣ではすでに値段の交渉が始まっている。

全部引き取ってやる！　と言いつつ、引き取るからには値切る、と

いうところが社長の素晴らしい商売人根性だ。

まあ、部長も部長で百戦錬磨の営業部長。足下を見られているのは承知で、そんなに悪い条件を飲むことはないから安心。

私は密かに拍手を送ってくれた同僚達に手を挙げて答えつつ、パソコンに向かってもとの伝票入力作業へと戻るのだった。

過去 榊部長と私 1（後書き）

少しの間、二十九日の過去の話に入ります。ノリはいつもより重めですが、そんなに長くないと思いますので、お付き合い頂ければ嬉しいです。

過去 榊部長と私 2

「おう、ぼつとしてんな、飲め飲め！」

ぼんやりと先週の出来事を回想していた私に、榊部長が新しく運ばれてきた熱燗を勧める。いやいや、酒は好きですけどそんなに飲めません！

しかし、その熊さんのお顔に人好きのする笑顔を浮かべられると、「あ、いただきます」なんて杯を差し出してしまうのが不思議だ。これが伝説の営業の為せる技か！

「お前の払いは木村持ちだからな、心配せずどんどん飲めよ？」

「えっ！ そんな、申し訳ないですよ！」

初めて聞かされる事実、どうしようかと営業木村さんの姿を探せば、彼はすでに頭にネクタイを巻いた姿で盛り上がっていた。…また、ベタな！

「いいんだよ。してもらったことに対して何にも返せないと、あいつも心苦しいだろうし。こんな風にみんなで楽しめて、しかも少しの出費でその気持ちが返せるなら、そのほうがいい。あいつ、けっこう気にしいだから縮こまっちゃまうと仕事にも影響するしな」

赤い顔をして営業仲間や事務員さん達にいじられまくる木村さんを見つつ、部長は少しだけ仕事の顔になってそんな風に言う。

私はそんな部長の横顔をまじまじと見つめてしまった。

そんな風に考えたことがなかった。私は目の前の仕事をただひた

すらこなしでいくだけで、先週の一件だって、私はただラッキーだっただけだし。この人は仕事だけじゃなくって、人も全体も見渡すようにして仕事してるんだ。

なんだか馬の話だけでここまでしてもらっている自分が今日に恥ずかしくなり、私は注いでもらったお酒を一気にあおった。

「や、でも私は趣味に助けてもらったというか……。ほとんど社長さんの厚意だったと思うんですけど」

言うなり、またもや頭の上に部長の分厚い掌が飛んでくる。ぐりぐりぐり。

いや、だから酔っちゃいますから！

抗議とギブアップの思いを込めて部長を見れば、そこには優しく細められた瞳があった。

「……わかってないなあ、尾野」

「な、なんでしよう？」

「鹿島の社長、俺に言ってたぞ。尾野にはいつも無理して注文通してもらってるからって。どんなに無茶な要求しても、最初から絶対に駄目って言うことなく努力してくれて、本当にどうしようもない時もきちんと代替案考えてくれるってな」

初耳すぎる。社長、そういうのは本人に言ってくれよ！

誉められ慣れていない私は思わず顔を赤くする。それを誤魔化すようにお酒を飲めば、すぐに部長が継ぎ足してくれた。もう、酔っぱらうとかそういうことも考えず、飲む。

「うちの営業達だってそうだぞ？　ただ単に先週の一件だけで飲み会開いてるわけじゃない。尾野がいつも営業達に納期について気を払ってくれたり、おかしな数の注文が客先からあれば、手間とも思

わないで確認してくれたり。助かってるってみんな言ってる。確かにひとつひとつはなんてことない仕事かもしれないけどよ、そういうものの積み重ねが、社長とか営業とか客先の信頼を作ってるんだよ。だから、お前が困ってたら助けてやろって気になるんだ」

くしゃつと最後に頭を撫でられて、部長の手が離れていった。

私は、今聞いた言葉をうまく理解できなくて一瞬呆然とし、それから一気に顔を今より更に赤くさせた。音を付けるなら、ぶわって感じで。

今まで事務の同僚や営業さん達、それに客先とも一定の距離をとって仕事をしてきた、と自分では思っていた。

フォローするのも仕事のうちで、信頼してくれてるとか、そういうことなんて全然考えたことがなかった。そんな風に周りが自分を見てくれていたなんて……。

小さい頃、どうにも人付き合いが下手で、地味な性格で。周りの明るい子や華やかな子に隠れがちだった私に、田舎のじいちゃんをよく言っただけで聞かせた。

『二十九日、どんなに目立たなくなっただけ、見てくれている人はいらんだぞ』

小さい頃は信じていた言葉は、大人になって捻くれた私にも染みこんでいて。それが、こんな風に返ってくるなんて思ってもみなかった。ちくしょう、泣きそうだ！

真っ赤になって俯いてしまった私に何を感じたのか、部長はそれ以上何にも言わないでただ隣に座っていてくれた。

「俺も秋華賞、フーカタイフーンに賭けようかなあ」なんて冗談を言いながら。

「尾野さん、これの在庫って今なん甲あるかすぐにわかるかな？
これ、尾野さんが発注してくれてるんだよね？」

「あ、はい。ちょっと待ってください、確認します」

席の前のカウンターに肘をついた木村さんがにこにこ顔で、「待つつゝ、俺、一生でも待つゝ」とか言うのに笑いながら、私は机の中から注文ファックスの返信を取り出す。

ついでにいつもチェックしている在庫表も。

「ええと。明日三甲入ってきます。在庫はあとバラで四つですねえ。
間に合いますか？」

「うわー、助かる！　じゃあ、今ある在庫、こっちでもらっちゃっていいかな？」

「大丈夫です。ナカキユウさんは昼出発で、これが入るの朝ですから」

配送の時間を確認してからそう言つと、木村さんはがしりと私の両手を掴み、カウンターから身を乗り出した。ちよつと、ここ受付兼ねてるんで、早くどっかに行つてほしいんですけど。

「ありがとう！　ちょう助かった！　このお礼は今夜にでもイタリアレストラんで……っいだっ！」

「このアホが！」

真剣な顔をしてそんなことを言い始めた木村さんの頭を、後ろからやって来た榊部長が思いきりファイルで叩く。

「セクハラしてる暇があったら、さつさと在庫に予約の紙でもはつつけてこい！」

パワハラだー！とか叫びつつ、木村さんは言われた通り、一階の倉庫へと走っていった。元気だなあ……。今年新卒で入った営業木村さんは、例えるなら肉は赤身！って感じだろう。

なんて下らないことをつらつら考えていた私の頭に、ぽこりとさっきのファイルが振ってきた。えええ、私も同罪ですか！？

見上げれば、そこには部長のなんだか楽しそうな笑顔。

「悪いんだけど、その中身を確認して、ファイリングしといてくれ」

「あ、はい」

言うだけ言って営業の島へ帰っていく部長の背を見送り、私は首を捻る。何で私？

部長と組んでいる事務さんが休みってわけでもないし、こういう仕事の越境しちゃうとあんましくないんだけどなあ。

ちらりとその事務さんを伺えば、やっぱり面白くなさそうにこちらを見つめていた。

これはさつさと終わらせてしまうに限る、とファイルを開くと、そこにあつたのは一枚のメモの切れ端。

『飲みに行こう。携帯に要連絡』

筆圧の強い、癖のある字でそれだけ。

思わずばしつとファイルを閉じると、私はできるだけ自然な動きでそれを持って事務倉庫へと移動した。ばばばばかじゃないのかなあ！

変な音をたてる心臓辺りをぎゅっと押さえて、私はしばらく迷っ

た後、スカートのポッケから携帯を取り出した。
あの後いつの間にか登録されていたメールアドレスに、返事を送る。

『馬鹿ですか！ ケンタウロス居酒屋で』

あの飲み会の後、私と部長は会社でも挨拶に加えて、色々なことを話すようになった。時々は会社が終わった後、こうして一緒に飲みに行ったりもする。

決して恋人ではない。それだけは馬に誓って絶対にない。馬の尻に誓ってもいい。

今日も今日とて、金曜日でざわめくケンタウロス居酒屋の片隅。すでに馴染みになりつつある店員さんに手を挙げ、「いつもの！」とか頼んでいる榊部長を前に首を振る。

「ん？ なんだ尾野、生まれたての子馬じゃあるまいし」

「子馬が可哀想じゃないですか！ 今すぐ訂正してください」

「これまたダイナミックな卑下だな！」

部長は私の言葉に遠慮無く吹き出すと、緩む口元に手を当てた。その左手に光る、ひとつの証。居酒屋特有のぼんやりとした光の中でも、それだけが眩しく私の目に映った。

『部長ね、亡くなった奥さんのこと、まだ忘れられないみたいよ』

同僚の言葉が頭に響く。退社前のロッカールームで、わざわざ訊

いてもいないのに教えてくれたその人の、少しだけ意地の悪い笑み。そういえば、部長の仕事を一手に引き受けているのはこの人だったと、思い出した時にはもうその人は、ぼんやりとした私を置いて出ていった後だった。

変なの。そんなこと私に言わなくなつて、これは絶対に恋じゃないのに。傷ついたりなんか、しないのに。

「どうした？　ぼやつとして」

ふわりと、いつものように頭に手を乗せられて、私はまばたきをして現実感を取り戻す。口から自然と嘘がこぼれた。

「ええつと。秋華賞のフリーカタイフンがあんまりに素晴らしい走りだったので、脳内的にレースを録画再生してました」

「おまえ、ほんつとうに馬が好きなんだなあ！」

またか！　どこで誰といたって、いつもこれを訊かれるのだ。

小学生の時のあだ名は『馬女』。最高の誉め言葉だ、この野郎。中学生の時には競馬雑誌をにやにやしながら見つめていた罪により、生活指導室へ。結局、先生にレースの予想を教えて解放。高校では休みごとにデートをしたがる彼氏への妥協案として、毎週何かしら馬のいる場所へ行っていたら、「馬と俺とどっちが大事なんだよ！」って切れられたつけ。

さすがにね、さすがに学習したからね。大学に入ってから、地味に生きたよ。サークルだって『お馬さんを愛でる会』だった。それは真摯な気持ちで競馬に挑む男臭いサークルだったけど、充実した毎日を送れたよ。なんでか学内で「当たり前屋」と呼ばれたけどな。そんなしょぼい人生を思い返しつつ、いつの間にか来ていた生中なまぢゅうをいっきに流し込む。

「ちょ、お前、お疲れさまとかそういうのはどうした」

突然の私の行動に、いつも穏やかな目をまん丸くした部長が声を掛けるが、無視。そのまま息継ぎもせずに飲み干すと、ついでに部長の生中も奪い取っていき飲み。

啞然として固まる部長を置いてけぼりにして、近くを通ったケンタウロス店員さんにおかわりを追加注文。しかし、いつ見てもいい
あおかけ青鹿毛の下半身。

「お、尾野、さん？」

なぜか微妙に丁寧になった呼びかけに、私は眉を寄せた。

「馬が好きでなにが悪い！ 輝く毛並み、躍動する筋肉、そして尻！ 馬の尻ほど見ていて飽きないものはないっ！」

がつつと拳を机に叩きつけそう叫べば、間髪入れずに、この店の大多数を占めるケンタウロスの店員とお客さんから拍手と賛同の嵐やっちまった。いや、もういいや、変態の方向で。

私はヒト科ヒト属メスとしての何か大切なものを捨て、笑顔でその声援に応える。

すると、頼んでもいないビールのピッチャーが目の前に差し出された。運んできた店員さんをまじまじと見る。

「頼んでないんですけど……？」

「あちらの芦毛のケンタウロスさまからです」

しめされた方向に顔を向ければ、そこには見た目運送業系統のケンタウロスなおっちゃんが、人の好い笑顔でこちらに手を振っていた。お、おやつさあああん！

そして青鹿毛店員さんは、「これは当店からのサービスです！」
とにつこり笑って、ナスときゅうりの浅漬けをひと皿置いていつてくれる。

う、馬はいいなああああつ、と思わず涙ぐんだ私はそこではたと気付く。私はメスとしてじゃなく、社会人として何か大切なものを忘れなかったか？

「人気者だなあ、尾野」

私の奇行に動じた風でもなく、ご相伴に預かりまーす、なんて呟きつつ部長がピッチャーから空になったジョッキにビールを注ぐ。
そして固まる私にかまわずに、かちんとジョッキ同士をぶつけて人好きのする笑みを浮かべた。

「尾野は会社でもどこでも、人気者だよな」

「ど、どこが！」

気持ちいい飲みっぷりでジョッキを空けた後、二杯目を注ぎながらぼつりと部長はそんなことを言う。危うくビールを吹きかけそうになった私は、空気を求めて呻いた。

渡されたおしぼりで口元を押さえる。なんか今日、調子狂うなあ！

「私、地味で目立たない事務員なんですけど」

「どこが！」

息を整えてそう呟くと、今度は部長が驚いたように叫んだ。ええええ。

どこが、と言われても、ねえ。眉間に皺を寄せて考え込む私を見て、部長は大きなため息をついて額に手を当てる。

「おまえなあ、全然気が付いてないのか？」

「何をですか？」

「営業の木村だよ。お前がこの間助けてやった」

「木村さんは知ってますけど、それがなにか？」

聞き返した瞬間、部長は机に突っ伏した。ごつつといい音が額辺りで聞こえる。なにそのリアクション。

慌てて頭に手を伸ばすと、それを狙いすましたかのようにぐっと強く掴まれた。私の手首なんて軽く包み込む、大きくてちよつと骨ばった男の手。

驚いて下を見れば、少し額を赤くした部長が真剣なまなざしでこちらをじつと見上げていた。いつもの、穏やかで優しい瞳じゃない。それが剥がれて、むき出しの。男の。

「……木村だけじゃない。お前が入社してから営業どもが浮き足立つ浮き足立つ。終いにはお前とのコンビを賭けてソリティア大会なんてやってつから、俺がその方向に信用のある和久井さんを指名したんだよ。知らないだろ？」

「初耳です……」

「それだけじゃないぞ。お前と飲むようになってから、あいつらのうるさいこと。どつから嗅ぎつけてくんだかな。職権乱用だ！とか組合を作って俺が近付くのを阻止する！とか息巻いてやがったから、悔しかったら部長になれってはっかけといたけど」

掴んでいた手首から手のひらに移動させて、部長がくくくどこか黒い笑みを零した。私が何か言う前に、その繋がれた手の甲を、ゆつくりと部長の親指がなぞる。

ぞわりと背筋に走った甘い感覚に私は、ぐっと身体に力を込めた。どうして？

何も言えずに無言で見つめ返せば、部長はそのまま机から身体を

起こし、私の掴まれた指先に唇を寄せた。

「今日は飲めよ。できれば漬れてくれ。俺が持って帰りたいから」

「そんなの、指輪が光るその手のままで言ってほしくなかったのに――。」

過去と今 ケンタウロスと部長と私

なんて言われて素直に潰れる私ではない。

ピッチャーのおかわり、日本酒頼んでから白ワインフルボトル、というコースをたどった結果、潰れたのは部長のほうだった。まだまだだな。

謎の達成感に満たされながら、直接ではないにしても下の者の努めとして、言われるままに部長を送り届けた先に――テント。

どこからどう見ても、アウトドア万歳なテント。しかも、広い。

「……素敵な、お住まいですね」

「遠慮無くテントについて突っ込め」

アルコールで少し上気した頬が、少しだけ皮肉めいて歪む。どこかほの暗さを感じるその表情を、私は意外な思いを抱いて見つめた。自嘲、しているのだろうか。

つかの間合わさった視線は不意にそらされ、部長は慣れた手つきでテントの入り口を開けると中に足を踏み入れた。

ジッパ―式の布扉の向こうから、かちりという音とともに光が漏れる。同時に、中から部長の声が私を呼んだ。

「なんにもないけど、まあ、上がれよ。茶くらいは出せるぞ」

「お、お邪魔します」

導かれるように布出てきた扉からテント内に踏み入る。靴はどうしようかと一瞬迷い、見れば部長が靴のままなことに気がつき、そのままテントの中央まで進んだ。

外から見るとよりも快適そうな、意外と広い室内。アウトドア用だと思われる簡易ベットがひとつに、一人掛けのソファ。小さな棚に少しの本と、倒されたままの写真立て。必要最低限の生活用品に、なんだか寂しい気持ちになる。

「そのソファにでも座っててくれ。もう少ししたら湯が沸くから」

端に置いてある台の上にあるケトルをセットして、部長は私を振り返ってそう指示する。私は小さく頷くと、すぐそばのソファに腰を下ろした。

部長はこちらに背を向けたまま、台の下から取りだした茶筒をこんこんと鳴らし、手慣れた仕草で急須に茶の葉を落としていく。その姿がなんだかひどく寂しく思えた。

「変だと思っただろ？」

ぼんやりと見つめていた私に、背中を向けたままの部長が笑みを含んだ声を掛ける。

突然の直球に、私はただ首を振って「いえ……」と言葉を濁す。返る低い笑い声。それがピーっという沸騰の合図に紛れて消えた。

「遠慮すんなって」

ゆっくりとした動作で急須にお湯を注ぎ、手近にあったマグカップふたつに注ぎ入れる。ふんわりとお茶の香りがテント内に広がり、知らず知らず固くなっていった私の身体を解きほぐした。

そのふたつを手にした部長が振り向き、黒いほうのカップを私へと渡す。

「あ、ありがとうございます」

「いや。……潰すつもりでこっちが潰されてりゃ、世話ないな」

まだ赤い頬を照れたように掻いて、部長はソファの近くに置いてある簡易ベットへと腰掛ける。大きな体躯にベットがぎしりと音を立てた。

「裏にあるのが本当の家。ここは俺の避難所なんだ」
「避難所？」

カップに目を落としたまま、自嘲気味に言われたその言葉に反応する。部長はカップに落としていた瞳を上げて、私を見返す。どこか、見覚えのある影の過ぎる黒の瞳。

それは、小さな夏の終わりから私が鏡の中に見つけるものと同じものだった。

「俺の嫁が死んだって、聞いてるか？」

「……少し」

「家の中に、さ。あいつがいた時の空気とか、そういうのがまだ残ってる気がしてな。住み続けてると、それが消えていく気がして……そのままにしておきたいんだ」

馬鹿みたいだろう、と部長の視線が倒れたままの写真立てへと流された。多分、そこに奥さんの写真があるのだろう。

手の中にあるカップが次第に温度を失っていく。その間、私たちは言葉を交わすことなく沈黙した。

「どうして、私をここへ？」

俯いたままそう問えば、部長はベットサイドにカップを置いて立ち上がった。その動きに顔を上げた私の頬を両手で包み込み、瞳と

瞳を合わせる。

少しだけ酔いの残った瞳の奥に見える、焦燥。

「同じだ、と思ったからかな」

「同じ？」

「何かなくしたことがある目だと、思ったから」

何か言おうと開いた口は、部長のそれと重なってふさがれる。出ていくはずだった言葉はみんな彼の喉の奥へと消えて、私はもう黙ってその熱を受け入れるしなくなっていた。

私と部長はそんな風にして始まった。

好きだとも、愛してるとも、お互いに何も口にしない。それが唯一のルールのように。

時間が合えば外で飲んで、私の部屋へと流れ着くのがいつものこと。あれ以来、決して過去を口にしない部長に、少しばかりの寂しさを覚え始めていた。そんな時。

「尾野はなんでそんなに馬が好きなんだ？」

いつもの飲み屋で、いつものお酒を飲みながら部長がめずらしく酔ったように訊いた。

今日はなんだかふたりとも、どこか浮かれたような気分で、飲み過ぎていたのかもしれない。いつもなら、相手の中に踏みこむような、こんな問いかけはしない。

ぼんやりとかすみ始めていた頭で、まあいいか、と私は口を開く。

「昔、祖父の家に預けられた時、馬を飼ってたんですよ」

手にしたおちよこをぶらぶらと振りながら、私はまだ小学生だった頃のことを久しぶりに思い返す。

今よりずっと体が弱く言葉も遅く、引っ込み思案だった私。その私を心配しすぎて、身体と心のバランスを少しばかり崩した母。多少ヒステリック気味になった母を心配した父は、私をしばらく田舎の祖父の所へ預けたのだった。

最初は自分が両親に捨てられたんだとばかり思っ、て、祖父母にも心を開かず、泣いてばかりの日々。

そんな時、祖父が一頭の子馬を連れてきたのだ。

よい血統を受け継いだはずのその子馬。生まれつき後ろ足に障害を抱え、期待されたような競走馬にはなれないことは一目瞭然だった。身体も弱く、手間ばかりかかるその子馬を処分するかというところで、祖父が引き取りを希望したらしい。

栗毛の可愛い子馬だった。まだ小さいのに親から引き離されたせいか、その丸い黒の瞳を警戒心いっぱいにしていた。

『名前をつけてやれ、二十九日。こいつの世話は、今日からお前がするんだから』

戸惑うばかりの一人と一頭に、祖父は優しく微笑んでそう告げる。その日から私は、日がな一日、厩舎でその子馬と過ごすこととなった。

「最初は馬が怖かったし、私がそんなだから馬は馬で懐かないし。お互いびくびくしながら過ごしてました」

懐かしく笑って、私は自分でお酒をつぎ足した。こんな思い出話、

酔ってでもないとできないから。そういう言い訳を立てて、続きを口にする。

「それでも、世話をすれば可愛くなるもんですね。自分を頼ってくれる子馬がいつの間にか可愛く可愛くて。子馬もだいぶ慣れて、身体ごと私にすり寄ってきたりして。そういう大事なものができたおかげか、よくしゃべるようになったし、世話をするからお腹も空いて、どんどん体力もつきましたし」

ひと月を過ぎる頃には、子馬を連れて家の辺りを散歩してまわるくらいには活発さを身につけていた。

ある日、子馬のところに獣医がきていたので、私はひとりで散歩に出かけた。いつもの草原でひとり遊びをしていた私に、声を掛けてきた少年がひとり。

利発そうな切れ長の瞳に、さらさらと音のしそうな黒い髪。日焼けした顔は大人びていて、私よりもいくつ年上に思えた。

肩から虫かごを掛け手には虫網を持った、典型的な田舎の少年は、私に向かって手を差し出した。「遊ぼう」と言っ

その誘いにプチパニックを起こして固まった私を、その少年が引っ張って連れ出す。

それは田舎に来て初めての、いや、私にとって初めての友達だった。

「初恋の相手、じゃないのか？」

漬け物を行儀悪く手でつまみながら、にやりと部長がからかうように笑みを浮かべる。むっとした私は、その手から漬け物を奪い取るように口を付けた。

ぐっと固まる部長に、私はさっきのお返しとばかりに笑う。洗面の部長が乱暴に、ただどこか優しく私の頭を撫でる。

「とんでもない奴だったんです。なんでか意地悪ばかりされて。一度は川に突き落とされもしたんですよ？」

もつと遊ぼうと言った少年に、子馬の世話があるからと断ったとたんだった。わんわん泣きながら帰ってきた私を、子馬が心配そうに鼻をすり寄せたっけ。

その子馬は、最初に心配されていたよりもずっと遅しく、大人になることはないと言われたその評価を跳ね返すようだった。足を引きずるので負担は少なからずあるようだったけれど、獣医と祖父とで作った補助具を付ければ問題なく歩いた。

きつとずつと、この子馬は私のそばにいてくれる。そう、思っていた夏の終わり。

私が何度も戻りたいと願ったあの日。

「その男の子に誘われたんです。村の子供達とかくれんぼしようって。私、嬉しくて……家にいた時には仲間に入れてもらったことなんてなかったから。だから、私、連れていた子馬の綱をそばの木にくくりつけて、遊びに行っちゃったんです」

後悔しても、したりない。

すぐ戻るから、大丈夫だからと自分に言い聞かせ、小さくいながら不安そうにこちらを見つめる子馬を残し、私は少年とともに駆け出した。

それからもう夢中で遊んで、かくれんぼに鬼ごっこに、川へ行つての沢ガニとりに。

気が付いた時にはもう夕方だった。私の心にさつと冷たいものが走って、慌ててみんなに別れを告げると、子馬の場所へと駆けていった。

思い出しながら、知らず知らず握りしめていた手を、部長の手が

そつと包み込む。心配そうにうかがう瞳に、私は自嘲気味な笑みを浮かべることで答えた。

「身体が弱いつて知ってたのに……ずつと、風のある場所に放っておいたから。急いで連れて帰ったけど、子馬は体調を崩して、そのまま。私の腕の中で冷たくなりました」

大声で泣きながらたくさん、たくさん謝って。だからどうか生き返ってと。

けれど温度を失った子馬がもう二度と目を開くことはなく、泣いて謝る私を祖父はただ黙って抱き締めてくれた。

ひと言も私を責めることなく、「この子はもともと、長くは生きられなかったんだよ」とだけ言った。だけどその慰めは、私の傷を深くするだけだった。

そんなことない、私がちゃんと連れ帰っていれば、子馬は死ななくてすんだはず。

ごめんね、ごめんね、と心の中でひたすらに呟いて、翌週私は父に連れられ家に戻ったのだった。

「それ以来、なんか馬に執着するようになったんです。……あの子馬は二度と取り戻せないってわかってるのに」

最後のお酒を苦く飲み込んで、私の思い出話は終わった。包まれたままの右手を自然にほどくと、それは再び部長の手に握りしめられた。さっきよりもっと強く。

驚いて顔を見れば、部長はなぜだか悲しそうに私を見つめていた。

「それがおまえのなくしたもの、か」

「……そうです」

「同じものは二度と戻ってこないのにな。それでも、忘れられない

……」

そう言って、自分の左手に視線を落とす。光る、指輪。亡くしたものの影。

「それじゃあ、辛かっただろう」

深くしみいるような声音で囁かれたその言葉に、私の目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。ここが外だとか、人目だとか、そんなものは全て頭から消え去って。

部長の言葉は、大切なものを失ったことのある人のものだった。決して浅い同情ではなくて、まるで自分自身に向けたような、そういうものだった。

どこかで彼を拒んでいた気持ちが崩れ、私はその時初めて部長への恋を自覚する。

だけどその恋は、始まった時にはもう終わっているような、そんな恋だった。

何度目かに迎えた一緒の朝。私はそれを思い知らされる。

無理なく、私たちのやり方で次第に馴染んでいく温度と空気に、私は少し甘えるようになっていた。あの過去を、なくした記憶を、忘れてしまえるかもしれない。

私もこの人を甘えさせてあげられるかもしれない。そんな風に思い始めていた。

一緒に寝るには狭いベットの、部長はいつも私を抱き締めて眠る。安心できる体温。まどろみの中、セットしておいたアラームが起きる時間を告げる。

まだぐっすりと眠りの中にいる部長を起こさないよう慎重に、その筋肉のほどよくついた腕から抜け出す。

手櫛で髪をまとめ、昨日脱ぎ散らかした部屋着を身につける。そろそろ、着て寝ないと風邪をひくかも。そんなことを思って部長を振り返れば、ベットの中央、彼の腕は私のいた場所を無意識に手で探っていた。

子供が母親を探すような、そんな仕草に私の胸が限界までぎゅっとしぼられる。どうしよう、この人、かわいい。

顔を見れば不機嫌そうにしかめられているし、無精髭はぼうぼうだし、もともと天然パーマな髪はもはや芸術的に爆発してるけれど、ぱたぱたと手のひらが上下して、部長がそれこそ熊のような唸り声を上げた。

そうつと近付いてその手を握ってみると、予想以上に強い力で握り返される。つい嬉しくなってしまうた私は、耳元に口を寄せ初めて部長を名前で呼んでみた。「慶太郎さん」と。

言葉にすると急激に恥ずかしくなつて、顔に血が昇るのが自分でもわかった。

どこの乙女だよ！と心の中でつつこみを入れる私の前で、部長が応えるようにうつすらと瞳を開けた。

まだ、どこか夢の中にいるような、そんな顔で。優しく笑つて。

「……ゆき」

目が覚めたら泣いていた。

悲しくも、辛くもないはずなのに、涙は次から次へと流れ落ちて止まらない。それは確かに幸福の記憶だった。

誰も触れなかった柔らかな部分を、優しく包み込んでくれた人の、思い出。

吹っ切ってここに来たつもりで、ただの自分の経験にしたつもりで、それでもこうして夢を見れば涙を流している。まるで覚えていない、恋の記憶。

忘れてなんかいない、ちっとも忘れられてなんか、いない。

止めどない涙になかば呆然として布団の上に座っていると、そんな私を叱りつけるように、裏の厩舎からアルカディア号のいななきが響く。

はっとして枕元の時計を見れば、いつも起きる時間をとくに過ぎ、私は慌てて身支度をして厩舎へと急いだ。ごめんっ、ごめんよう、愛しのアルカディア号！

「あ、おはようございます！ 二十九日さん！」

それで、なんでお前がここにいる、田中！

脊髓反射で持っていたバケツを思いっきり投げつける。まだ特に何をされたわけでもないが、もはやこれは田中に対する礼儀のようなものだ。

ぱかん、といい音を立てて水色のバケツが田中の頭をとらえる。ナイスコントロール、私。

「なんでですかっ、なんで！？ 僕、挨拶しただけですよね！？

寝起きの二十九日さんが色っぽいだとか、寝坊して慌てて支度したからシャツの第二ボタン開いてるラッキーとか、後れ毛が残るうなじを舐めたいだとか、まだ全然口にしてませんよね！？」

「殴られるのが後か先かの問題だけだな！」

指摘されたボタンをとめながら、私は律儀に投げつけられたバケツを拾ってこちらに近付いてくる田中を睨み付ける。だから、なんでお前がここにいて、田中！

そんな疑問を口にしようと、少し高い位置にある田中を見上げて

——私は無意識に息を飲んだ。

そこにあつたのは、いつもの柔和な笑みではなく。かといって先ほどのことに怒っているようでもなく。ただ何か重苦しいものを耐えているかのような、そんな表情だった。

田中の冷たい色の瞳が、何かを探るように私に合わされる。伸ばされた節の目立たない綺麗な指が、瞼にそうつと触れた。

「泣いて、いたんですか？」

低く、どこか切なげな声が吐き出される。まるでそれが自分の痛みであるかのように、田中はその整った眉をひそめた。

少し乾いた指の腹がゆつくりと優しく、腫れて熱を持っていた瞼を撫でる。その感触に私は我に返って後ずさる。

鏡も見ずに出てきたから、泣いて目が腫れているなんて考えもしなかった。あまりの恥ずかしさに腕で顔を隠すと、田中の体温が急に近付き、私を包み込んだ。

「泣かないで。隠さないで。あなたに泣かれると、僕は本当に辛いんです」

制服から、かすかに田中自身の香りが鼻を掠める。それは太陽の香りで、草原に吹く風の香りで、よく干された乾草の香りだった。

ひどく懐かしく、心地よい。思い出の中にある、子馬を抱き締めた時と同じ安心感。

やわらかく背をたどる大きな手の感触に、自分がとても疲れていたことを思い出すような気持ちになる。自分よりも高い体温に包まれて、その遅しい両腕は私が甘えてすぐることを許してくれているようで。

このまま、大声で泣いてしまいたい。

一瞬そう思った私が身体の力を抜こうとした、その時。

「尾野、か？」

背後からかけられたその声に体が芯から震えた。

しばらく聞いていなかったにも関わらず、すぐにそれが誰のものなのか私にはわかる。今朝、夢に見ていたその人の、声。

抱き締めている田中の腕をふりほどき、私はゆっくりと後ろを振り向いた。

「……榊部長……」

振り向く前からわかっていたはずなのに、その変わらない姿を目にして私は呆然とその名呟いた。

癖の強い髪の毛を掻いて、その人は大らかな笑みを懐かしい顔に浮かべる。

「よお。久しぶり、だな」

乳と尻と波乱の予感

なんで、と声に出して部長へと駆け寄ろうとした、その瞬間。

強い力で腕を掴まれ、後ろへと引き寄せられる。よろめいた私の頬にあたる、紺色の制服に包まれた固い胸板。遅しい腕がすかさず私の腹にまわり、さらに密着度が高まる。

それは先ほどまでいた、田中の腕の中。

部長の前で抱き締められている、と自覚した途端に急激に上昇する体温に、顔が赤くなるのを感じる。

そんな私を見つめていた田中は、につこりとどこかわざとらしい笑みを浮かべ、そしていきなり朗々とした美声を辺りに響かせた。

「不審者発見！ 確保お願いしますっ！」

何を言っているんだこの馬は、と突っ込む間もなく、がたがたと何やら大きな音がしたかと思うと目の前にはふたつの影。——訂正、ふたりの馬鹿。

「御用だっ！御用だっ！」

「神妙に縄につけ」

飛び出してきたふたりの男が、あまりの展開に固まる部長に体当たり。短い悲鳴を上げつつ地面に転がった彼の上に馬乗りになった。おまえら今、どこからわいて出た！？

突然のことに突っ込みすら追いつかない。

というか、この馬鹿二人——駐在大野と獣医杉村——に私のツッコミが追いついたことなどあっただろうか。

田中に抱き締められたまま嘔然としている私には構わず、大野と杉村は自分たちの体の下に潰している部長を引き起こす。

「まさか警官が張り込んでいるとは思わなかっただろう、不審者その一」

「ふ、不審者？」

「今さらしらばつくれても無駄だって！ あんた、最近この辺りをうろつろしてただろうがっ」

杉村のその言葉に、大野との昨日のやり取りを思い出した。そう
だ、それで私、あんな夢を見たんだっけ。

起き抜けの急展開に思考がうまく働かず、どこかのんびりとそんなことを回想しているうちに、部長を拘束中のふたりはひどく真剣な顔をして彼に詰め寄っていた。

「で、目当てはどっちだ？」

「は？」

「正直に言っちゃえよ、不審者。あれか、乳か。乳が目的だったんだろ！？」

「待て、杉村。駐在は俺だ。当然、尻だろう。尻にひかれてついやってしまったんだろう？ 気持ちはいわからないでもないが、残念だったな。お前が狙っていた尾野には、そのどちらも存在しない！諦めろ！」

「やかましい！！」

さっき田中が拾ってきたバケツを二人に向かって投げつける。それは大野の後頭部に命中したあと、反射角によって杉村の横っ面をも直撃する。

いい音させやがって。頭に中身入ってるんだろうな、お前達は！
ついでにいつまでも引っ付いている田中の横っ腹に肘を入れ、悶

え苦しむ奴を一瞥すると、そのまま同じように頭を抑えてしゃがみ込んでいる馬鹿二人に近付いた。

「誰の乳と尻が残念だつて？」

「事实は事実として受け止め、前を向くことが大事だと思うぞ、尾野」

「えっ、乳談義？ 乳談義？ 俺、パワーポイント使って説明していい？」

切れ長の瞳をうるませ、励ますように肩に置かれた手が憎い。そしてダメーじから素早く回復して、何かを期待するようなきらきらとした目が憎い。ついでに無駄に美形な田中も憎い。

私は立ち上がってきた馬鹿二人の尻に蹴りを入れる。「最近、尾野ちゃんのツツコミ最速……」などと減らず口をたたく杉村にもう一発入れて、大きく深呼吸。それから、ぽかんとしてこちらを見ている部長に向き直った。

「騒がしくてすみません。……お久しぶりです、榊部長」

「尾野……」

感慨深げに目を細めてこちらを見つめる部長に、私もかすかに微笑を返す。とりあえず事情は中で、と言おうとした私を部長の腕が引きとめた。どきり、とする胸の内を隠して、私よりずいぶん高いところにある顔を見上げる。

ゆっくりと、見慣れた唇が開いて。

「尾野は……乳も尻も残念じゃないよなあ。主張が少ないってだけで」

ニッセンで探せば、読める空気とか買えるんだろうか！

のんびりとした笑顔でとんでもない爆弾を投下した部長に、そこはかとなし殺意を覚えた私は決して薄情ではないと思う。

言葉を失った私の頭を大きな手が少し乱暴に撫で、その懐かしさにふいに涙ぐみそうになる。こういうところが、ずるい。

私から何か言い出そうとする時、この人はいつだってこうして言葉をかき消してしまう。

何度も口にしようとした終わりの言葉も、目の前にあるこの人の唇が飲み込んでしまったのだ。だから、私は――。

撫でられたまま、泣くまいと必死にまばたきを繰り返していると、ふつと頭の上の重みが消え去った。

部長と私の間に差し込んだ影に上を見上げれば、そこにはさっきまで痛みに悶えていたはずの田中の姿。私の頭にあつた部長の手を、男にしては繊細に見える田中の手がかつしりと掴まえている。

いつもの柔和な美しい、しかしどこか胡散臭い笑顔で田中が口を開く。

「こんにちは、初めまして。僕、二十九日さんのケンタウロス、田中東馬と申します」

深く耳に柔らかいその声に、何か不穏なものを感じるのは私だけではなかったらしく、尻を押さえたままでありゆきを伺っていた馬鹿二人が、びくりと肩を揺らした。何かとてつもなく恐ろしいものを前にしているように、額にぶわりと汗が浮かぶのが見える。

掴まえた部長の手を、むりやり握手の形に変えた田中は、ぶんぶんとしてそれを振り回した。

「嬉しいなあつ。二十九日さんの『元カレ』に、こんなところでお会いできるなんてっ」

なぜか『元カレ』の部分強調して笑う田中に、驚いてされるが

ままだった部長の顔が意地の悪い表情へと変わる。図体がクマだけに、そういう顔を見ると迫力倍増だ。

並び立つ田中も決して細いほうではないが、こうして見ると部長のほうが一回り大きい。

なんていうか、ものすごく面倒くさいことになりつつあったりするのか。まさか。

「こちらこそ、よろしく。いやあ、それにしても尾野、本当に馬が好きなんだな。ケンタウロスが飼いたくて在宅勤務になったわけじゃないだろうな？」

「え、あの」

「ふふつ。冗談がお上手な方ですね！ 僕と二十九日さんとは運命で結ばれた恋人同士なんですよお！ 二十九日さんてば、僕にはいつも激しくて……もう壊れそうなくらいです……」

「おい、待て」

「ああ、馬の調教って意外と難しいらしいな。それで、どのレースに出る予定だ？」

「ちょ、聞いて——」

「本当にもう面白すぎて後ろ足がうずいてくるほどですよ。北海道のクマ牧場からここまで、さぞお疲れになったでしょう？ 駐在所で少しお休みになったほうがいいですよ！」

ねえ大野さん、と貼り付けたような笑顔で大野に視線を向ければ、奴は壊れた赤べこ人形のようにかくかくと上下に首を振る。

お前、仮にもドエスだろうが！ エスとしてのプライドを持てよ！ 助けを求めるように隣の杉村を見たが、こちらはすでに逃げ腰になっっているところを、直立不動の大野に腕を掴まれ引き留められている状態だった。

何これ。村最強の生物は田中だってことなの！？

愛想良く笑い合いながら、自らの握力の全てで握手を続行してい

る二人の男。その禍々しい何かにだいぶ引きつつ、私はしかたなく田中の横っ腹をつねった。

「あつ！……二十九日さん、こんな昼間から人目もあるのに、大胆ですっ」

「変なところに性感帯持つな、この変態が！」

部長の手をあっさりと放り出し、頬をむかつくほどバラ色に染めた田中が、すりすりと私に体をすり寄せる。どうしよう、近くに何も撲殺できる道具がない。

しかたなく無駄に色っぽい喉仏に一発拳を入れて、むせる田中を放置しつつ、私は部長に母屋を示した。

「あの、ここでは何ですので、こちらに」

「悪いな、突然来たのに」

部長も部長で何事もなかったかのように田中を見捨て、申し訳なさそうに頭を掻く。

どういふ事情があるにせよ、来てしまったものはしかたがない。話し合わなければならなかったのだ、いつか。

私は軽く息を吐き、母屋へ案内するため歩き出そうとして、止まる。右足になんだか既視感のある重みと温もり。

「いやだああつ、僕も行きますっ！絶対にあたりつきりなんて駄目ですうっ！」

お前は地区唯一のスーパー金子で駄々をこねる五歳児か！

舌打ちをしつつ足蹴にしようとして、こちらを見上げる田中の目と目が合う。情けなく下がった眉と、うるんだ氷色の瞳。いつもの冗談の延長みたいに見えるその仕草だけれど、どこか必死な表情が

胸に迫る。

足首を掴んでいる手はなぜかかすかに震え、視線はいつもより弱々しい。くそう。

「……きちんと泥を落としてから上がってこい」
「はいっ！」

私の言葉にぱつと顔を輝かせ、田中は素早く立ち上がると勝手口のほうへと走り去った。

なんでありつは、一度も説明も何もしたことがないのに、うちの足洗い場まで把握しているんだろ。一瞬そんな疑問が頭を過ぎるが、突き詰めると恐ろしいので忘れることにする。

「好かれてるなあ、尾野」

「まったく嬉しくないですけどね！」

なぜか嬉しそうにそう言う部長に顔をしかめて見せて、少しばかりの波乱の予感とともに、私たちは今度こそ母屋に向かうのだった。馬鹿二人は放置したまま。

背中合わせとファーストキス

「遠いところからいらっしやって、お疲れでしょう？ 遠慮なく上座へどうぞ、榊さん」

「いやいや。君のその身体じゃあ、そこはきついだろうし、上座のほうがいいんじゃないのか？」

「あ、お気遣いなく！ 僕、二十九日さんの背もたれになりますしっ」

「どっちでも、もうどうでもいいんだけど——狭い」

とつくにぬるくなつたお茶をすすりながらそう訴えると、私を挟んで座った部長と田中が、さらに身を寄せながらわざとらしく笑う。人の好きそうな大らかな笑みと、完璧に整った貴公子然とした笑み。どちらも女性が騒ぎそうなものだが、今の私には不穏な予感しか抱かせない。

とりあえず問題は、何で座卓を前に横一列、三人仲良く並んで座っているんだと。その一点に尽きるだろう。

「何でこの並び……」

なるべく、どちらとも顔を合わせないようにしながらため息とともに呟く。すると、私の背中に尾をぱしと当てながら、田中はなぜか嬉しそうな声を上げた。ていうか、おまえは仕事に行けよ、郵便配達員。

「僕、ふたりの結婚式は神前でって考えているんですよ。だから、こついう並びには今から慣れておきましょう？ ねっ」

「供物か、供物になりたいのか、田中」

「あ、心配しないでくださいねっ。今はケンタウロス用の羽織袴もレンタルできるんですよ！」

「そうかそうか。しめ縄で苦しまずに処分してやろうな！」

どこの乙女だと言わんばかりに頬を染め、薄い青の瞳をきらきらさせてこちらを見つめる田中の麗しい顔に即座に裏拳を叩き込む。世紀末救世主の出てくるあれの、やられ役のような声をあげて倒れた奴を放置し、私は湯呑みを持って立ち上がった。奴らがここに座りたいというならばしかたない。私が上座へ行く。

なんだこれ。話に入るまでになんでこんなに疲れを感じなければならぬんだ？

「それで、榊部長。今日は……どうして？」

「ああ、今日はちょっと挨拶に、な」

「殴られたのに、僕まる無視ですか！？」

くそ、あの殴り方じゃあ、もう五分も黙らせることができないのか。次はもつと、何かいい道具を用意しておくしかないな……。

高い鼻を赤くしながら立ち直ってきた田中に、私は面倒臭さをまるで隠さない視線を投げて湯呑みを指さした。

「茶がない」

「わっかりました！ 二十九日さん、僕のいれたお茶じゃないとダメなんですネっ。ああもう素直じゃないんだからっ、二十九日さんたらっ」

嬉々として立ち上がった田中は、迷うことなく奥の台所へと走って行く。蹄で畳が傷つくからそつと歩けって言っただろうが！

っていうか、なんでおまえ、うちの間取りとかそういうの把握し

てるの！？　ねえ！

何で茶葉の場所とか聞かないのか、とかそういう諸問題を突き詰めると、やっぱり恐ろしいことになりそうなので、奴がいない間に話を続けることにしよう。うん、そのほうが心が平穏な気がするし。

「馬、というか……犬だな。忠ケンタウロス田中くんか」

「あれのことは気にしないで下さい。さっきの続きなんですけど…

…」

田中の消えた方向をなぜか楽しげな瞳で見つめていた部長に、私は話の続きを促した。

訊きたいことはたくさんある。メモのこと、ここに来た理由。そして、話さなければならぬことも。

そうして少し気まずそうに目を逸らした私に、ふっと部長の笑う気配。

「しばらく会わないうちに変わったな、尾野」

柔らかく深みのある声に、私は唇を噛んだ。なにもかも、もう昔のことなのだと言われているようで、少しだけ胸が痛む。

それは当然のことなのに。最初にこの人から逃げたのは、私のほうなのに。その思いが、私に自嘲的な笑みを浮かべさせた。

「何も、変わってません。私はずっと、逃げてばかりで――」

「俺も」

「え？」

「俺もずっと逃げてた。あいつが死んでからさ……。おまえをこの腕に入れた時だって、こんな幸せはずっとは続かないって、自分に言い聞かせてた。失礼な奴だよな」

過去の感触を確かめるかのように、そつと差し出された大きな手。節ばったその指に、あの時切なく光っていた指輪はもう、なかった。はつと顔を上げた私に、部長はくしゃりとまるで子供のように笑う。

「俺は、ずっとお前に甘えてほしいって思ってた。お前、一度も俺を名前で呼ばなかっただろう？ 呼ばないけど、いつもちよつとだけ泣きそうな顔してた。さっきみたいに、唇かんで。……自分じゃ、気付かぬえか」

指輪ひとつ分軽くなったその左手で、昔のように部長が私の頭をわしゃわしゃと撫でる。変わらない、温かい体温に私は涙をこらえた。

部長はそんなこと、気付いていないと思っていた。あの朝からずっと、私が何を我慢していたのかなんて。きっとこの人を名前で呼べるのは、奥さんだけだから。

「でも、『甘やかしてやりたい』って俺が甘えてたんだよ。お前を理由にした。俺がちゃんと向かい合わなきゃならなかったのに、ずっと背を向けてばかりだったと思う。お前がどこかへ行っちゃうのは仕方がないよ。そこで気が付いたって、遅いっつんだよな」

そう言う部長の瞳は、もう過去を反芻するように茫洋としたものじゃなく、しっかりと私を見つめていた。多分、私がほしくて口に出せなかったもの。

そうやって言いたいことを我慢して、我慢させていることにこの人は傷ついて、少しずつすれ違っていったんだろう。私たちの恋。あれは確かに恋だったのに。

「私も……私も、あなたを甘やかしたかった。優しくしたかった。

あなただけに、優しくされたかった」

二重の綺麗な瞳を真っ直ぐ見つめて、私は言う。私に優しくするのを許すのはあなただけだと、そんなわがままを言いたかった。そして同じ事を部長にも言っただけだと、心のどこかでずっとそう望んでいた。

それを迷惑になるから、負担になるからと勝手に決めつけて、距離を作った。それに耐えられなくなって、私は逃げたんだ。部長が傷つくなんてこと、考えもしないで。大事にしていた思いから逃げて、守りたかったのは結局自分自身だった。

そうやって、私は逃げた。部長が営業から移動になるって聞いて、勝手に区切りかもとか考えて。気が付いたら在宅勤務について、総務で話を進めてしまっていた。

この人にはなんにも知らせずに。

「馬鹿だな、俺たち」

深い思いを噛み締めるように、部長が呟く。本当に、馬鹿みたい。ふたりして、密やかな笑い声を立てる。

思う存分お互いに甘えていたのに、もっともつと、まるで無い物ねだりをしていたのだ。一歩踏み出せば届くところにあったのに、背中合わせで、同じ空を見上げていた、不器用な二人だった。

きつともう、その空を二人で見上げることはないのだろう。私は目の前の部長の笑顔に、それを悟る。強がりでも、そう思えたことが嬉しかった。

「でも、間違えた相手が部長でよかったです」

「それは喜んでいいのか？ まあ、俺もお前でよかったよ。乳と尻が物足りなくってもな」

さすがに上司相手に拳を振るうのは我慢して、座卓の上にあった手をばちりと叩くに留める。危ない危ない、最近暴力に対して抵抗感が薄れているな。馬鹿どものせいで。

馬鹿といえば、お茶をいれに行っただはずの田中が戻ってこないことに気が付いた。あいつ、まさか私の部屋で布団の匂いとか嗅いでるんじゃないだろうな。変態だし。

否定できないその予想に顔をしかめて台所に視線を走らせると、それに気付いた部長はにやっと悪い顔をした。

「気になるのか？ ケンタウロス田中君が」

「いや、気になるっていうか、目を離すとんでもないっていうか……」

「気を遣ったんだと思うぞ。お前のこと、心配は心配なんだろうけど、他人が聞いちゃいけない話だって思ったんだろ」

どこか嬉しそうな部長の言葉に、私は首を捻る。あれがそんな殊勝な馬だっただろうか。

しかし、確かに田中の気配は家の中から消えていた。多分、台所の勝手口から外に出て行ったんだろうけれど……本当に？ 私に気を遣って？

半信半疑で顔をしかめた私を見て、何を思ったのか急に部長が身体を近付ける。四つん這いでにじり寄って、何事かと腰の引けた私の腕を強引に掴んだ。

「信じられないなら、試してみるか？」

何を、と問い返す間もなく、ざらりとした湿り気のある感触が耳たぶに走る。行為に遅れて、それが部長の舌だという認識が脳を直撃した。舐め、られた！？

体温が一気に上昇し、真っ赤になった私の目の前で、部長は心底

楽しそうな——というより、どこかいたずらを成功させた小学生のような笑顔を見せる。

何その笑顔、という心のツツコミは、喉の奥からせり上がってきた自分の悲鳴に飲み込まれた。

「っ、ひいああああああっ!!」

「こっの、二足歩行のクソ野郎が！ 二十九日さんに何してんだ、蹴り飛ばすぞ!!」

私が叫んだ瞬間、すぱんと襖を勢いよく開けて、田中が居間に飛び込んできた。待機してただと!?

いつもの馬鹿丁寧な口調はどこかへ消え失せ、赤髪が怒りに呼応するかのよう逆立っている。氷のように冷やかな、けれど憎しみすらこもった視線を受けて部長は私から体を離れた。

今にも本気で踏みつけてやると言わんばかりに、どすりどすり畳みに叩きつけられる田中の前足。それに臆することもなく、部長はまだ呆然としている私を振り返って口を開いた。

「なっ、俺の言った通りだろう?」

そしてひとり大爆笑。悪意の欠片も感じないその清々しい笑い声に、私も怒り心頭だった田中も、何だか毒気を抜かれてため息をついてしまった。だってわかったから。からかわれた、と。

舐められた耳を押さえたまま、恨みがましい視線を送るしかない私を見て、田中が部長の肩を前足でどついた。

「訂正します。榊さん、冗談が大変下手でいらっしゃる。二度とされないように、少し体で覚えてお帰りになつたらいかがですか? 今なら多少、優しくできる気がしないでもないですよ」

肩を押されて転がった部長の腹をぐりぐりと前足で押しながら、田中は全く笑顔に見えない笑顔で低くささやく。田中、全然優しくする気が見えないぞ。

畳を叩いてギブアップを宣言する部長を横目に、私は田中の横っ腹を引っぱたく。するとかなり不満そうにしながらも、田中は素直に退いた。

「大体、僕だって二十九日さんの耳を舐めたことないっていうのに」「食肉処理センターに電話しよう。今からならまだ間に合うと思う」

神妙な顔で何を言うか。

必死に私を守ろうと飛び込んできた雄姿に、多少動かされていた心が凍る。本気でタウンページに手を伸ばす私を見て、しかし田中はうつとりと呟いた。

「そんな、食べちゃいたいくらいだなんて、照れます。しかも元力レさんの前で……」

「人をまるで変態みたいに言うな、この変態が！」

手にしたタウンページの角でケツを叩くと、田中は涙目で「角はっ、角はやめてっ」とのたうち回った。意外といい感じの武器かもしれない。

そんな私たちのやり取りを見ていた部長は、まだにやにやと笑いながら立ち上がる。未だ去らない嫌な予感が怖い。部長がこんな顔をする時には、いつも営業さん達が悲鳴を上げていたのを思い出したから。

「ま、話も済んだことだし。俺は帰るとするわ。明後日からちょっと海外なんだな」

「海外？ 仕事、じゃないですよね」

うちの会社に海外支店なんかないし。もしかして有給中なのかいや、だけど私が在宅勤務になる少し前に市場にあるうちの店を任されてるし、あそこだと忙しすぎて長い休みを取る余裕はないはず。そう言えば、最初に部長「挨拶に来た」って言っただけ？」

突然出てきた『海外』の二文字に、目を白黒させる私を見て部長は言葉を続けた。

「俺、会社は辞めたんだよ」

「えっ!？」

「昔からの友達が海外で会社興したっていうから、そっち手伝おうと思って。前々から誘われてはいたんだけどな、なかなか踏ん切りがなかったんだ。……尾野とのことで色々考えて、そういうことになった」

見たこともないくらいの明るい笑顔。その笑顔になんとか満たされるような気持ちで、驚きながらも私も思わず笑みを返した。その答えがああ指輪なら、きつとこの人も前に進もうと頑張っているんだ。そう気が付いたから。

そしていつかの言葉を思い返す。

初めての喪失を語ったあの日の夜、私を抱き締めながら『失ったものは二度と戻らないけど、似たようなものはきつとまた手に戻ってくる』と、まるで自分に言い聞かせるようだったあの言葉を。

この人の探しているものは悲しいけど私じゃなくて、私の探しているものもこの人ではなかった。お互いに気持ちがあったから……むしろ、あつたが為に回り道をした。

「……気を付けて」

「ありがとう。お前もな」

余計なことは口にしない。

けれど、私の考えていることが全て伝わっているかのように、部長は頷いた。そしてまた、その手で私の頭を撫でる。優しくない、いつもの乱暴なやり方。多分、これが最後になるだろう。

思いを引きずることもなくあつさりと手を離れた部長は、黙ってそれを見ている田中を振り返ってにやりと笑った。せっかく霧散していたはずの予感が、一直線に走って戻ってくる。

「で、田中君はもう尾野とキスしたの？」

なんでそこ。今の今まで私たち、ものすごくいい感じの別れの挨拶でしたよね！？

これから互いの前途を祝って一本締め勢いでしたよね！？
どうしよう、ここは田中をとりあえず殴っておこう。決意とともに拳を握って田中を見ると、なぜか奴は深く頷いた。もうすでに手遅れな気がしてならない。

「僕たち、清いお付き合いですから！」

「ていうか、付き合ってもいないよね！？」

本当にもうやだこのケンタウロス。妄想膨らませすぎなんだよ！
どうしよう、奴の中ではさつきからもう結婚までのプランが綿密にできあがってるっぽいよ。そのうち、『一緒に入るお墓、買いましたから！』とか言い出すよ、この馬。

そして私に何も知らせずに、あの住職は絶対に売りつけるんだろ
うなあ！ 禿げてるから禿げるとか言えないのが腹立つ！

あまりの衝撃に関係ないところにまで突っ込み始めた私を見ながら、部長はさらにすごく素敵な笑顔で田中に近付いた。

「じゃあ、俺からのプレゼント！」

間近に迫った部長の顔に、珍しく素できょんとしていた田中は、次の瞬間その青の瞳を限界まで見開くこととなった。

制服の襟元をひつつかんで強引に引つ張り、よろけた田中の唇に部長の唇が重なる。奴の鋭く直線的な鼻梁をうまく避けるようにして、より深く合わさる。なんだよ、この佐内さんちの双子美少女達が好きそうな展開。

あまりのことに、私の頭の中にはそんなことぐらいしか思いつかなかった。

そうして短かったのか長かったのか、よくわからない数十秒後、やっと満足したように部長が身体を離す。

「これ、尾野と間接キス。嬉しいだろ？」

「うつ……」

目を見開いたまま固まる田中に、私は初めて同情の念を寄せる。お前の尊いがよくわからない犠牲は忘れない。なんていうか、私の知らない場所に行って早く成仏したらいいよ。

そんな優しい言葉をかけようと近寄れば、田中ははっと我に返って私を見返した。その美しい顔がみるうちに真っ赤に染まる。しかし、美形はどんな顔をしていても美形である。むかつく。

「ぼつ、僕のファーストキス……」

「あつ、なに、まるつきり初めて？」

唇に手をやってわななきながら果然と呟かれたその言葉に、部長はこの上なく軽いので「ごつめーん」などと返した。人の悲劇は笑えるって本当だな。

というか、好き好き言う割になんか妙に恥じらいがあると思った

ら、ファーストキスもまだっておまえは中学生かよ！

私のそんな呆れたような視線をどう解釈したのか、田中は半泣きになながら後ずさりをする。おいやめろ、畳が痛む。

「うわああああああんつ、僕は穢れてしまいました！ 二十九年さん、ごめんなさいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

雄叫びを上げながら全速力で走り去るケンタウロスを、誰が引き留められるだろうか。私はもちろん、黙って生暖かく見送ることを選択した。

しかしそこはかとなく、かわいそうはかわいそうなので、郵便局には電話して置いてあげよう。もちろん、今あったことはすべてしっかり説明して。

明日辺り、この地区全体から哀れむような目で見られるだろうけど、しょうがないよね。

「すまん。つい、いじめちゃったよ。さすがに、元彼女が無防備にしている相手はむかつくから」

「……そんなんじゃないですよ」

「そうか？」

じゃあ、そういうことにしておくか、なんて憎たらしいことを言いながら、部長は自分の荷物を背中に背負う。私もしかたなく笑ってそれを手伝った。本当に、最後まで読めない人だ。

そうして今から玄関に移動しながら、ここまででいいよ、という言葉に従って私はそこで足を止めた。部長が、笑う。

「じゃあ、またな」

また、なんてもう二度とないと知りながら、それでもそう言って

くれるこの人の優しさに感謝する。

だから私も「また」と口にして、そうして部長は背を向けて歩いて行った。だんだんに消えていくその背中を見つめながら私は、少しだけ流した涙を見られていないといいと願った。

幕間 バス停とケンタウロスと俺

大概ぼろぼろになった屋根と、申し訳程度に置かれた木のベンチ。人気のないバス停で、俺はのんびりと煙草を吹かせていた。次のバスまで四十分とは恐れ入る。

大荷物を手にひとり、こんな所でのんびりしている自分がなんだか可笑しくなつて、思わず笑みを零した。

「一緒に行こうって言わなかったんですね、榊さん」

不意に耳触りのよい声が背後から聞こえ、俺はその予想通りの言葉と人物を振り返る。

真っ赤な髪と対照的な薄氷色の瞳が、真っ直ぐこちらを見つめている。射抜かれるようなその瞳に、なんの感情も今は見えない。俺はふうつと紫煙を吐き出した。

「言わなかったよ」

「どうしてです？ チケット、用意してきたんでしょう？」

かつ、と小気味のいい蹄の音を響かせて、その人物——田中東馬は俺の目の前に立つ。後ろに太陽を背負っているせいで、その彫像の如き美貌には影が差していた。それがより、こいつを作り物めいて見せる。

彼女の前で見せていた、表情豊かどこか憎めなさそうな青年の仮面はない。

そんなことは欠片も匂わせなかったはずなのに、と俺は上着にしまいっぱなしだった二枚の航空券を思う。察しのいい奴ってのは昔

から苦手だ。

「なんで、そんなこと訊くんだ？ ええと、田中君。俺が尾野を連れてつちゃって、君はいいわけ？」

「それが彼女の幸せなら。僕は喜んでお見送りしますよ」

「ふうん」

抑揚のない、まるで書かれたセリフをただ読んだだけのようなその言葉に、俺は一応相づちを打つ。そして煙草を手にしたほうの親指で、少しだけ寄ってしまった眉間をほぐした。

こりゃあ、またやつかいなもんじゃ好かれたものだ、あいつも。なんて、人ごとのように考えてから、その『やつかいな奴』には自分も当てはまるなあ、と苦笑い。

「田中君はさ、俺のこと嫌いじゃなかったっけ？ 少なくとも、応援はしてなかったよな、さっきまでは」

厩舎の前で初めて会った時から、敵意っていうよりも殺意、みたいな空気をばりばり出されていた気がするんだけどね。

上目遣いに田中を見れば、そこで初めてその整いすぎて人形じみた容貌が表情を浮かべる。どこぞの宗教画の中にもないだろうと思えるほど、清廉な微笑み。

しかし、これはうっかりときめくぞ、と考えた俺に降り注いだのは、その笑顔とはまったく真逆の言葉たちだった。

「嫌いって言うか、ものすごく嫌悪していますね。うん、というか憎悪？ まあ、言葉なんてどれでもいいんで、むしろその手の言葉のすべてをお贈りしたいくらいです。今現在も、一秒ごとに頭の中であなたのこと切り刻んでますけど」

「うわあ」

激しい感情の起伏も見せずに、そう淡々と悪意を並べられるのも
けっこう恐ろしい。俺は訊いたことを本気で後悔しつつ、短くなっ
た煙草を携帯灰皿へと放り込んだ。

「当然でしょう。あなたのことになると、二十九日さんが泣くん
ですよ。二十九日さんを泣かせるなんて、万死に値します」

「じゃあさ、なんで俺に尾野を託そうって思うんだ？」

「あなただから、ですよ……」

さっきまで天使のようだった顔が、うつむき歪む。銀貨三十枚を
受け取った奴だって、こんなに苦しみはしなかっただろうと思える
ほどの、苦渋。

「あなたは二十九日さんの悲しみを理解できる。僕には、それがで
きない」

まるでささやくようにそう言った田中は、頼りなげな吐息をこぼ
して顔を上げた。そこにはもう、暗い色は一切見つけられない。ま
た元通りの美しい顔。

歪みきったその恋情に、何だかこっちのほうで泣きたくなくて、
俺は慌てて新しい煙草に火を点けた。

深く深く吸い込んだ煙を吐いてため息を殺し、なんてこいつは馬
鹿なんだろう、と思う。

「それでも、尾野は選んじまってるからなあ。もしも俺と一緒に来
てくれて言っても、来なかったと思うぞ」

「選、ぶ？」

「おまえのことは知らないけど、少なくともお前がいるここでの生
活を、あいつはもう自分の一部みたいに思ってるんじゃないのか？」

……いつまでも、“子馬”を亡くして泣いてるだけの子供じゃないだろう、尾野も。そう思わないか？」

俺の言葉にはっと目を見開いて、それから田中は警戒するかのようになんて一言だけ後ろへと下がった。

にやりと笑う俺の目を、探るように見つめ返して低く呟く。

「あなた、どうして……」

「それでも二時間サスペンスって好きなんだよ」

さらに何か言い募ろうとした田中は、道の向こうからようやく姿を現した路線バスを見て、思い直したように口を閉じる。

俺は煙草を消して立ち上がり、バスに向かって軽く手を挙げた。特に標識があるわけじゃないが、この辺の人たちはみんなここからバスに乗るんだろう。運転手も慣れた感じで手を挙げ、そうしてゆっくりと俺たち二人の前に停車した。

大きな音を立てて開いた扉から、まずは大荷物なのを謝りつつ、俺はステップに足をかける。そして少しだけ、振り向いて。

「あいつを幸せにしてやろう、なんて馬鹿なこと考えてると、そのうち嫌っていうほど殴られると思うぞ。これは、失敗した俺からのアドバイス」

「——どうも、ご親切に！」

「会う機会ももうないだろうけど、俺は田中君のこと忘れられないと思う。なんせ、初キッス奪っちゃったからなあ」

最後の最後に思わせぶりの視線をやれば、田中がその白い頬を赤く染めるよりも前に、運転手さんが咳き込んでしまった。俺と美貌のケンタウロスをちらりちらりと、興味の隠せていない目で見比べる。

しまったなあ、これからかなりの時間、バスに乗るのは俺なんだけど。

怒りのあまり口をぱくぱくさせている田中を置いて、俺が完全にバスに乗り込むと、動揺しつつも運転手さんは扉を閉める。行き先を告げるアナウンスに、田中はさっきまで俺が座っていたベンチのほうへと退いた。

どうやらお見送りはしてもらえらしい。

後ろの席に荷物を置いて、たったひとりの乗客である俺は窓に寄って田中に手を振ってみた。お返しに思い切り中指を立てられるが、気にしない。バスが加速して、その姿も小さくなる。

そうして彼方に過ぎ去っていくケンタウロスの影に、完璧に恋を終えたはずの俺は、なぜだか深い満足を感じていた。

本当に馬鹿だなあ、あいつら二人とも。

確かに田中が尾野の悲しみを癒すことはできないかもしれない。

それは、『彼』だから仕方がない。

だけど、俺はあんなに素直に感情をぶつける尾野を見たことがなかった。腹を立ててみたり、姿が見えないとそわそわして探してみたり。そんなの、もう恋じゃねえか。

必要なのは共感じゃなく、彼女が泣ける場所なんだ。

俺には最後まで隠した涙を見せられる存在が傍にいれば、もうそれでいい。

どうか、あの二人がお互いにとってそうであるように——俺はそう願っている、ひとり別れを思った。

幕間 バス停とケンタウロスと俺（後書き）

11/5、本文中の「耳障り」を「耳触り」に修正致しました。これにつきましては、活動報告にて詳細を載せております。

夢と馬と私の望み？

最近、田中の様子がおかしい。

いや、おかしいのはもとからだけど、今回はそれとはまた違う。なんていうか、全体的に満遍なく斜め上方向に、変なのだ。

「こつ、こんにちは、二十九日さん！ いいお天気ですねっ」

「大雨降ってるけどな」

というか、台風が近付いてきているこの大荒れの空模様を見て、そんな白々しいことを言うのは田中、おまえだけだ。

紺色のカップを着込んだ田中にハンコを渡しながら、私はあくまで冷静につっこみを入れる。すると、とたんに大人しくなつて「そうですよね、雨ですよね」なんて、心ここにあらずで頷く奴はとつてもなく不気味だ。

しばし無言で伝票を確認。いつものようにハンコを押すと、それは荷物とともに返される。

「……」

で、この沈黙はなんなんだ？

今までの田中ならここで「僕、寒さに弱いんですっ。だから、温め合いましょうよ、ねっ」とかうざいことを言い出すはずなのに、思わずまじまじとその顔を見つめると田中は、なぜか顔を真っ赤にしてもじもじと後ずさりをした。馬鹿なこと言わなければ、迫ってくることもない。

え、なにこれ。調教の結果ってこんな風にいきなり出るものなの

？ 教えて調教師さん！

「あの、それじゃあ、その……失礼しますっ」

最後までこちらを一度も見ることもなく、田中は慌てて頭を下げて玄関から飛び出していく。その姿は昨日から降り続けている大雨に、すぐに見えなくなった。

少しの間は道路を走っていく気持ちのいい蹄の音が聞こえたが、それもまた雨の音に紛れて消える。

本日の田中の滞在時間、五分少々。おかしい。

これが恋の駆け引き的作戦なのだったらガン無視だけれど、そんな高等技術がああ馬に使えるとは思えない。っていうか、使ってたらストーカー呼ばわりはされないだろう。

玄関先で立ち尽くしたまま考え込む私を、土間のほうから聞こえたアルカディア号のいななきが現実へと引き戻した。

雨風がひどくなりそうなので、本日彼女は屋内に退避中。こういう時にこの古い造りの家は重宝する。

いつそのこと今日はアルカディア号と一緒に眠ろう、なんてことを考えにやにやしながら私は田中のことをあっさり忘れ、彼女の元へと急ぐのだった。

そのまま丸二日。台風を言い訳にアルカディア号との蜜月を過ごした翌日、私は見事に青っぱなをたらす状態になっていた。人はこれを風邪、と呼ぶ。

やっぱり土間に寝るのに、マットレスと藁だけじゃだめだったか。寄っかったアルカディア号が意外とぬくかったからいけるかと思

ったんだけど。

とりあえず、自分の風邪よりも高齢のアルカディア号の体調が心配で、朝一で呼び出した獣医の診断を見守る。

マスク・どてら装着の私を見るなり、「座敷わらしなんて、初めて見た!」とか写メを取った奴には、もうすでに蹴りを入れた。

「んー、アルカディア号の体調は大丈夫だな。特に風邪ってわけでもねえし。それより、尾野ちゃんのほうが心配なんだけど」

「微熱だし、寝てれば治る」

「診療所まで送るつか? 俺がついでに診るわけにもいかなえしな」

「微熱だし、寝てれば治る」

「え、なんでそんな最初からキレ気味なん、尾野ちゃん……」

「微熱だし、寝てれば治る!」

ずるずると鼻を鳴らしながら三度繰り返せば、獣医杉村は仕方がない、とばかりに肩をすくめた。いつもは空気を読まない男だが、あくまで読まないだけであって腹の中は駐在以上に謎の男である。

手を洗っててきばきと器具を鞆にしまい、それから思い出したように白衣のポケットから何かを取り出した。ほれ、といきなりこちらに放る。

慌てて受け止めて何かと見れば、それはまだ温かいハチミツレモンの缶だった。

「うわ、俺、ちよう優しいっ!」

私がおか言う前に自画自賛して、獣医は手を振って背を向けた。憎めない奴。

多分、今朝電話した時に鼻声だったのを気にかけてくれたんだろう。それを素直に渡さないところが、あの独身寮の住人たる所以か……。

私は見えなくなった背中、頭に下げた、家の中へと戻った。獣医に宣言した通り、今日は一日無理をせずひたすら眠ることにする。風邪は寝て治す、は私の基本だ。昔身体が弱くて散々病院のお世話になったせい、あそこは私の鬼門。あの独特の空気や匂いが、今でも大の苦手だったりする。

できるだけ医者には近付かないことを心に決めると、私は素直に布団の中へと潜り込んだ。お昼あたりにアラームをセットしておけばいいだろう。

そうして目を閉じた私は、すぐに深い眠りへと落ちていったのだ。った。

『二十九日さん、二十九日さん、二十九日さん』

いつものうるさいあの声が追ってくる。

飽きることも、諦めることもしない男の声は、この暗い空間の中であちこちに当たって響き、私は思わず耳を押さえた。うるさい。何だか頭は重いし体はだるい。もう少し静かにしろ、と怒鳴りたくてその姿を探すが、そこにいるのは私ひとり。

目にも鮮やかな色彩をまとった、あの馬の姿はどこにも見えない。背筋を何かがぞくりと駆け抜けた。寂しさではなく、もっと根源的な気持ち。空虚。ばかりと胸の中に空いてしまった場所が大きくて、驚く。

『二十九日さん』

不意に近くで田中の声がして、私は耳を押さえていた両手を外して顔を上げる。

栗色の毛並みに、いつもの制服。撫でたくなるような喉仏の形に、

引き締まった頬から顎にかけての線。こちらを見つめる瞳の色は、氷のように薄い青色。男らしさを損なわない優しげな顔立ちは、いつ見てもため息が出るほどに美しかった。

その美貌のケンタウロスが一步、こちらに近付くと、闇の中でその赤い髪が艶やかに揺れた。

『二十九日さん、紹介します。こちら、僕の新しい恋人です』

うつとりとどこか夢見るような瞳でそう言つて、田中は自分の背後を振り返る。そこにいたのは、やはり美しい造形をしたケンタウロスの女性。

彫りの深いエキゾチックな顔立ちに、これでもかと言わんばかりの大きな胸。くびれた細い腰の下に、芦毛の身体。

彼女は田中を見て微笑むと、その身を奴にすり寄せた。それほどこからどこ見ても、幸せそうな恋人同士のそれで。

その彼女に田中も白い頬を染め、腰に手を回して引き寄せる。私はただ呆然と、そんな光景を見つめていた。

そんなの、ずるい。

反射的にそんな思いが駆けめぐる。

いつも私を見ていたあの青い瞳が他の誰かを映すのも、その温かい胸に誰かを引き寄せるのも、あの深く胸をざわめかせる声が私以外の名前を呼ぶのも、全部。

全部、いや。

そう気がついた瞬間、私は目の前の田中に向かって拳を振り上げる。

「そんなの、やだっ！」

最初に来たのは、衝撃。

目がちかちかするほどの痛みに、私は呻いて額を抑えた。なに、なんなの、何が起こった？

そんな私の傍で、やはり何かがうめき声を上げて身体を丸めている。

「い、痛いですう、二十九日さん……」

「田中！？」

涙目をこすりながら隣を見れば、そこには上半身を折り曲げて悶絶している田中の姿。一瞬、さっき見た情景の続きかと身構えて辺りを見回す。

だけどそこは、当然ながら自分の寝室で、眠りについてからまったく変わっているところもない。ここに、田中がいるということ以外は。

じんじんと痛む額に手をあてつつ、私はうるんだ瞳をこちらに向けてくる田中につっこむ。

「何してる、この不法侵入ストーカー！」

「不法侵入については謝りますけど。だって、玄関からすつごく声をおかけしたんですけど、二十九日さん全然応えてくれないですし！ 心配だったんですよ。杉村さんから二十九日さんかお風邪だつて聞いたので……」

耳があつたら垂れているような声音で、田中は私にそう言い募る。夢の中で名前を呼ばれたと思ったのは、そのせいかな。熱のせいでくらくらする頭でそう考えた私は、直後、その続きを思い出して布団に倒れ込んだ。

「ひつ、二十九日さんっ！？ 大丈夫ですかっ！ 熱が上がったん

ですか！」
「うるさいっ」

おろおろと声をかけてくる田中に、完全な八つ当たり。

それでも恐る恐る布団を掛けてくれる奴に、私は完全に自己嫌悪に陥った。なんなんだ、あの夢は！

いいじゃないか、田中に恋人ができたって。同じ種族なら、なおいい。

一方的に押しつけられる好意なんて、今の今まで拒絶してきた癖に、少し引かれたらそれは嫌だって。私は子供か！

「あの、勝手にしてごめんなさい。だけど僕、心配で！ それでその、診療所の中村先生にさきほど往診を頼んだので、もうすぐ来られると思うんです。えっと、それからもし食欲があるなら食べたほうがいいと思つて、おかゆ作つたんですけど……」

嫁だ。今すぐ嫁に行け、田中。

こちらを氣遣うそんな言葉に熱くなつてしまった目頭を誤魔化すように、そんなことを考える。それは、いつものように向けられる、純粹すぎる好意。見返りを求めない、ただひたすらの愛。

枕元からこちらを見下ろし、今にも泣きそうな表情をした田中を見上げ、再度起きあがった私はなんとかひと言、言葉をひねり出す。

「あり、がと……」

言つて田中をちらりと見れば、一瞬ぽかんと目を見開いた奴は、次の瞬間その白皙の面をゆでだこに変えた。噴火するんじゃないかと思うくらいの赤。

あんだけ私に対して日々セクハラしているくせに、こんなことで赤くなるんじゃない！

つられて赤くなつたような気がしたのは、熱のせいだと自分を誤魔化する。

「そ、それとつ、さっき頭突きしちゃったから、ごめんっ」
「え」

夢にうなされて飛び起きた私の、額に激突したのは多分この馬の顔だろう。

私が額であれだけ痛かつたのだから、しばらく悶絶していた奴のどこにぶつかったのだから知らないけれど、相当痛かつたに違いない。田中がどうこうというよりも、人間として美しいものを愛でる気持ちを持つている私は、とりあえずそこも謝しておく。

こいつが顔を腫らした日には、佐内の双子あたりが怒鳴り込んできそうだしな。

そんなことをつらつら考えながら反応のない田中を見れば、やつはさっきよりも物凄い勢いで顔を真っ赤に染め上げていた。

飲んだ後に温泉に一时间浸かつて、こんなに赤くはならないと思う。

え、何、私今そんなに変なこと言つたつけ？

眉をひそめて田中のその顔を覗き込んだ私に、奴はすごい勢いで後ずさりを見ると、俊敏に立ち上がって頭を下げた。

「ごうごうごう、ごめんなさいっ！」

「はあ？」

そう謝罪するやいなや、田中は猛ダッシュで私の寝室から姿を消した。

どこかという蹄の音とともに、玄関から飛び出して行く音がする。だから、畳が痛むから走るなどあれば！

あまりのことに関係ないことを考えながら、私はただ呆然とそれ

を見送った。そして、再び布団に寝転がる。

なんて、面倒くさいことになっただろう。

夢が願望を映す鏡だなんて、そんなバカげたことを誰が言い出したのかと小一時間ほど問いつめたい。

「どろろって言うんだよ……」

情けなく呟いて、私は診療所の中村医師が訊ねてくるまで、そうして布団を被って現実逃避を試みたのだった。

二十三歳児（オス）のプチ家出と過去

「きつ、今日も本当にいいお天気ですよねっ」

「そ、そうだなっ、まるでもう春の陽気だなっ」

郵便受けを挟み、今日も今日とて田中と向かい合った私は、頬を染めてぎこちなく微笑む奴の言葉にごく自然に受け答える。うん、自然自然。

何だかほてる顔にこのどんよりとした曇り空も、吹いてくる多少秋っぽくも思える風も心地よい。まあ、秋だけど。

「えっと、その、これ、簡易書留になりますっ」

「はっハンコ！ ちょっと待て、ハンコ取ってくる！」

「あっ、二十九日さんっ」

これ以上ないくらいに自然に体の向きを変えた私が走り出そうとすると、その腕を田中の大きな手のひらがぎゅっと掴んで止めた。私の手首なんか余裕で一周してしまう男の手の感触に、私が思わず固まってぎぎぎと振り返ると、掴んでいる田中のほうが真っ赤になった。そして慌ててその手を離してから、あちこちをさまよった瞳が困ったように緩む。

「その……ハンコは、手に……」
「え」

指摘されて自分の右手を見れば、しっかりといつものハンコが握りしめられていた。こ、これはその、あれだ！

何やらさつきから熱い頬を無視して、半ば八つ当たりに田中を睨み付ける。

「あつ、新しいシャチハタがあるっ！ きよっ今日はそっちにするから！」

「は、はい……」

私のその勢いに気圧されたように田中が頷くのを確認すると、私は再びダッシュで家の中へと戻った。玄関の扉を閉めてひとまず深呼吸。

なんだこれ、なんだこれ、なんだこれ！

百メートルダッシュした後のウサイン・ボルトだって、こんなに心臓どきばくいわせていないと思う。多分——いや、絶対。

熱を出したあの日、例のあの恥ずかしい夢を見た後から自分がかしい。田中を見ると落ち着かないし、だからといって田中を見かけないとやっぱり落ち着かない。

いたらいたで殴りたくなるし、でもちよつとでも身体に触れるとどうしていいかわからなくなる。

田中は田中で何だかいつもモジモジとじれったいし、昔のように特攻してくることもない。

何が何だか、とにかくおかしい。全部が。

ため息をついて居間に上がると、私は宣言通り小箱から新しくしたシャチハタを取り出した。こんな風に、接したいわけじゃないのに。

あの柔らかな笑みを向けられる度、落ち着いた声が自分の名を呼ぶ度、その薄い氷色の瞳が不意に優しく細められる度に、私の胸がぎゅゅと締まって苦しい。

苦しくて、苦しくて、助けて欲しいと手を伸ばしたくなる。

「そんなのじゃ、ないのに……」

熱に浮かされたような頭を強く振って、私は意を決して玄關を開ける。私のその姿を見て、どこかほっとしたように微笑む田中から目を逸らして、いつものように。
いつものままで、まだ――。

それから二日、田中はまったく私の前に現れなかった。
風邪でも遷ったのかとかなんて全然気にしてないし、二日くらい別になんとも思っていないんだけど。

『尾野、すまないがこのあたりで野良ケンタウロスを見かけたら、捕獲して欲しい』

朝から我が家にやってきた駐在曰く、昨晚田中をいじって遊んでいたら、泣いて寮を出ていったつきりらしい。いわゆるプチ家出だな、と頷く駐在の頭をとりあえず叩く。おまえらはいいい歳して何をやっているんだ、何を！

しかし家出するにあたって、きちんと有給申請をしていくあたりが小憎たらしい。どう見ても計画的犯行だろう。

そもそも、あれは中身はともかく二十三にもなる大人なんだから、二日三日帰らなくてもどうこうってこともないだろう。多分、草を食って生きていけるはずだ。

とにかくよろしく頼む、と勝手なことをぬかして帰っていった駐在の背を見送るため息をつく。

その私の肩を、今まで乾草を口に使っていたアルカディア号がこつりと小突いた。何だろうとその首筋を叩いてやると、彼女はその黒

い瞳でじいつと私を見つめる。静かだけれど何かを促すようなそんな瞳に、私は彼女の言わんとすることを感じて苦笑した。

「わかってるよ。……散歩がてらならまあ、いいか」

私のその言葉に同意するように、アルカディア号は一声嘶いた。その彼女の口にハミを銜えさせ手綱と繋いで軽く引けば、アルカディア号は嬉しそうに軽快なステップで外へと歩き出す。

そう言えば、こここのところ台風や雨やら私の風邪やらで、しばらく一緒にお散歩してなかったなあとも私も嬉しくなる。

とりあえず、いつもの散歩コースである地区内ぐるり一周の旅をして、例の野良ケンタウロスが見つければよし。見つからなければスルーの方向で。

「まったく、手間ばかりかけさせて……」

無意識に口をついて出たその言葉は、自分で驚くくらいどこか甘く響いたのだった。

ところが。

「あの馬鹿、どこほつつき歩いてんだ！」

道草を食いつつかれこれ二時間。思わず地区内を二周もしてしまっただけなのに、あの赤い頭の馬はどこにも見えない。

この狭い地区の中でよくも見事に雲隠れできたものだ、一時間前までは余裕でそんなことを思っていたが、もう限界。頭にきた。見つけたらあの尾っぽ、縦ロールにしてやる。

前に案内された夕陽の見える場所に行っても空振り。さり気なく奴の担当している家々を回ってみても、姿は見えず。

河合さんちのミミちゃんに至っては、「あらあら、ひづめちゃん、とーまににげられてしまったの？」とまで言われる始末。

小首を傾げてそう眉を寄せる目の前の四歳児に、一瞬なんて返事をしたもんかと私は頭を抱えた。なにこのプチマダム。

見た目が市松人形そのものであるミミちゃんは、仕方がないとばかりにふうつと息を吐いた。酸いも甘いもかみ分けた、どこぞのクラブのママさんのようである。

「とーまはきょう、みみのおうちにはきてないわよ。あのこ、みためよりもせんさいなの、やさしくしてあげてちょうだいねっ」

「ぜ、善処します……」

そう言っただけで逃げ出してきたのは三十分前。なんか、微妙に大怪我して回っている気がしないでもない。

何で私がこんなになってまで田中を捜さなければならないのか、本気で人生に片足つつこみつっ考え始めたその時、ぐいっとアルカディア号が手綱を引いた。その動きに釣られるようにして彼女を見れば、一生懸命に山のほうを首で示している。

「そつちに田中がいるの？」

問えば思い切り首を縦に振ってみせる。馬テレパシー？

自信満々に輝くその瞳にとりあえず頷き、方向を山のほうへと変える。そして一瞬ぎくりと身体を強張らせ、足を止めた。

この先にあるのは、あの草原だ。

そのことに気付いて躊躇する私の背を、アルカディア号はぐいぐいと鼻先で押してくる。速く行つてあげてと言わんばかりのその行動に、私はなんとか再び足を動かした。

そこにあるのは私の喪失の思い出。罪の記憶。

七歳の晩夏、あの子馬を置き去りにした、場所。

それでも、と私は頭を振って思い直す。それでも、いつまでも浸っているべきじゃないんだ。悲しい過去と向き合って、歩き始めた人を私は知っているから。

それにあの馬鹿がそこにいるのなら、私が行ってそのケツを蹴り飛ばしてやらなければならない。何度でもへこたれずに過剰な好意を向ける田中の顔を思い出し、何だか軽くなった心で私は一步一步を踏みしめる。

そうして急にやる気を出した私を見て、アルカディア号は嬉しそうに鼻を擦りつけるのだった。

草原とあの日の記憶

ゆつくりと、その場所に近付いていくたびに過去の記憶がほどけていく。

七歳の私が横を歩く。子馬は足を引きずりながら、それでも嬉しそうに私についてくる。

あの時ももう、冷たい風が吹き始めていた。じいちゃんに「長いこと外にいさせちゃいかんぞ」って言われていたのに。

自分を置いて駆け出した私を、あの子馬はどんな気持ちで見送っただろう。どんな気持ちで、私を待ち続けたんだろう。考えれば考えるほど、私は無意識に奥歯を噛み締める。

あの時から、私は好意を寄せられることに臆病になったのかもしれない。共感してくれた部長のことも、そうだったのかもしれない。無責任に命を放り出した私は、本当に好意を向けられてもいい人間なのか。人から見ればかなトラウマなんだって、わかっているけれど、まだ抜け出せない。

だから田中が無邪気に寄せてくる好意が、私はとても恐ろしい。あの無防備な瞳が子馬を思い出させる。絶対的な信頼。すり寄る温もり。全部。

そうして伸び放題になっている草をかき分け、ようやく私は思い出の野原へとたどり着いた。

記憶の中とほとんど変わらない光景に、ほんの少しの間立ち止まる。わずかに胸に走る痛み。それを無視して私は、子馬を繋いだあの木へと視線を巡らせた。するとそこにひとつの影。

「……田中？」

それはまるで完成された、絵のような光景だった。

いつも表情豊かなその瞳は閉じられて、赤みがかった長い睫毛が風に揺れる。赤髪の長めな前髪が俯いた顔へとかかり、彫りの深い美しい顔立ちに影を加えている。

いつからここで、こうしているんだろうか。もともと白い肌には血の気がまったく見られない。眼鏡をかけていない分とても大人びて見えるその姿に、どうしても不安が過ぎった。

座り込んで目を閉じたまま、身体を幹に預けて眠っているようなその姿。それが、なんだかあの時震えていた子馬と重なって、私は思わず田中の肩を思い切り揺さぶった。

「田中！ 起きろ！」

空色のシャツに包まれた肩はほのかに温かく、私はその温もりに少しほっと息を吐く。

その吐息にぴくりと睫毛が揺れ、そこからゆっくりと薄氷色が覗いた。眠りが深かったのだろうか、ぼんやりと視線が辺りを漂う。薄く開いた唇が何かをかすかに呟くが、それは吹いてきた秋風に遮られ、私にまで届かない。

次第に覚醒していく意識が目の前の私を捉え、夢の残滓をまだ引きずるようにして、田中はその美しい顔にへにやりと気の抜けた笑みを浮かべた。

「あ、二十九日さん。おはようございます……」

よし、殴る。

おもむろに拳を固め一直線に赤い頭へと振り下ろすと、鈍い音とともに田中が沈んだ。声にならない声を上げ両手で頭を抑えながら、今ので完全覚醒したのだろう田中は涙目に形ながらこちらを見上げ

る。おい、上目遣いはやめろ。

「寝起きに二十九日さんの顔が見られるのは嬉しいんですけど、これはちよつといきなりすぎて痛いっていうか……」

「この馬鹿っ！ 馬鹿馬鹿馬鹿っ！ 何度でも言ってやる、大馬鹿馬っ！」

心配したとか、気になったとか。眠っている田中を見て、一瞬でも死んでしまったんじゃないかとか、馬鹿なことを考えた自分が一番腹立たしい。

こいつを心配したんじゃない、過去に重ねて勝手に悲しくなっただけだ。そう思いながら、ゆらゆらと揺れる景色にぐっと言葉を飲み込む。

すると、いきなり怒鳴られて瞳を丸くしていた田中は、なぜだか泣きそうな顔で私に手を伸ばした。するっと頬に少し節ばった指がかかる。

「僕の、せい？」

違うつて言いたかったのに、声が出なかった。なんか馬鹿みたいなことになってるという自覚は、ある。気持ちが急激に動きすぎて、自分の感情なのについていけない。

ふつと温もりが近くなる。祈るように目を閉じて、田中は私の額に自分の額を寄せた。

かすかに触れあう鼻先がこそばゆい。吐息が唇をかするようになして、私は思わず首をすくめた。お願いだから、そんな風に触れないで。

泣き出す一歩手前まで追いつめられた私を瞳を、ゆるりと開いた田中の薄い青色がのぞきこんだ。透けて真ん中の濃い色が見えるくらい、近く。

「二十九日さんは、僕のこととで泣いたりしたらだめなんです。あなたは、誰よりも幸せでなくちゃ……」

何かをこらえるように掠れる声が、子守歌のように私にささやきかけた。厚い唇が額に触れる。私の肩に置かれている大きめの手のひらが、少し震えているのにその時気がついた。

強く掴もうとして、離れる。

「こんなところに、来ちゃいけないんです」

妙にきつぱりと放たれたその言葉に、離れた体温に少しの寂しさを感じていた私は思わず眉をひそめる。こんなところ、なんて、何も知らないくせに。

私はきつく田中の瞳を睨みつける。いつもならうるたえる田中は、今はただ黙って静かにその私の攻撃的な視線を受け止めた。

「ここは、私の大事な場所なの」

「早く忘れるべきです。そんな、悲しそうな顔しかできないのなら」

必死につむいだ言葉は、ひどくあっさりと切り捨てられる。そのあまりの冷淡さに、私は一瞬言葉を詰まらせ、それから激昂した。

「忘れちゃいけないことだってある！」

「忘れられないことと、忘れないことは違いますよ、二十九日さん。あなたは誰よりも幸せになって、辛いことなんかひとつもないように、笑っていなければならぬ人なんです」

「勝手なこと言わないで！ 私にとって何が幸せかなんて、知らないくせに！」

田中のあまりに勝手な主張に、なんだか泣きそうになりながら切り返した私のその言葉が、彼の心に傷を付けたのが、わかった。わかって、しまった。

歪む、ガラス瓶の底のような瞳。割れないのが、不思議なくらい。あつ、と思った時にはもう、その腕の中に取り込まれていた。熱くて、遅しくて、とてもじゃないけれど逆らうことの出来ない、その腕に。

「忘れてください！ 忘れてしまえばいい！ あなたに傷を残すことしかできなかった子馬なんて、そんな存在、彼方に葬って……！」
「たなつ……！」

息苦しさに距離をとろうとした私を、田中はますます強く抱き込んだ。息も出来ないくらい、強く、強く。

それは何かを主張するようなものじゃなくて、溺れた人が必死に何かに縋り付くような、そんな切迫感を持っていた。

抱き込まれた胸の硬さと、上がり続ける体温と、耳元に感じる激しい吐息に頭がくらくらする。いつそのこと、このまま深くまで傷つけてほしいとすら思う。

奥底に眠るものを全部暴いて、しつこく痛む傷の上から新しい傷を付けてほしい。だけれど、田中は――。

どつとアルカディア号が田中の背中を突き、はつとしたように彼は私からその身を離れた。

呆然としたままへたり込む私に手を伸ばそうとして、止める。その手は真っ白くなるほど握りしめられ、力無く降ろされた。

うつむいた顔に長めの前髪がかかり、その表情は見えない。ただ、彼が何かにひどく傷ついていることだけは、わかった。

「すみません、二十九日さん」

ぼつりと言葉が草原の上に落ちる。弱々しい声音。

私はまだ下からない熱に浮かされたまま、それを聞く。

「僕にはあなたがどうしたら幸せに笑ってくれるのか、わからない。僕にはあなたを幸せにすることができない。わかって、いたはずなのに……」

自分の内に沈み込むように続けられたその言葉。それに私が何か反応する前に、田中はこちらに背中を向けた。拒絶するような、その姿。

さっきまであの腕の中にいたというのに、まるで急激に遠くなくなってしまったような冷たさが、身体を走った。

「失礼します」

こちらを見もしないでそう言うと、田中は草原から駆け下りて姿を消してしまった。

残された私の肩を、気遣うようにアルカディア号が優しく食む。

その温もりに、混乱したままの私は少しだけ息を吐いた。

彼は忘れると言った。

私の心の底に巣くう、あの日の記憶を全て忘れてしまえと。

なぜ？

「なぜ、あの子馬のこと、あいつが知っている……？」

冷たく吹き付ける風が、その言葉をさらって、消した。

カレーの半分は気合いでできています 前編

あの後、草原から呆然としたままアルカディア号に連れて帰られた私は、そのまま一週間悩み続けた。

田中の言ったこと、過去の記憶、子馬のこと。悩んで、悩んで、悩んで――。

そして今日、ついに私の堪忍袋は大爆発した。

切れるどころじゃない。大爆発！

出会った初っぱなから「好きです、好きです、大好きです」と、まるで呪いのようにささやき続けた人物が、突然手のひらを返したように「僕にはあなたを幸せにできない」とか言い始めた。どうしてくれよう。

この、告白したわけでもないのに振られた感について、誰が責任を取るというんだ？

だんっ、と振り下ろした包丁が派手な音を立ててまな板に突き刺さる。

その音に、先ほどから背後でおろおろとした空気をかもし出していた男二人が、びくりと身体を揺らしたのがわかった。

「あ、あの、尾野ちゃん？」

「その特定の相手への憎しみを感じる包丁さばきは何だ」

「男子厨房に入らず！ 黙って座っている！」

気合いを込めてまな板から包丁を引き抜きじろりと後ろを睨めば、その気迫に押されたのかいつも小うるさい中年男子ふたりは、さすがと引き下がった。

それでも、共有キッチンからすぐ側のダイニングで、そのふたり

——駐在と獣医はこそそと話し合いを始める。

「厨房に入らずって言われても、ここ俺たちの寮だし……」

「杉村、問題はそこではない。問題なのは、なぜ尾野がこの男の城で包丁を振るっているのか、というそこだろう」

「わかりにくいけど、これはデレてるの？ 尾野ちゃん的にはデレなの！？」

丸聞こえなんだよ、馬鹿どもが！

イライラをぶつけるように目の前のじゃがいもを突き刺せば、ふたりは再び沈黙した。くそっ、なんでじゃがいもつてのは、一個が一欠片にしかないんだ！

もういい。面倒だしもつたないから、皮はつけたまま適当に切ってぶちこもう。

自分的にそう納得し、私はじゃがいもの泥をたわしで擦り始めた。若干、実までざりざりとむけてる気がするが、それはそれでいい。

どうせカレーになれば、皮なんか小さい問題だ。

じゃがいも、にんじん、グリーンピースに玉葱。肉を入れないのは、特定の馬への配慮ではない。決してない。

その特定の馬——田中は今、この場にはいない。

生意気にも隣町への応援として出張中。秋のこの時期、ここみたいな田舎は米だなんだと、配達の仕事が増えるのだという。

「そっ、それにしても、東馬おそいなーっ」

「馬鹿か杉村。直球勝負すぎるぞ！」

わざとらしく聞こえてきた獣医の声に私は不覚にも動揺し、手にしていたにんじんを取り落とす。

そのまま静かに床からにんじんを拾い上げると、私はにつこり笑ってふたりに近付いた。そして獣医の前にそれを置く。

「食べる」

「え」

皮もまだむいていない状態のにんじんと私の笑顔を、獣医の視線が行ったり来たりする。暑くもないこの季節、額から流れ落ちているのは多分、心の涙だ。

その隣で駐在はひっそりと両手を合わせている。

「にんじんは身体にいい。すごくいい。そうだろう？」

「は？」

「そうだよ、緑黄色野菜だよ。しかも、これは昭夫じいのところでは奥様が丹誠込めて作ったにんじんだ。喜べ。喜んで、とにかく食べる。そして食べている間は黙っている。わかったかな？」

「……はい」

いつも朗らかなその顔を苦しげに歪ませ、獣医はにんじんを手にとると、そのまま思い切りかぶりついた。よし、いい子だ。おいしいだろう、生にんじん。

私は満足して頷くと、こちらの様子を窺っている駐在にも警告の睨みをきかせ、再び台所へと戻る。しばらくはふたりとも大人しくしているだろう。よし、カレーに集中だ。

そもそもこれは田中への復讐である。

あの草原で別れたつきり、田中はとにかく徹底的に私を避けた。この地区でも集荷配送が忙しくなったという理由で私の家あたりの担当を外れ、道で偶然に会えば競走馬もかくやという速さで逃げ、ちよつと前にぎくしゃくした以上の避けられっぷり。

あまりの変わり様に、地区内では「尾野がついにあの身体に我慢できず、襲いかかったらしい」などという不名誉な噂まで、まことしやかに流れる始末。

流していたのは昭夫じいだったので、とりあえず奥様に例の雑誌についてちくつといてやったが。

まあいい。別に避けられたって、今さら嫌われていたっていい。特に支障はない。むしろ肩を叩いて喜んでやりたいくらいだ。

だけど、あれだけ人目も憚らず迫りまくったんだ。けじめつてものをつけてもらわないと。

というわけで、私は独身寮にカレーを作りに来た。

それは、河合さんちのミミちゃんが、「だんじょがはなしあうときは、ごはんをたべたあとがいちばんいいのよ。おなかいっぱいになっているときは、すなおになれるの」と助言をくれたからである。ミミちゃん、何者。

選択がカレーだったのは、私が作れるのがホットケーキとカレーのみだから。文句は言わせない。

あらかた材料を切り終わり、たまねぎを適当に炒めてさつさと水にじゃがいもににんにくに、とぶちこんでいく。

作れるからといって、得意だとは言ってないからな、私は。

その制作過程を黙って見つめている駐在と獣医が、心なしかかたかた小刻みに震えながら、顔色を青くしているのは気のせいだろう。田中は今夜、出張から帰ってくるらしい。

ここで待ち受けていれば、まず逃がさない。逃亡を図りそうな勝手口には罨もしかけておいた。これは猟友会、田端さんから習った特製の奴。

「ふふふふふ」

思わず笑みがこぼれる。

さあ田中、早く帰ってくるんだ！

ぐりぐりと魔女鍋のように寸胴をかき回す私の背後で、ひいっと声があがった気がしたが、上機嫌な私はそれもスルーすることにした。

「あのう、尾野ちゃん。質問があるんだけど……」

「なんだ？ ソースとかかけたっていうのは、却下だからな」

「いや、そうじゃなくて、その……これ、なに？」

奇跡的に食器棚にあったカレー皿にご飯をよそり、出来たてのカレーをかけて配膳したところで、恐る恐る獣医がそれを指さした。ごくろ、と隣で駐在が生唾を飲む。何を言っているんだ、この男は。

「カレーに決まっているだろうが」

とうとう頭までおかしくなったのか、とため息混じりにそう教えてやれば、獣医は半泣きになりながら、声を上げた。

「嘘だっ！ 俺の知ってるカレーと違うっ！ じゃがいもは！？」

「溶けた。それくらいしつかり煮込んだんだから、問題ない。……多分」

「多分って！ 多分って言ったぞ、大野っ！」

「まあ、落ち着け杉村」

ひとりで興奮して立ち上がる獣医の肩を、どうどうといなしながら大野が優しく叩く。相変わらず仲良しだな、お前達。

うう、となぜか泣き出した獣医をとりあえず横に置いて、大野は意を決したように私へと向き合う。なにその、魔王に対する勇者みtainな表情。

「尾野。これはカレーではないと思うぞ」

「何を言ってるんだ、お前まで。私はカレーを作ったんだから、カレーだ」

「いや、これはなんだその——限りなくカレーに近い何かだ」

これだから国語の成績がいいやつは嫌いだ。

私は黙って、ふたりにスプーンを差し出す。とにかく、食べ。

カレーの半分はカレールーで構成されているはずだから、どんな風に調理しようと最後にルーさえぶち込めば、それはカレーだ。間違いない。

「召し上げれ」

特上の微笑みでそう宣告すると、ふたりは本気で涙目になり、スプーンを握りしめた手をぶるぶると震わせた。ちょうど、そこに。

「ただいま戻りましたあ！ あれっ、なんかとても焦げ臭いんですけどお」

のんびりとした美声が響き渡り、何かを拭う音がしてから、あの独特の足音が近付いてくる。田中の、蹄の音。私が聞き間違っはすもなく。

すでに青から白へと変わった二人の顔色に、私はただ笑みを深くするのであった。

おかえり、ケンタウロス田中東馬！

カレーの半分は気合いでできています 後編

「おかえりなさい、田中」

「……ただ、いま、戻りました……？」

ぱつかぱつかとご機嫌な足音を響かせて、共有スペースまでやってきた田中は、そこで私の姿を見つけるなりその身体を凍り付かせた。

少しやつれたけれど、それくらいでは損なわれない美しい顔が、微妙に歪む。薄い青の瞳が、動揺してあちこちうろとさまよって、そして諦めたように私を見返した。

私はそれをじっと見つめ、静かにダイニングテーブルを指す。

「今晚はカレーだ」

「もしかして二十九日さん、匂いで僕に逃げられないように、なんて作戦たてました？」

「安心しろ。そんなことしなくても、私が逃がさないと決めたら、お前はどうせ逃げられない」

困ったように微笑む田中に、私も満面の笑みを返す。

後ろで控える馬鹿二人の手にしたスプーンが、カチカチと小刻みに音を鳴らしている。震えるほど今日は寒くないはずだけど。

そのままにらみ合うこと数秒、諦めたようにため息をついた田中は、黙って洗面所に移動していった。外から帰ったらうがい手洗い、重要だな。

その間に私はご飯を盛り、それにカレーをたっぷりとのせてやる。それを見ていた獣医と駐在が、ものすごく変な顔をしていたのはこ

の際無視。

「おまたせしました」

案外素直に戻ってきた田中の前に皿を並べ、私たちは表面上なごやかな晚餐を開始した。

この中に裏切り者がいる、なんて口火を切るのは私なんだろうか、なんて思いながら食事をしていると、私より先に口を開いたのは獣医だった。

「匂いはカレーなのに、カレーの味がしないってどういうこと!？」

「落ち着け、杉村。だから最初から言っているだろう、これはカレーに似た何かだと!」

「味がわかるまで食べさせてやろうか？」

大量に作られたカレーを指さしながらそう言うと、ふたりは生まれたての子馬のようにぶるぶると首を振った。

この私に何人分かなんて、そんなことを考えながら作れる腕はない。とりあえず、手元にある材料を入れられるだけ入れ、ルーも全部投入した結果があのだ。寸胴だ。

まあ、カレーって何日でも美味しく食べられるらしいし。

馬鹿二人を黙らせた私は、目の前で黙々とカレーを口に運ぶ田中を見つめた。

憎たらしいほど美しい所作で食事をする彼は、その顔に何の表情も浮かべてはいない。今までのこいつなら、うざったらしいくらいに「美味しいですつ、二十九日さん、天才ですつ」なんて言っただけなのに。

「どうだ、田中。美味しいのか？」

無反応の田中に焦れて、私は挑戦的にそんな言葉を投げかける。それに対し、奴は食事の手を止めてこちらを見た。

口にも物を入れたまま話さないっていうのは、感心だけど。

「有り体に言えば、ものすごくまずいです」

きつぱりと言い切った田中の言葉に、獣医と駐在が悲鳴にならない悲鳴を上げた。私は無言で続きを促す。

「なんていうか、もうカレー以前の問題ですよ。にんじんなんか半分生っぽいし。じゃがいもは溶けてなくなってるし。カレーのルーは入れすぎです、明らかに。隠し味にチョコレート、とか考えたまではいいと思うんですけど、隠れてません。むしろ、市販のルーをベースによくぞここまでつくくらいに、まずいです」

につこりと、それはもう綺麗な笑顔で一氣に田中は言う。

ははは。私の料理がくそまずいことくらい、私が一番よく知っているんだよ、田中。そんなこと言われたくらいで、私が引き下がるんでも？

「そうかそうか。よし、もっと食べ」

「いただきます」

私が差し出した手に、田中也負けずと皿を返す。ご飯なし、ルーだけたつぷりよそってやると、田中よりも隣の駐在が泣きそうな顔をした。

「田中、人生はまだまだこれからだぞ」

「どういう意味だ、駐在。お前の人生を今ここで終わらせてやってもいいんだぞ？」

「落ち着け、尾野。尻はどうにもならないが、料理はこれからどうとでも改善できる。諦めるな」

「とりあえず、尻から思考を離せこの変態！」

からかっているわけではなく真剣な顔の駐在に、私も全身全霊の拳を振り下ろす。小さく呻いた駐在を見て、私は少しだけ楽しさを感じて微笑んだ。すると、それをじっと見ていた田中がおもむろに口を開いた。

「大野さんと二十九日さんで、さすが幼なじみって感じですよね」

突然の何の脈絡もないその言葉に、私と駐在はわけもわからずに田中を見返した。

そんな私たちにどこか冷たい瞳のまま微笑みを向けると、田中は静かにスプーンを置く。そして、こちらに向き直り、少し眩しそうに目を細めた。

「大野さんはこう見えて公務員ですし、一部の性癖を除いては真面目な方で。二十九日さんのこと、小さい頃からよく見知って、しかも初恋の相手でしょう？ 僕、思っんです。二十九日さんと大野さんで、とってもお似合いの二人なんじゃないかって」

ただひたすらに美しい微笑の田中に、私はただ呆然とした視線を返すだけ。言われた言葉の内容が、うまく頭の中に入ってこない。

なんで、こいつがそんなことを言っただろう。どうして、私と他の相手をくつつけるようなことを。

そんなことをぼんやりと考えた私の斜め向かい、当の駐在ががたっと乱暴な音を立てて立ち上がるのが見えた。なんだか、視界のすべてがゆらゆらしていて、よくわからないけれど。

「田中つ、おまえ——！」

普段は決して見せない激しい表情で、駐在が田中の襟首を掴んで引きずり立たせた。そのままの勢いで殴りかかりそうになったその腕を、獣医がなんとか押しとどめる。

「やめろ、大野。おまえ、警察官だろうが」

「……くそがつ！」

叩きつけるように田中の身体を離すと、駐在はひどく傷ついたような目で奴を睨み付け、そして静かにその場を後にした。

玄関の開く音に、彼がそのまま外に出ていったのだと知れる。

あまりの出来事に、私は瞬きも忘れてただ残された田中と獣医とを見つめていた。

「おかしいですね、大野さん。初恋のこと、ばらされたのがそんなに恥ずかしかったんですかね」

どこか空虚に笑ってそんな風に言う田中に、獣医はいつも通りの表情で問う。

「東馬。お前は今、自分が何言ってるのかちゃんとわかってるか？」

「杉村さんまで。おかしいなあ。僕、そんなに変なこと言いましたか？」

「そうか。わかってんだな」

飄々としたいつもの獣医そのままの態度で、彼はそれを確認すると、いきなり田中の頬を拳で思い切り殴りつけた。

突然のことに勢いを殺せず、田中の身体が椅子から転がり落ちる。骨と骨がぶつかる音もひどかったが、受け身をとらないままに倒れ

込んだ音も、また耳を塞ぎなくなるようなものだった。

その田中の身体をもう一度獣医が掴み上げ、声をかける。その顔もまたいつも通りすぎるくらいいつも通りで、私は知らず、身体を震わせた。

「お前の中になんか引つかかりがあつて、それでお前自身が拗ねてんのなんか、どうでもいいけどよ。それで大野や、尾野ちゃんまで傷つけるっていうのは俺は見過ごせねえな。自分のことしか頭になくて、それで好きな女泣かせて楽しいのか、お前は」

その獣医の言葉に、はっと目を見張った田中が、つかみ上げられた身体はそのままにこちらを向く。

そこで初めて瞬きをした私は、何かがばたとダイニングテーブルの上にこぼれ落ちたことに気がついた。今まで視界が揺れていたのは、溜まった涙のせいだったのだと。

そして改めて田中に顔を向けると、奴は泣いている私以上に痛々しい顔をして、こちらをじっと見つめていた。

奥歯を噛み締め、眉をひそめる田中の身体を放り出し、獣医はゆっくりと私のほうに歩み寄る。

「大野はああ見えて潔癖だから、尾野ちゃんを今さらどうこうつてのはねえよ。けどなあ、俺はけっこう節操なしだぞ？ 東馬、お前の望み通り、俺が尾野ちゃんをもらつてくよ」

「え、獣医、お前——」

「じゃあなあ、東馬あつ！」

私になにか訴える前に、獣医は私の手を引いて玄関へと走り出す。意外に力強いそれに引きずられるまま、私は唇から血を流してこちらを見つめる田中を残し、大野に続いて独身寮から出て行った。唐突なその行動に、流れていた涙も止まる。

そんな私を見て、獣医はいたずらっぽく片目をつむって見せた。

「さ、楽しい駆け落ち、俺と行こうぜっ」

「はあ!？」

そうして私と獣医と田中の長い夜は始まった。

なくしたものと本当の名前

獣医にひっぱられてやってきたのは、まさかの独身寮屋上。

そこになぜか置かれていたアウトドア用の椅子に座り、これまたなぜか用意されていた燃料その他一式でいれられたコーヒーを飲む。なんでこうなった？

泣いたために少しだけ腫ればったく感じる目を向けると、獣医は鼻歌を歌いながらぐびりと缶入りウィスキーをあおっていた。どこまでも用意周到な奴だ。

「兵は詭道なりつてな。外に出て行つたと見せかけて、実は一番近いところにいるつてのは定石だろっ？」

「そうじゃなくて！」

訊きたいことはそこじゃない。

なんでお前と私が一緒に逃避行しているのかと、そのところだ。

「え？ 尾野ちゃんも飲むの？」

「そのボケ、わざとだつたらお前に毎日弁当を作るからな」

私がそう低くすくむと、杉村はぶるぶると激しく首を振ってそれを拒絶。自分で言いだしておいて何だけれど、その反応は地味に傷つく。まずいのは……認める。

手にしていた温かいコーヒーを一口飲んで、私は大きくため息をついた。

それでも、この空気を読まない獣医に、少しは感謝してもいいと思う。あのままあそこにいたら、きつとんでもなく情けないこと

になっていたはずだから。

「うーん、やっぱここからじゃ、ケンタウロス座は見えねえかあ」

どんな時も荒れることのないのんびりとした声が、夜の屋上に響く。隣を見れば獣医は、冬の夜空を見上げながらまた一口、ウィスキーを口にする。

そしてこちらへ視線をむけると、自分の着ていたジャケットをこちらに放った。慌ててそれを受け止めた私に、獣医はいたずら坊主のような顔をして笑う。

「寒いし、着とけよ。あいつ、頭は切れる癖に抜けてるところあるし、もしも長丁場になって風邪がぶり返したら大変だから」

「でも……」

「俺は絶対に風邪引かないから大丈夫！」

なぜか自信満々にそう言い切る獣医に、もしかしたらアレだからなのかな、と思いつつありがたくそのジャケットに袖を通した。

まだ残る温もりが優しく私を包んでくれる。おかしいな、こんなことで泣くほど弱いとは思ってなかったんだけど。

思わずにじんだ涙を誤魔化すように、私は再びコーヒーに口をつけた。獣医はただ黙って空を見上げている。多分、今、見なかったふりをしてくれた。

「尾野ちゃんさあ、東馬のこと、好き？」

突然の言葉に、口に入っていたコーヒーを吹く。そのまま気管に侵入されて、私は激しく咳き込んでしまった。な、な、な、なにを！ 息苦しさと何かによって真っ赤に染まった顔を向ければ、そんな私を獣医はにこにここと笑って見つめていた。

すると不意にその瞳がずっと静かな光を宿す。黒よりももっと深いような色のそれは、私の中身を探るように細められた。

「もし東馬の気持ちに答えられないんだったら、もうあいつを解放してやらない？」

突然鋭く入り込んできたその言葉に、私は目を見開く。

そこにあるのは、さっきから不自然なほどに自然な獣医のいつもの顔。人を殴りつける時にも、まったく変わらなかったその表情に、私はぞくりと背を震わせた。

「なに、を……」

「まだ思い出せない？ あいつの本当の名前」

「本当の、名前？」

問われた内容に私は首を傾げる。田中の本当の名前って、何？

けれど、まったく知らないはずそれに、頭のどこかが引っかかりを覚えるのがわかった。何か大事なことをすっかり忘れてしまっているような、そんな不安が心に入り込む。

「それを思い出して、尾野ちゃんが東馬を拒絶すれば、俺の仕事はお終いになるんだけどなあ」

「仕事って」

不思議なほど凪いだその声に、私はまだ熱を持ったままの瞳をしばたたかせた。その私の前で獣医はただ、その厚みのある唇に微笑をのせて笑っている。

不意にこの男は誰だったろう、とそんな疑問が浮かんで離れない。へんぴな片田舎でのんびりと獣医を仕事にする男。いつも飄々としていて、馬鹿なことばかり言って、騒がしくて。だけど。

「生まれ変わったケンタウロスを見守るだけの、楽しいお仕事！
時間が来たら、また東へ連れて帰るだけの、な」

東へ連れて帰る。

その言葉に、私ははっと目を見張った。ずっとどこかで引つかかっていたものが、ぱらりと剥がれ落ち、そこに隠されていたものが目の前に提示される。

田中、東、馬？

「二十九日さんっ！」

屋上へとつづく外階段から、その田中が姿を現した。

奴にしては珍しく、肩で荒い息をしている。よほどあちこち駆け回ったのだろうか、額から流れ落ちる汗もそのままに、田中は真っ直ぐ私のほうへやって来た。

そしてほっとしたように懐かしい笑顔を浮かべると、今度は獣医に向き直る。

私を庇うように、隠すようにして立ちはだかった背が、なんだか緊張しているのがわかった。

「……あなただったなんて、びっくりですよ、杉村さん」

「見破られるようじゃ、だめだろうよ、そこはさ」

「もう時間だと、そういうことですか」

私にはまったく理解できないやり取りが、私を落ち着かなくさせる。いったい、こいつらは何を話しているというんだろう。

無意識に田中のシャツの裾を掴んだ私に、奴はちよつとだけ身を強張らせ、それから安心させるような優しい笑みをこちらに向けた。大丈夫だともいうように、私の肩をぎゅっと抱き寄せ、私はそ

の胸の中に頬を寄せることとなった。

鼻こうに、かすかに香るよく干した草の匂い。太陽の、匂い。

あ。

その香りに誘われるように、脳裏にいつかの光景が甦る。

それは、二十三年前の夏。七歳の私のところに子馬がやってきた、その日の――。

「エ、デン？」

私がそう小さく呟くと、何かに弾かれるようにして田中は私から身を離れた。

薄い青の瞳がこれでもかと思開かれ、その少し乾いた唇が何かを発しようとして、また閉じられる。泣きそうな、けれど嬉しそうな。そんな田中の表情に、私は今度は確信を持ってその名を呼んだ。

「田中、おまえはエデン、なの？」

それはあの日なくしたはずの、私の子馬の名前だった――。

僕の美しい人だから

『名前を付けてやるんだよ、二十九日。そうしたらもう、その子馬はお前にとって特別だった一頭の子馬になる。“特別”にするってことは、“責任”を持つってことだよ』

そう言っで私の頭を撫でてくれたじいちゃんの、その言葉の意味を痛いほど知ったのは、私のその特別な子馬、エデンが死んだあとだった。

私が付けた名前。私が撫でた身体。私が抱き締めた体温。私の特別な、命。

失ってしまったら、どんなに同じような毛並みを探しても、どんなに懐いてくれる子馬を探しても、それはもう同じあの子じゃない。そんな、たったちっぽけなことがわかっていなかった自分。

あれからこんなに時が降り積もったのに、愛情も何もかも、その『同じようなもの』では受け付けられないでいる。

それは、飛んでいった風船をいつまでも泣いて惜しんでいる、ただの子供だ。自分から手放してしまったというのに――。

「俺は言っただ。人間ってやつはいつでもすぐに忘れ去るもんだってな。悪いことじゃない。俺たちからすればほんの瞬きの間の命だ。些細なことに気を取られてれば、あっという間にそれだけで終わっちゃう」

ゆっくりと、いつもの飄々とした口調で獣医が言う。その瞳は優しくにこちらを見つめているが、その感情は人が人へむけるものじ

やなかった。何か、大きな上位の存在が、か弱い生き物にむける哀れみのような、そんな瞳で。

それに対した田中が、真っ向から反逆する。

「それは違います。二十九日さんは僕にとってたったひとりの人。大切な人。どんなに大勢の人間がいたって、僕は間違えない。だって、僕に名前をくれた特別な人ですから。そして、二十九日さんにとっても僕はたった一頭だけの特別な子馬だったはず」

「これだよ、尾野ちゃん」

田中の言葉を受けて、不意に獣医がこちらに話を振る。私は突然のことにただ目をしばたかせた。二人の意図するところがわからない。

「動物にはな、意志はあっても魂は入ってねえんだよ。そういう風に作られてる。だけど、与えられた命を全うしたものには、東の園に入る資格が与えられる。こいつはさ、尾野ちゃん。その資格があるのに、入り口でぐずってちつとも中に入ろうとしないんだ。管理人の俺としては、ものすごく迷惑なわけ」

どこかものすごく楽しそうな口調で、笑いながら獣医が田中を見た。すべての感情をそぎ落としたような、微動だにしないその美貌。私は不安を覚える。

何かの衝動をじっと耐えるように、その手のひらは強く握りしめられ、もう真っ白な色に変わっていた。

「僕にはその資格はありません」

「これだよ。何を言ってもこれ一辺倒」

やれやれ、といった風に獣医はわざとらしく大きなため息をつく。

そうしてふつと次に顔を上げた時には、もう今までの獣医の顔ではなくなっていた。どこがどう変わったのか、不思議なほどに気づけない。けれど、確実にそこにいるのは私の知っていた彼ではない。何か、別の生き物。

いや、生き物ですらないのかもしれない。私はその圧倒的な存在感に息を飲む。

「自分はわざと彼女の心を傷つけたから、樂園には入れない」

ぴくつと、田中の肩が揺れる。

今まで彫像のようだったその顔に、苦しげな表情が浮かんだ。

「本当は、木に繋がれた縄はほどけてたんだよな、東馬。だから、かしこいお前は家に帰ろうと思えばいつだって戻れたんだ。そうだろう？」

「え……」

その言葉に、私は思わず声を上げる。

私を庇うようにして立つ田中の顔を見上げると、彼はわざとこちらを見ないようにして、ただ真正面の獣医を鋭く睨み付けていた。まるで、私の心の傷から目を逸らすようにして。

私は、じくじくと痛み始めた心を押さえるように、胸に手をあてる。

今、告げられたことを反芻して、そして口に出す。

「どうして……？」

ほどけていた縄。帰れるはずだった、エデン。

そのままそこに居続ければ、身体の弱い自分がどうなってしまったのか、わかっていなかったというのだろうか。いや、獣医が言った

とおり意志があるとしたならば、エデンはわざとあそこで私を待ち続けた。どうして？

視線の先の田中が、しばらく沈黙の後に重々しく口を開く。懺悔する在任のような面持ち。私は言っただけではないような、知りたいような、そんな気持ちでそれを待つ。

「僕はあなたをめちゃくちゃに傷つけたかった。心の深い、深い場所にまで手を突っ込むようにして、そこに刻みつけたかったです」

自嘲するような笑みがその整った口元に浮かび、私は告げられたその言葉に瞠目する。

その私を、ようやく田中の氷色の瞳がとらえた。ガラスのような美しい瞳。どんなに温めても、時間が経てばすぐに冷たくなってしまふような悲しい瞳が、歪む。

「だって、僕はすぐに死んでしまうじゃないですか！ そうでなくても、あなたとずっとはいられない！僕はあなたが欲しかった。最初に会った時から、ずっとずっと欲しかった。ただどあなたは人間。僕は馬。それも、いっとう弱いちっぽけな子馬……」

「エデン……」

二十三年ぶりに呼ばれたその名前に、田中は激しく首を振る。

「そんな綺麗な名前でもらう資格が、僕にはありません。日を追うごとにだんだんと世界を広げていくあなたに、生き生きと外へ行ってしまふあなたに、僕は嫉妬したんです。醜い感情を抱いていたんです。僕とだけいてほしかった。僕だけを“特別”にしてほしかった。僕だけ、僕、僕だけの二十九日さん」

その瞳にどこかほの暗い喜びの光が灯る。うっとりと、ささやか

れた自分の名前に、私は背中が粟立つのを感じた。

しかし、その光は次の瞬間には消え去り、そこにはただ苦しみだけが残る。田中の腕がそうつと私に伸ばされ、けれど目的を果たすことなくまた下げられた。

「ずっと、覚えていて欲しかったただだったのに。僕のことを忘れないでほしかっただけ……。けれど、ひどく悲しんで傷ついて弱ってしまったあなたの姿を知って、そこで初めて僕は大変な罪を犯したことに気がつきました。僕のちっぽけなエゴで、あなたを縛り付けてしまった。自分で望んだことなのにね。でも、そこでまた別の僕が言うんです。嬉しい、嬉しいって。こんな醜悪な生き物が、あなたを傷つけたまま平然と楽園で過ごしていいわけがないでしょうねえ、杉村さん」

「本当に面倒くさい奴だなあ、東馬。関係ないんだよ。それはお前の自惚れだ。魂を持たないお前がいくら愛を語ろうと、そこにはなにもない。尾野ちゃんだって、すぐにそんな傷は忘れてしまうさ。時に癒され、忘れ、そうして他の誰かを愛するだろう。それがお前たちの正しい姿だ」

さっきまでの笑みを消し去り、渋面を作った獣医が告げる。私と田中の間にあった、絆。それは愛じゃない。まやかした、と。本当にそうなんだろうか。私がずっと抱いてきたこの胸の傷は、幻想だったのだろうか。

部長とこのように、いくら愛を注いでも注がれても、乾いた土に吸い込まれて消えてしまう——そんな傷だと思っていた。私とエデンの記憶。

「だから俺たちは賭をしたんだ。そうだな、東馬」

手にしていたウイスキーをぐいっと煽って、獣医が声を張った。

田中はそれを睨む。

「俺は動物に魂はない、だから愛も存在しないと言う。だがこの東馬君は、自分と尾野ちゃんの間にはあった。自分がそれをぶち壊しにしたから、樂園に行けない。そう言う。だったらこうしようじゃないか。お前たちのために舞台を整えてやろう。東馬、お前に人の身体を半分やろう。その代わり、お前の名前を彼女から取り上げる。それでも彼女がその名を取り戻し、お前に愛を告げるなら、俺はお前の言ったことを信じる。望むのなら、命のある限り添い遂げさせてやってもいいぞ、ってね」

「賭……？ 舞台を整える？」

「そ。俺じゃあ東馬を人間にしてやることはできないからさ。だったら、そんな存在が許される環境を作ってやろうじゃないのってこと。半人半獣がいても不思議じゃない世の中ってやつ」

私はあまりの驚きに声さえあげるのを忘れて、息を飲む。ケンタウロスが受け入れられている、世界。そのものが、幻？

そんな心の中に起きた疑問を読んだように、獣医は静かに首を振った。

「幻じゃない。けど、尾野ちゃんの近くにしか存在しないだろ、ケンタウロスたちは。尾野ちゃんがもともといた場所や、その周りには存在する。だけど、じゃあ世界に同じようにいるかってえと、それはない。そういうこと」

「なんで、そんなこと」

「他の奴らとなるべく同じ土俵でなきゃな。こんな存在があっても普通に接することができないと、最初のインパクトだけで惚れ合われたんじゃないだろうが。舞台を整えて、ようやく東馬を送り込んだってのに、こいつは予想外のことばかりしかしはじめてさ。まいったよ、本当」

混乱する頭の中で、私は必死で今までの話を整理する。

田中は自分には魂があるという。そして、愛することができると言つて。獣医は動物に魂など存在しないと、だから田中の言つ愛を否定している。

私が田中の愛を受け入れれば、賭は田中の勝ち。私が田中を拒絶すれば、賭は獣医の勝ちだ。その時は田中は楽園へと連れ戻される。最初の頃の田中の行動は、そう考えれば納得できることだ。エデンの頃から私を愛していたと、そして私にもその愛を返して欲しいというなら。

だけど、部長が現れてからの田中は、それまでとは反対の行動ばかりとるようになった。私から遠ざかるような、そんなことばかりで。

どうして。

「なんでだ、東馬」

私のその疑問を代弁するかのように、今はもう微笑みさえ消し去った獣医が問う。

すると、この問答が始まってから初めて、田中はその美しい顔に笑みを浮かべた。それは作り物でも何でもない、本当の田中の——エデンの心からの微笑み。

「だって、それは愛じゃないからですよ」

「どういうことだ？」

驚いた表情の獣医をおいて、田中は私へと視線を合わせた。

さつきは触れることを諦めたその手が、私の頬に触れる。温かくて、少しかさついている田中の手のひら。指。それがゆっくりと頬を撫で、愛おしそうに瞳が細められた。

「僕はまた間違えるところだった。僕に魂があるかなんて、これが愛かなんて、そんなのどうでもいいことなんです。そんなのは、僕が知っていればいいことなんです。そんなことのために、僕はまた二十九日さんに自分の気持ちを押しつけるだけ押しつけて、そうして傷つけてしまうところだった。僕は、二十九日さんが幸せなら、それでいい。笑っていてくれれば、それで充分だから……」

「田中……！」

ふつと私にむかってかがみ込んだ田中の、額が額に触れる。伝わる温もり。

これ以上ないというくらい近くで合わさった瞳は、いつかの日、私にすり寄ってきたあの子馬の瞳だった。絶対的な信頼と、温かな感情。

そして田中は私に微笑むと、身を起こして獣医を振り向き――。

「だから、賭は僕の負けでいい」

そう、高らかに宣言した。

差し出された手は別れの形

一瞬、獣医はきよとした顔になった。その表情はひどく人間くさく、あまりにいつも通りの彼の顔で、なんだか今までのことはすべて夢のような心持ちになる。

しかし、次の瞬間獣医は辺りに轟くような声で笑い始めた。それを田中はただ静かにじっと見つめる。

そうしてひとしきり笑った後、獣医は何を考えているのか容易に読みとれないような、そんな瞳を少し細めた。さっきまでの笑みの余韻は、もうそこにはない。

「負けを認めるってのがどういうことを意味するか、わかって言ってるんだろうな」

「もちろん」

圧迫を感じるような低い声音に、田中は普段通りの朗々とした声であっさりと頷く。

そんな些細なことはどうでもいいとでも言うかのような彼の言葉に、獣医はひくりと眉を寄せた。

「おまえには魂がない。だから愛もない。愛されもしない」

「ええ、そうです。そして賭に負けた僕は、管理人さんの言うことを素直に聞いて樂園へ行く」

賭に勝ったはずの獣医は苦虫を噛み潰したような表情になり、負けたはずの田中はなぜか余裕たっぷり笑顔浮かべてそれを見ている。

そんな田中の横顔を見上げながら、私は今彼が言ったことを受け止めかねていた。まるで、今日のように近くへ出張に行く、とても言うような気安いその言葉。

『楽園へ行く』

それはエデンが——田中東馬がこの場所から消えてなくなる、そういうことだった。

大きな声を出したわけでもないのに、喉がひりつく。胸の奥、自分が一番隠しておきたいところがひどい痛みを訴えている。涙を流したあとの頬は何だか突っ張るし、もう、身体の何もかもが私に訴えていた。

そんなの、嫌だ。

「なん、で」

「二十九日さん？」

「なんで、行かなくちゃならないの……！」

制服の裾をぎゅっと掴んで、俯いたままで私が言う。今さらだと、自分でも思った。

だって、こいつは……田中はずっとここにいるものだと思っていたから。急に私の前から消えたりしない、うるさいくらいに近くにいてくれるはずだって。

いつの間に、そんなにわがままになったんだろう。私はその先の言葉が続けられず、沈黙した。

そこにある時にはぞんざいに扱って、なくなると聞くと手を伸ばすだなんて、本当に子供だ、私は。

「あなたに会えたことが、僕にとって『本当のこと』だから。もうそれで充分だったんです。それが答えだったってことに、愚かな僕

はずつと気づけなかったんです」

するり、と髪を撫でた手のひらが頬にかかり、気がつかないで流れ出していた涙をそつと拭ってくれる。その指の暖かさが、切ない。

——好きです、大好きです、二十九日さん。

田中はずつと待っていてくれたのに、つまらない意地を張って、過去にとらわれて、愚かだったのはきつと私のほう。

「覚悟はできてるってことか。なら、俺は遠慮したりしないぜ？
そうそう慈悲だって大盤振る舞いするわけにもいかねえ」

硬く響いたその言葉に、私の涙腺は呆気なく崩壊してしまった。
自分のどこにそんな水分が蓄えられていたのか、不思議に思うくらい
の涙の量に、頬に添えられた田中の手のひらまで濡れていく。
恥ずかしい。だけど、こうしているうちは田中がここにいてくれる
ようで、私は涙を止めようとは思わなかった。七歳のあの時以来
の号泣、かもしれない。

その私の様子に困ったのは田中だけではなかったらしい。

「……まあただ、一日くらいは時間をやってもいい」

大きなため息とともにもらされたそれに、田中の手がびくり、と揺れた。

泣きすぎて呼吸が苦しく肩で息をしていた私も、その言葉に涙と鼻水でぐしょぐしょの顔を上げて獣医を見る。

彼はその瞳に初めて慈愛のような色を滲ませ、私を見つめていた。

「明日の日没までだ。俺も悪魔じゃないんでね」

こちらに背を向けた獣医はそんなことを呟くと、そのまま屋上を

あとにした。呆然とそれを見送った私と田中は、何を言うでもなく顔を合わせる。

それでも流れ続ける私の涙に田中は困ったように微笑むと、着ていた制服の上着から白いハンカチを取り出した。そうっと、それが頬に触れる。

寒い中、涙に濡れていた頬に、その乾いた布の感触が温かく心地いい。泣きすぎて痙攣を起こしている身体を落ち着けようと深呼吸すると、こらえきれなくなったとも言うように、なぜか田中が爆笑し始めてしまった。

最初はびっくりしてそれを見ていた私だが、あんまりにしつこく笑っているの、ついいつものようにその横っ腹を平手で叩く。

「いたつ。痛いですよつ、二十九日さん！」

「うるさいつ。……つく、な、んで笑つて、るっ！」

しゃっくりをしながらの文句ほど、迫力はないし間抜けなものはないな。三十年生きてきたけど、初めて知った。

とにかくしゃっくりを何とかしようと思を止める私を見て、ようやく田中も笑いを治める。

「だって、二十九日さん。あの人を泣き落とした人なんて、二十九日さんくらいですよ。あの顔見ましたか？」

「嫌に余裕をこいてるお前がむかついて、そんな余裕なかった！」

渡されたハンカチでこれでもか、となかば八つ当たり気味に鼻水まで拭き取った私は、目の前でにこにこしっぱなしの田中を睨み付ける。

あの「僕の負け」宣言からこっち、なんでこいつはこんなに余裕綽々なんだろう。私が今、誰の何のために泣いてるのか、わかってるのか！

と、そこまで腹立たしく考えて、動きを止める。私、色々と今、恥ずかしい状況じゃないのか？

三十代にして大号泣。しかも泣いて要求をのませるとか、それどこの三歳児。極めつけに、私はこのケンタウロスになんて言った？

「なんで行かなくちゃいけないの」、だ。もうこれ、告白するより恥ずかしいだろう！

ひとりでわたたと顔を赤くする私に、田中は特に何を突っ込むこともなくにこにこそれを見ていたが、しばらくして私が落ち着いたのを見るとそつと帰宅を促してきた。

「さあ、もう遅いですし、帰りませんか」

「でも、時間は一日だけしか……」

「疲れたでしょう、二十九日さん。疲れていると、へこむことばかりに考えがいつてしまうんですよ。ああ、僕と片時も離れたくない、添い寝して欲しいっていうなら喜んで！」

いつものように叩かれるその軽口に、私もいつもどおりに反応しようとして、やめる。というより、できなかった。

温かなその身体を、優しく撫でる。丁寧にブラッシングされた鹿毛は、上質のベルベットのようで荒れた心を宥めてくれた。懐かしい感触。きつと、あの子馬が立派に育っていたら、こんな風だったろう。

そんな風にひたすら身体をなで続ける私に、田中は少しだけくすぐったそうな顔をした。

「なんだか懐かしいです。二十九日さんは、よくそうして僕を撫でてくれました」

「あの頃のおまえはもっと可愛かった。余計な上半身がついてなかったし」

「ひどいなあ」

笑って、田中はさっきまで私に触れていたその手を差し出した。少しささくれたその手のひら。私が子馬だった田中に差し出せなかったそれに、私はそうつと自分の手を乗せた。きゅつと包まれた体温が、嬉しいはずなのに悲しい。

あの日、こんな風にエデンに手を差し伸べていたなら、この悲しみはなかっただろうか。考えてももう、遅いの。

「帰りましょう、二十九日さん」

「……うん」

なんなら僕に乗ってくださいってもかまいませんよ、とうつとりとした表情で言う田中に、私は小さな声で「馬鹿馬」とだけ呟いた。別れは、明確な形を持って再び出逢えた私たちに近づいてきていた。

絶対に眠れないと思っていたのに、あんなに大泣きして色々あったせいか、家に帰って布団に入るなり私はぐっすりと深い眠りについてしまった。少しだけ腫れぼったさを感じる瞼を無理矢理押し上げれば、すでに日は昇り始めている。

こんな時にでも真っ先に考えるのは、厩舎にいるアルカディア号のこと。こんな時だからこそ、かもしれない。普段より少しだけ早く布団から出た私は、手早く着替えて裏の厩舎へとむかった。

朝日の中に黒鹿毛の美しい身体が輝いている。彼女は私を見ると、嬉しそうに首を振りながらこちらへと近づいてくる。そうして元氣のない私に気がついたのか、心配そうに肩の辺りを囁んできた。私

はその首を、安心させるように軽く叩く。

「ごめんね、アルカディア号。最近色々あって、なかなか一緒にいられないね」

その言葉を否定するように彼女はぶるり、と身体を震わせた。首から胸、背中に腹、お尻へと久しぶりにゆっくりと彼女の身体を撫でていく。朝日に輝くその毛並みは、けれど出逢った頃よりいくぶんか年を重ねて艶を失いつつあった。今は流れる時間のすべてが、切ない。

何だかまた泣きなくなってしまうて、私は彼女の横腹に顔を埋める。呼吸の度に震えるそこは、冬が近づきつつある冷えた空気の中で、唯一温かい場所だった。

そんな私を逆に宥めるように、後ろに首を巡らせたアルカディア号が、鼻先で私の頭を撫でてくれる。

「どんな顔をして何の言葉で、私はあいつを見送ればいいのかかわからない。どんなに遠くにいても、私のこと嫌いでも、いてくれさえすればそれでいいのに……」

「僕があなたを嫌うなんて、そんなのあり得ません！」

愚痴に似た呟きに、答える朗々とした声。かつんかつんと、聞き慣れた蹄の音が近づいてくるのを、私は胸が締め付けられるような気持ちで待った。そうして、すぐ後ろで止まったその音に、ようやくゆっくりと振り返る。

そこには、朝日に照らされて燃え立つような赤髪。薄いガラスを透してこちらを見つめる、清廉な青の瞳。何度見ても心をざわめかせるような、美貌のケンタウロス。

いつもの制服ではなく、いつか二人で出かけた時の白いシャツに身を包んだ田中は、にっこりとその秀麗な顔に笑みを浮かべた。

「おはようございます、二十九日さん！ 朝日に照らされるあなたは、本当に美しい」

「お、お前も下半身だけは綺麗な毛並みだなっ」

「ええ、そうでしょう？ 僕、色々な意味で下半身には自信があるんです。馬ですから！」

二十九日さんにお見せできなくて残念です、と続ける田中に、私は何もかもを一瞬忘れて蹴りを入れた。身体に染みついた条件反射つてすごいな。それを受けてこの上なく嬉しそうにする田中もまた、ある意味で通常運転だった。

一気に昨日からの重苦しい空気だとか、泣きそうだったことなんかが飛んでいってしまい、私は大きなため息とともに肩に入っていた力を抜く。

「二十九日さん、朝ご飯まだでしょう？ 僕、おにぎり作ってきたんです。お茶もいれますから、一緒に食べましょう！」

「家事ができる馬アピールとかすごうざいけど、仕方ないから家にかけてやる。アルカディア号の食事の支度を済ませるから、先に行ってて」

「前半の刺々しさが気になりますけど、嬉しいので聞かなかったことにしますっ」

いそいそと足洗い場で汚れを落とし、勝手口から家の中に入っていく田中の背中に、私はとりあえずひと言付け加えた。

「それと、布団の匂いとか嗅いだら、お前の朝ご飯は自動的に生にんじんになるから」

「……はい」

その間は何だ、その間は！

なぜかひどく肩を落としてしょんぼりと家に消えていく田中を、やっぱり自分は何か間違ったんじゃないか、と思いつつ見送った。

それから私たちは、運命の日だというのに、なんでか家でのんびりとした時間を過ごしてしまった。

田中の身体を背もたれ代わりに、『田中スペシャル』とかいういれ方でいれてもらったコーヒーを飲みつつ、どうでもいいくだらない話をぼつぼつとする。

温かな身体。きちんと重みと熱を持つて、ここにある。呼吸をする度に同じように上下する自分の身体が、まるで田中と一体になつていくような気すらしていた。

ずっと、何か欠けていると思っていたもの。それが、今ここにあった。満ち足りて、安堵して、私はいつの間にかうたた寝をしてしまっていたらしい。

口元に流れていた髪の一筋を、長く少し節ばった指がよけてくれたその気配に、ふっと目を開けた。

「あ、起こしちゃいました？」

「田中……」

部屋の中はもう、夕焼けの色に染まりつつある。私はとたんに、物悲しくなつてよけいに顔を田中の身体へと押しつけた。その私にふ、と田中の笑う気配。大きくて温かな手のひらが、私の頭を撫でてくれた。

「途中でアルカディアさんのところ行って、お世話しておきましたか

ら。戻ってきて元の体勢にしても、二十九日さんちつとも起きないで、ものすごく可愛かったです」

「馬鹿！ どうしてもっと早く起こしてくれないのっ」

愛おしいものを見つめる瞳でそう言う田中に、私はほとんど八つ当たりで感情をぶつける。

最後の日なのに。もう、会えなくなるのに。

それなのに、眠ってその大半を失ってしまうなんて、どこまで私は馬鹿なんだろう。

「僕はとても幸せでしたよ？」

「過去形にしないで！」

「僕はとても幸せなんですよ、二十九日さん」

泣く代わりに睨み付ける私の目をしっかりと捉えて、田中はその顔にもものすごく甘ったるい笑みを浮かべた。そうしてふっと外を指さす。

「よろしければ、あの夕陽の丘へと行ってみませんか？」

初めて田中の誘いを受けたあの日に、連れて行ってもらったあの場所。今のように、眠ってしまった私を、田中が優しく見守っていたあの日。

こいつはどんな想いで過ごしていたんだろうか。

優しく促してくるその薄い青の瞳を見つめ、私はゆっくりと頷いた。それが最後になるのだと、わかったから。

さよなら

最初にそうした時よりも自然に、私と田中はどちらからともなく手を繋いで歩く。

いつも少しだけ荒れていて、かさついて、でも温かくて。そうして、まるでそれは私のためにあるとでもいうように、ぴったりと重なり合う。普段はひどく冷たい私の手は、今は田中の手の中でその温もりを分け与えられていた。

急ぐこともなく、人の足と馬の足はゆっくりと道を行く。すでに暮れかけている空には、巢へと戻っていくのだろう鳥が一羽飛び去っていった。なんていうことはない、私のいつもの日常。違うのは、隣にある体温だけ。

するり、と田中の長めの指が私の指の間に潜り込んでくる。そうしてさらにぎゅっと強く握りこまれた自分の手を見て、それから少し上にある田中の顔を見上げた。

「すみません、調子に乗りました！」

「まだ何も言っていないだろうがっ！」

びくつと怯えたように肩を揺らした田中に、私はわざと不機嫌な顔を作って答えた。本当は、ちょっと泣きそうだったんだけど。

そんなことわかっていているという風に笑う田中から目を逸らした先に、いつかのあの丘が見えてきた。田中は『夕陽の丘』なんて乙女チックに命名しているが、丘というほど広いわけでも大きいわけでもない。

ただ、小高い場所にあるならかな斜面は、この小さな集落を見通すのに最適だし、日が沈むところをそれなりに美しく鑑賞できる。

田中と私が初めて二人で来た場所。

そして、初めて抱き締められた場所でもある。

『夕陽なんて、いつだって見られる』

そう言った私に、田中はただ笑ってみせるだけだった。あの時にはもう、いつかくる別れのことを考えていたんだろうか。

ちらりと再び田中を見上げると、その美しい横顔は染まり始めた空と同じ色に照らされていた。赤い髪も、ガラスの底のように透き通る青の瞳も、みんな。

ふたりとも無言で一番高いところまで昇ると、その場に腰を下ろした。さっきまでのように、私は温かな田中の身体を背もたれにして寄りかかる。その肩に、田中の腕が回された。

「最後だから、いいですよね」

「そういう言い方嫌いなんだけど。ていうか、おまえなんかもう飼いい馬でもないのに馴れ馴れしい」

「こちらに来て初めてアルカディアさんを見た時には、ちょっとどころじゃく嫉妬しましたよ、僕。できれば厩舎で飼ってもらおうと思ってたのに……」

「今さらつと気持ち悪いこと言われた気がする」

ベルベットののような手触りの尻に手を伸ばし、撫でる。もういいや。いつまでも意地を張っていてもしょうがない。正直、ずっと触りたかった尻だ。

どこぞの駐在ではないけれど、本当によく締まっただいい筋肉のついた尻はいい。馬に限るけれど。

「あつ、そんなに触られると僕ちょっと暴れ馬になりそうっていうか」

「そのための上半身だろうが。理性でなんとかしろ」

「わあ、すごく斜め上の的に初めてケンタウロスを認めてもらった気がします」

白い頬を上気させた田中はその上半身を少し捻って、寄りかかった私の首筋に顔を近付けてくる。妙に身体が柔らかい奴って、腹立つ。

ふんふん、と匂いを嗅ぐように首筋にかかる鼻息が、こそばゆい。背筋が甘く痺れる感触に、私はちよつと慌てて撫でていた尻を思い切りつねってみた。

「あいたつ。ひどいですよ、二十九日さん！」

「おつ、おまえが変なことしてくるからだ！ 許可なく匂いを嗅ぐんじゃないっ」

「じゃあ、嗅がせてくださいお願いします」

「お前は男としてのプライドってもんがないのか！」

なんだか危険な空気を感じてさつと身を離れた私に、思い詰めたような熱のこもった瞳をむけ、田中は潔く頭を下げてくる。

そうして、真っ赤になって突っ込んだ私のその言葉に、顔を上げた田中はじりじりと身を寄せてきた。ひどく男臭く、笑う。逃げられないように私の手を強く掴んで、その彫刻のような顔を近付けて

「忘れていませんか、二十九日さん。僕は男じゃないですよ」

まるで私を優しく閉じこめるかのように、田中の腕が身体に回る。柔和な美貌に注目しがちだが、その身体は無駄なものが一切ついていない美しさに満ちていた。それこそ彫刻のような筋肉は熱く、私は思わず吐息を漏らす。

「なにっ……言っ……っ」

「僕は“オス”です。そこを忘れてもらっては困ります」

服の上から背筋をなぞられ、そのどこか背徳的な感触に私は身を震わせた。長く、優美で、しかし大きな男の手。抱き込まれるとちようど顔の辺りにくる筋ばった首筋も、色気すら感じる喉仏も、私を閉じこめている固い胸も全部男の……いや、オスである田中のものである。

身体中が心臓になってみたいに、お互いの鼓動が直接伝わってくる。

泣きたいような、叫びだしたいような、その無言の音が何よりも私たちの気持ちを伝えあっていた。

「二十九日さん……」

低く掠れた声に名を呼ばれ顔を上げれば、そこには消えることのない熱があった。氷の中に閉じこめられた炎がちらつく。

ずっと、私を見つめ続けたその瞳。こんな焦がれるような青を、今までどうやって私は誤魔化してきたんだろう。もう、つかまったら動けないのに。

「二十九日さん」

もう一度ゆつくりと囁かれ、私はかすかに震えて目を閉じる。

吐息が近づいてきたと思ったら、あっという間にすべてを飲み込まれてしまった。圧倒的に伝わる熱が、感触が、私の全部を造りかえていくような。

ひどく性急で、乱暴で、直接的な欲求をぶつけられた私は、ただひたすらにそれを受け止める。

背と腰に回され、これ以上ないくらいに密着した身体。私も田中

の首に手を回し、さらに奥へと誘うようにそうつと唇を開けばそこに、唇よりも熱く柔らかなものがさし込まれた。

苦しいくらいに追いかけられ、何度も角度を変えて重ねられる。近づけば近づくほど鮮明になるお互いの身体の線が、ひたすらにもどかしい。ぴくり、と田中の身体が揺れる。私の身体も震える。この先を求めるようなそれに、切ない喜びが胸一杯に広がるのを感じた。

頭の中が甘く、甘く痺れ始める。もう何も考えたくないのに。このままでもいいのに。

それでも時間は待つてはくれない。

唇が赤く腫れるくらいの口付けが終わる頃、夕陽はもう沈みかけ、空はオレンジから紫、そして濃紺へと色を変えつつあった。

包み込む田中の手のひらに、頬を擦りつける。親指が優しく目尻をなぞり、そこに優しい唇が触れた。うつすらと目を開けた先に、儚く微笑む田中の顔。

「僕の代わりに、大野さんに謝っておいてくださいね。大野さん、昨日から高熱で寝付いちゃってるんで、話せなくて」

困ったように笑う田中に、私は無言で首を振る。いやいやと、駄々をこねる子供のように。

そんな私の額にもう一度唇が降る。

「僕もう、行かなきゃ」

「一緒に地獄に落ちてもいい。離れたくない……っ」

胸にすがりつく私の肩をそつと掴んで、田中は泣くのを堪えるようにして笑った。

ゆっくりと首を振って、私の願いを否定する。わかってる。引き留められはしない。でも、我慢できない。ねえ、田中。

田中。

田中。

エデンでも、罪でも、なんでもいいから。

「行かないで」

見上げたその美しい顔が、歪む。

強い力で胸に引き込まれ、苦しいくらいに抱き締められる。耳元でこぼれる嗚咽。優しくなんかない、その乱暴さに喜びが満ちあふれる。このまま息が止まってい。また失ってしまうくらいなら、全部いらない。

そのほの暗い願いを敏感に感じ取ったかのように、田中ははっと息を詰め、そして私から身を離れた。

じわりと滲んだ涙を誤魔化すように、につこりと笑う。とても無邪気なその笑みに、私の目からも涙が溢れた。

「さよなら」

そして田中の姿は、落ちていく夕陽と共に、消えた。

ふたつめのさよなら

どのくらいその場で呆然としていたのか、よく覚えていない。

気がついたら夕陽はとくに沈み、辺りには真っ暗な闇と虫の音。空気は冷え切っていたけれど、私はそれとは別に身体を震わせていた。

必死に、唇を強く噛み締めてそれをやり過ごそうとするけれど、強い波のようにそれは胸の奥から何度も何度も、無慈悲に私を突き上げる。喉からみっともない嗚咽がもれ始めた頃、誰かの温かな体温が私の肩を包み込んだ。

波打って歪む視界の中で、昭夫じいの奥さんである雪穂ばあ様が微笑む。小さくて皺だらけの手が優しく肩を撫で、それから小さい子供にするようにその胸の中へと抱き込んだ。

なんにも言わないで、背中をゆっくりさすられて、私はついに大声を出して泣き始める。それは、七歳の時エデンを失って以来の号泣だった。

また、失った。そしてもう二度と、この手には戻らない。

管理人が、この姿を見て大笑いしていても、もうどうでもいい。身の程知らずと罵られようと、私は確かに田中を愛していた。続いてきた日常が、長かったのか短かったのか。さっきまで確かに重なっていた温もりの残り香が、狂おしいほどに私を責める。

あの時のように私はまたすべてを無駄にしてしまった。いくらでも、告げる時間はあったのに。意地を張って、否定して。だから最初で最後の口付けだった。

「ここは寒いから、うちに行きましょう。ね」

優しいその声に促され、私はしゃくり上げながら頷き、立ち上る。

本当に子供の帰ったかのように、雪穂ばあに手を引かれて暖かな明かりの灯る二人の家へと連れて帰られた。家の中に入れば、いつも冗談ばかり言う昭夫じいも何も言わないで、よしよしと私の頭を撫でてくれる。もしかしたら田中が何かを頼んでいったのかもしれないし、そうでなくてもこの二人は全部わかってくれているような気がして、私は少しだけ安堵の息を吐く。

それでも止まらない涙を、ふたりは無理に止めさせるようなことも慰めるようなこともせず、ただずっとその晩は私の傍にいてくれた。温かいお茶を手に、こたつを囲んで。まるで、本当の家族みたいに。

私はその温もりに安心して、いつの間にか気を失うようにして眠りの中へと引き込まれていったのだった。

それから一年、私は何も変わることなくあの日の続きを生きていた。

見慣れた片田舎の、じいちゃんとはあちゃんの家。在宅勤務の傍ら馬を愛で、昭夫じいと冗談を交わし、駐在に蹴りを入れたりして。そうして毎日、郵便受けをのぞいて見る。

もしかしたら……そんな淡い希望を裏切られ続けても、それでもその習慣だけはやめられなかった。

もらった四葉はもうとつくに枯れて、茶色く変色してしまったそれはこの間私の指からぱらぱらとこぼれ落ちてしまった。だから時々、アルカディア号の散歩の途中で探してみたりするんだけど、いまだに四葉は見つからない。

配達の中で見つけました、なんて素知らぬふりをして送つてきたあいつは、どのくらいの時間をそれに費やしたことだろう。そんなことを想うと、私の胸はいまだに甘く痛む。誰も何も言わないけれど、私はずっとあのケンタウロスだけを待っている。

ときどき懐かしい夢を見て、笑う田中の顔を思い出す。それがあんまりにも嬉しそうだったから、もうどこにもいないことが信じられず、泣くこともあった。

それで赤い目をしたまま駐在に会えば、黒い瞳は気遣わしげに細められはしたが、彼はただ黙って私の頭を叩き立ち去るのみ。そういうところだけは妙に機微に長けていて、私は腫れた目で笑う。そんな、毎日だった。

「よお、尾野ちゃん！ 調子はどうよ？」

「とりあえず、一発殴らせて」

こちらから呼びだしておいてなんだが、この顔を見るといまだに胸がむかむかするのは、私の事情を考えれば仕方がないことだ。

挨拶もそこそこに殺気をみなぎらせる私に対して、もはやそんな態度には慣れっこになってしまった獣医は、それでも少し距離をとる。本気じゃないからびびらないでほしい。……多分。

「ねえ、俺が何をしたっていつのつ。なんか、去年の冬から尾野ちゃん、俺に対して冷たいよねっ!？」

「気にするな。ちょっと激しく心の底からその顔が気に入らないだけだから」

「そこまで言ったら気にさせて!」

無意識に寄った眉間の皺をほぐしながら、私は叫ぶ獣医を無視して厩舎へと歩き出す。

あの時自らを『楽園の管理人』と名乗った何者かは、どうもこの

どうしようもない獣医の身体を借りていただけの存在だったらしい。田中が消えてしまった次の日に、いつも通りにのうのうと顔を見せた獣医の顔に、私は思い切りアンパンチをかましてしまった。後悔はしていないが。

涙目になって何の事情も知らないで逃げ回る彼に、ようやく私が納得したのはその一週間後だった。あの時は裏山に埋められると思った、と獣医は震えていたらしい。

田中がいなくなったことを獣医は何も聞かなかったが、私のこの理不尽な八つ当たりを許してくれているあたり、こいつも何だかなだといいい奴ではあるのだ。

みんなに甘やかされている、と思う。それは嬉しくて、少し切ない。

「アルカディア号の調子が、昨日から少し悪いみたいで」

「了解。まあ、アルカディア号ももう大分歳だからなあ」

厩舎の中、敷き詰められた藁の上で、最愛のアルカディア号は心なしかぐつたりとして私たちを見上げている。昨日から食欲がぐくんと落ち、それからすぐに立ち上がることもしなくなってしまった。水を与えても、身体を撫でてやっても元氣のない鳴き声をもらすばかり。また急に寒くなってきたから、風邪でもひいてしまったんじゃないだろうか。

彼女の歳を考えると早めに手を打ったほうがいいだろうと、私は朝一番でこの獣医に連絡をとったのだ。

その獣医が真剣な顔になって、アルカディア号のあちこちを診察するのを私はただじっと眺めていた。そういえば、ここしばらくは散歩も少しきつそうにしていたかもしれない。

あれから一年しか経っていないのに、彼女は私の何倍も早く歳を重ねているようで、悲しい。

これでアルカディア号までいなくなったら、どうしたらいいんだ

ろう。それでも毎日が続ける意味が、私に残るんだろうか。

「んー、感冒ばくもあるけど、体力自体が少し落ちてる感じはするな。食欲もないんだっけ？」

「昨日からあまり食べられないみたいで。水は少し飲むんだけど」

「粘膜とって調べてみるよ。あとは対処療法になるから。できるだけ安静にして」

「わかった」

容態が変わるようなことがあれば、いつ呼びだしてもらってもかまわないから、と言い残し、獣医は帰っていった。

私は苦しそうに咳をするアルカディア号を前に少し迷うと、いつかの時のように母屋の中へと彼女を導く。苦しそうに歩く姿に胸は痛むが、あのぼろくて屋根にもがたが来始めている厩舎よりも、中のほうが寒さもしのげるだろう。もう少し早く、冬は中に入れてあげていればよかった。

そうして横たわる彼女の傍に、私も布団を敷いて座り込む。少しだけ熱く感じるその身体を撫でれば、彼女はいつもよりずっと甘えた仕草で鼻先を私に押しつけてきた。

「大丈夫だよ、アルカディア号。ずっとここににいるからね」

私の言葉に、アルカディア号は嬉しそうにぶるぶると鳴いて答え目を細めた。

時には親友で、時にはお姉さんで、そしていつもお母さんみたいなそんな存在。ここにいてくれるだけで、甘やかすようにして私が甘えている。

「ずっと、一緒だからね」

鼻先を撫でながら私はそう言って、ゆっくりと閉じられていくその瞳を見つめていた。

そうしてその呼吸が静かになるのを、抱き締めたままで感じる。天国の扉を叩くように、ひとつ、またひとつ。緩慢になっていくそれを聞きながら、私はひたすらに堪えた。

最期まで絶対に泣かない。

心配をかけないように、彼女には安心して行ってもらいたかったから。

田中のいる、楽園へ。

次の日の早朝、アルカディア号は静かに息を引き取った。

私は冷たくなったその身体を抱きながら、泣く。神様がいるのなら、私には特別意地悪なんだと、唇を噛み締めながら。

ふたつめのさよなら（後書き）

馬の病気や診察のやり方等々、すべて想像です。間違っていたら、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0485x/>

ケンタウロスと私

2012年1月13日01時47分発行